県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書

学頭遺跡・八児遺跡

1995.3

宮崎県教育委員会

県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書

学頭遺跡・八児遺跡

1995.3

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では、県高岡土木事務所の依頼を受け、平成２年度から平成６年度にかけて、県道高岡・郡司分線改良工事に伴い高岡町に所在する学頭遺跡、八児遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

いずれも狭小な面積での調査の積み重ねでありましたが、縄文時代から中世にいたる各時代の豊富な遺構と遺物が検出され、それぞれに宮崎平野部の歴史解明の上で貴重な成果となっております。

これらの貴重な成果が、学術関係者のみならず社会教育・学校教育の中で役立てられ、文化財保護行政の一層の発展の一助となることを期待します。

平成７年３月31日

宮崎県教育委員会

教育長　田　原　直　廣

例　　言

1　本書は、県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴い、宮崎県高岡土木事務所の依頼を受けて県教育委員会が実施した２遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査の期間および調査体制は、第Ⅰ章第２節のとうりである。

3　本報告書の執筆分担については、目次に明記しているとおりである。

4　出土遺物は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　序説
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の組織……1
第３節　遺跡の歴史的環境……2

第Ⅱ章　学頭遺跡の調査
第１節　調査区の設定と概要……4
第２節　遺構……4
(1)　弥生～古墳時代の遺構……4
(2)　中世の遺構……14
(3)　時期不明の遺構……14
第３節　遺物……21
(1)　縄文時代の遺物……21
(2)　弥生～古墳時代の遺物……40
(3)　中世～近世の遺物……69
(4)　弥生～近世の石器および古銭……72

第Ⅲ章　八児遺跡の調査
第１節　第Ⅰ区の調査……74
第２節　第Ⅱ区の調査……91

第Ⅳ章　結語……97

挿図目次

第１図　遺跡位置図(1/50000)……3
第２図　学頭遺跡調査区平面図(1/2000,1/200)…５～６
第３図　学頭遺跡周辺地形図(1/5000)……7
第４図　２号住居遺構実測図……8
第５図　２、３号住居出土遺物実測図……9
第６図　１号土坑遺構実測図……9
第７図　１号土坑出土遺物実測図……9
第８図　１号溝状遺構出土遺物実測図……11
第９図　１号溝状遺構出土遺物実測図……12
第10図　１号溝状遺構出土遺物実測図……13
第11図　６号溝状遺構出土遺物実測図……13
第12図　周溝状遺構実測図……15
第13図　周溝状遺構出土遺物実測図……15
第14図　中世の遺構出土遺物実測図……16
第15図　石組遺構実測図……17
第16図　時期不明の遺構出土遺物実測図……17
第17図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……24
第18図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……25
第19図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……26
第20図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……27
第21図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……28
第22図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……29
第23図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……30
第24図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……31
第25図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……32
第26図　学頭遺跡出土縄文土器実測図……33

挿図目次

第27図　石器実測図……39
第28図　弥生～古墳時代土器実測図(1)……42
第29図　弥生～古墳時代土器実測図(2)……43
第30図　弥生～古墳時代土器実測図(3)……44
第31図　弥生～古墳時代土器実測図(4)……45
第32図　弥生～古墳時代土器実測図(5)……46
第33図　弥生～古墳時代土器実測図(6)……47
第34図　弥生～古墳時代土器実測図(7)……48
第35図　弥生～古墳時代土器実測図(8)……49
第36図　弥生～古墳時代土器実測図(9)……50
第37図　弥生～古墳時代土器実測図(10)……51
第38図　弥生～古墳時代土器実測図(11)……52
第39図　弥生～古墳時代土器実測図(12)……53
第40図　弥生～古墳時代土器実測図(13)……54
第41図　弥生～古墳時代土器実測図(14)……55
第42図　弥生～古墳時代土器実測図(15)……56
第43図　弥生～古墳時代土器実測図(16)……57
第44図　中世～近世の遺物実測図(1)……70
第45図　中世～近世の遺物実測図(2)……71
第46図　石器及び古銭実測図……73
第47図　遺跡周辺図(1/500)……75
第48図　遺構配置図(1/200)……76
第49図　土壙墓・溝及び周辺遺構図(1/40)……77
第50図　掘立柱建物及び周辺遺構(1/40)……78
第51図　柱穴71～75(1/40)……79
第52図　土壙２・３及び周辺遺構図(1/40)……80
第53図　竪穴住居址(1/40)……81
第54図　土壙墓(1/20)……82
第55図　住居址出土土器(1/3)……83
第56図　住居址出土土器(1/3)……84
第57図　土壙・溝・柱穴出土土器(1/3)……85
第58図　土壙墓出土土器・鉄器・銅器(1/2)……86
第59図　土壙墓出土石鍋(1/2)……87
第60図　八児遺跡土壙実測図(1/3)……91
第61図　八児遺跡遺構実測図(1/50)……91
第62図　八児遺跡遺物実測図(土師質土器)……93
第63図　八児遺跡遺物実測図(土師質土器・土錘・陶磁器)……94
第64図　八児遺跡遺物実測図(陶磁器・軽石製品)……95

表目次

第１表　２・３号住居出土土器観察表……18
第２表　１号土壙出土土器観察表……18
第３表　溝状遺構出土土器観察表(1)……18
第４表　溝状遺構出土土器観察表(2)……19
第５表　周溝状遺構出土土器観察表……19
第６表　周溝状遺構出土遺物観察表……19
第７表　時期不明遺構出土土器観察表……20
第８表　時期不明遺構出土遺物観察表……20
第９表　時期不明遺構出土石器観察表……20
第10表　縄文土器観察表(1)……23
第11表　縄文土器観察表(2)……34
第12表　縄文土器観察表(3)……35
第13表　縄文土器観察表(4)……36
第14表　土器片加工円盤・土器片錘観察表……37
第15表　石器計測表……38
第16表　弥生～古墳時代土器観察表(1)……58
第17表　弥生～古墳時代土器観察表(2)……59
第18表　弥生～古墳時代土器観察表(3)……60
第19表　弥生～古墳時代土器観察表(4)……61
第20表　弥生～古墳時代土器観察表(5)……62
第21表　弥生～古墳時代土器観察表(6)……63
第22表　弥生～古墳時代土器観察表(7)……64
第23表　弥生～古墳時代土器観察表(8)……65
第24表　弥生～古墳時代土器観察表(9)……66
第25表　弥生～古墳時代土器観察表(10)……67
第26表　弥生～古墳時代土器観察表(11)……68
第27表　中世～近世の遺物観察表(1)……69
第28表　中世～近世の遺物観察表(2)……72
第29表　石器および古銭計測表……72
第30表　八児遺跡遺物一覧表(1)……89
第31表　八児遺跡遺物一覧表(2)……90
第32表　八児遺跡未切り底土師質土器法量表(1/2)……92
第33表　八児遺跡第Ⅱ区出土遺物観察表(1)……95
第34表　八児遺跡第Ⅱ区出土遺物観察表(2)……96

第Ⅰ章　序　　説

第1節　調査に至る経緯

学頭遺跡・八児遺跡は、高岡町大字下倉永に所在する。国道268号線の花見橋の東で南下して穆佐へ抜ける県道高岡・郡司分線道路改良事業により影響を受ける地点について発掘調査の対象とし、遺跡の位置関係から高岡町遺跡詳細分布調査による宮水流第1遺跡に隣接する遺跡を八児遺跡として、巣野神社周辺を学頭遺跡とした。

学頭遺跡は、古くから土器の出土が確認され有力な遺跡として知られていたが、調査の結果は当初の予想を越えて、多量の土器の出土、縄文時代から中世に至る多様な時期の遺構、遺物の検出・出土により多くの成果を得ることができた。

発掘調査は、道路工事の計画に先行する形で学頭遺跡は実質3ケ年・6次、八児遺跡は2ケ年・2次にわたり実施することになった。

学頭遺跡

場所　宮崎郡高岡町大字下倉永687－1、686－1ほか

期間　一次調査　　平成2年2月19日～3月23日

　　二次調査　　平成3年1月28日～2月15日

　　三・四次調査　平成3年7月2日～12月6日

　　五次調査　　平成5年6月22日～9月18日

　　六次調査　　平成5年10月28日～平成6年1月19日

八児遺跡

場所　宮崎郡高岡町大字下倉永402ほか

期間　一次調査　　平成2年9月20日～10月5日

　　二次調査　　平成4年2月24日～3月3日

第2節　調査の組織

調査組織は以下の通りである。

調査体制

調査主体　県教育委員会

教　育　長　児玉郁夫（昭和63年度～平成2年度）

　　高山義孝（平成3年度～平成5年度）

　　田原直廣（平成6年度）

教育次長　増井彬宏（平成元年度～2年度）

　　安田天祥（平成3年度～4年度）

　　八木　洋（平成5年度～6年度）

教育次長　高山義孝（昭和63年度～平成２年度）
　　宮路幸雄（平成３年度～４年度）
　　中田　忠（平成５年度～６年度）
文化課長　梨岡　孝（平成２年度）
　　長友　巌（平成３年度）
　　甲斐教雄（平成４年度～５年度）
　　江崎富治（平成６年度）
同課長補佐　片野坂次彦（平成元年度～２年度）
　　串間安圀（平成３年度～４年度）
　　田中雅文（平成５年度～６年度）
庶務係長　小倉茂光（昭和63年度～平成２年度）
　　税田輝彦（平成３年度～５年度）
　　髙山惠元（平成６年度）
埋蔵文化財係長　岩永哲夫（昭和63年度～）
（平成５年度から埋蔵文化財第一係）
主　　査　北郷泰道（学頭遺跡２・４次調査・八児遺跡２次調査担当）
　〃　　石川悦雄（八児遺跡１次調査担当）
　〃　　菅付和樹（学頭遺跡３次調査担当）
主　　事　長友郁子（学頭遺跡１次調査担当）
　〃　　松林豊樹（学頭遺跡５・６次調査担当）

第３節　遺跡の歴史的環境

学頭遺跡（第１図１）、八児遺跡（第１図２）は、ともに大淀川に注ぐ江川と瓜田川の小河川に挟まれ、八児遺跡は標高12m、学頭遺跡は標高14m台の微高地上に立地する。北から八児遺跡、宮水流遺跡（第１図３）、学頭遺跡と密度高く遺跡が連続している。学頭遺跡は、縄文時代では前期からの遺物が見られるが、顕著には後期に出土が集中し、弥生時代では中期から後期に中心があり、古墳時代初頭まで継続する。一方、八児遺跡は、中世期を中心とした遺構・遺物が出土している。

高岡町内での遺跡の様相は、未で断片的なところが多いが、近年の発掘調査の進展により次第に明らかになりつつある。旧石器時代では、まだ発掘調査例はなく表採資料として久木野遺跡周辺での剝片尖頭器が知られているのみである。縄文時代では、早期の遺跡が増加し横山第１遺跡（第１図７）、宗栄司遺跡（第１図５）などで集石遺構に伴い押型文土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、まだ類例が少なく今回の学頭遺跡の発掘調査の成果は今後とも重要な資料として位置付けられることになるであろう。

古墳時代では、古墳分布の密度は高くはなく東高岡地区の３基（第１図８）が県指定史跡として保存されている。しかし、南九州独特の地下式横穴墓も分布し、久木野地下式横穴墓群の３基の調査例がある。

古墳時代以降では、学頭遺跡などの西３㎞に、日向の３高城（木城町・新納院高城、高岡町・穆佐院穆佐城、高城町・三侯院月山日和城）の一つとして数えられる、代表的な中世城郭として知られる穆佐城跡（第１図４）が所在している。そのため、麓集落に関連する中世期の集落なども形成されている。八児遺跡などはそうした中に位置付けられる遺跡であろう。

第１図　遺跡位置図(1：50,000)

1．学園遺跡　2．八児遺跡　3．宮水流遺跡　4．穆佐城跡　5．宗栄司遺跡　6．花見貝塚　7．横山第１遺跡
8．高岡古墳群　9．五ツ塚1-4号墳

第Ⅱ章　学頭遺跡の調査

第１節　調査区の設定と概要

１次調査は、一進の調査のうち最も西側に位置し、調査区としても狭小なものである。縄文土器片などの出土をみたが、後の調査で判明するように谷地形の中にあり、周辺からの流れ込みの場所である。

２次調査は、１次調査区の東から栗野神社までの延長40ｍを幅１ｍで側溝工事部分を対象として実施した。多量の土器を包含する溝状遺構のほか柱穴、土坑等の検出を見ている。

３次調査は、２次調査の拡張として新設道路部分の調査となった。２次調査の溝状遺構の延長が確認され、そのほか住居跡、土坑などが検出されている。

４次調査は、２・３次調査の溝状遺構が延長し、なお残存する可能性があるため、現道部分の改良に伴って調査を実施した。予想通り溝状遺構は良好に残存し多量の土器が出土した。

５次調査は、栗野神社の向い側の道路交差点部分を中心として調査を実施した。６次調査は、栗野神社から東の道路改良部分へと調査区が移り、一進の学頭遺跡の調査の中では最も東部分の遺跡の様相を把握することになった。

第２節　遺構

学頭遺跡では狭い調査範囲に比して著しく多くの遺物が出土した。その大部分は縄文時代から古墳時代の所産と考えられるが、この時期に該当する遺構はごくわずかしかない。その他の遺構は時期的な位置付けが難しいが、ほとんどは近世以降のものと考えられる。以下時期の特定が比較的可能な遺構について個別にとりあげてゆく。なお遺物の詳細は観察表を参照されたい。

(1)　弥生時代～古墳時代

住居跡

学頭遺跡において住居跡と考えられる遺構は４つあるが、１号、３号は方形プランの一角とおもわれ、４号は硬化面を検出したのみである。遺物からおよその時期が知られるものは２、３号のみであった。

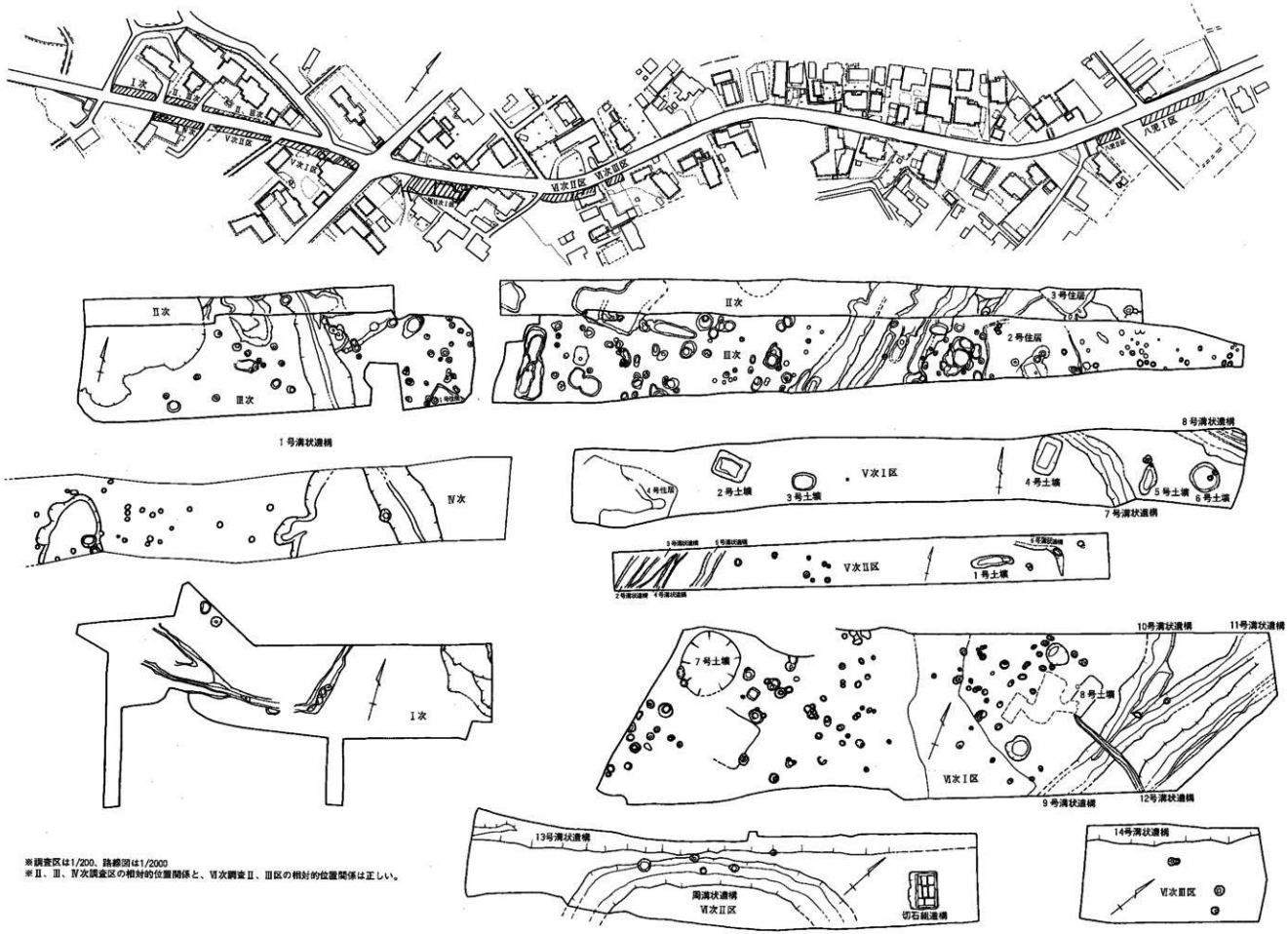
２号住居

２号住居は４軒のなかでは最も検出面積が広いが、遺物はあまり良好な状態では出土していない。検出状況から１辺５ｍ前後の方形プランと考えられ、深さは検出面から30cmほどであった。主柱は２本とおもわれ、中央部に浅い土坑がみられる。この中央土坑の北側部分に２つの深い柱穴がみられ、主柱穴をむすんだ東西の一直線上に並ぶ。またこの土坑周囲に硬化面がみられる。

遺物は２点のみ（第５図３、４）とりあげたが、３は甕の口縁部～頸部で、頸部に断面が三角形に近い刻目をもつ突帯がめぐる。４は胴部～底部で、胴部中位に大きい単位のタタキ調整痕がみられ、底部はやや上げ底である。この遺物以外のものをふくめて、概ね弥生末～古墳初頭の時期が考えられる。

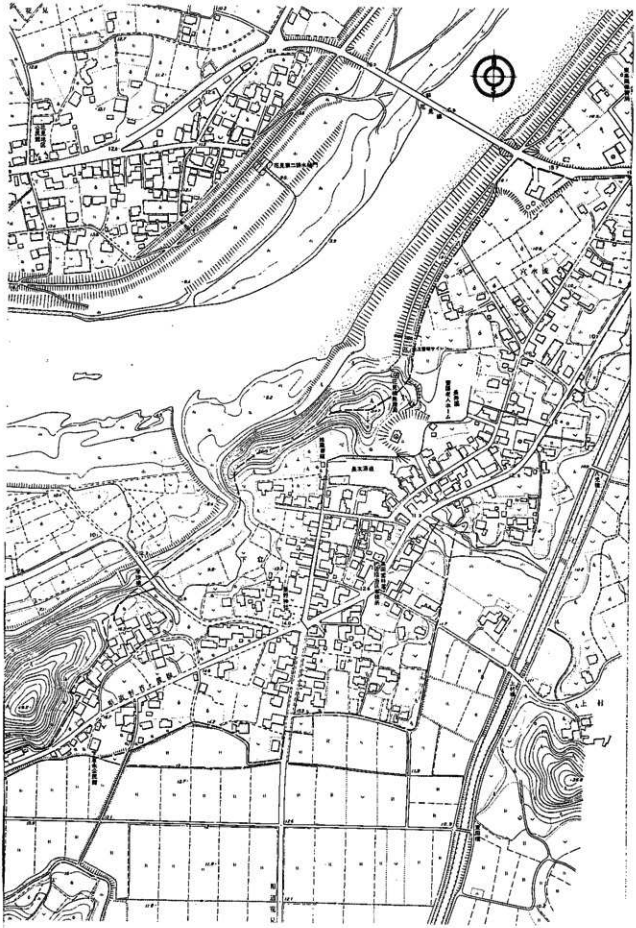
３号住居

２号住居の北側にコーナーの一部とおもわれる落ち込みが検出され、これを３号住居とした。検出面からの深さは0.5ｍでそのほかの遺構の規模などは不明だが方形プランとみられる。遺物は少ないものの完形に近いものがみられる。（５図）１、５は胴部外面に叩き調整を施す甕で１は口縁部に最大径をもち胴部最大径は胴部上半にあり、口唇部には丸くしあげられている。５は胴部の中位で最大径をもつ。２は甕で頸部で強く屈曲し外反しながら外方に延びる。６は高杯の杯部と脚部の接合部分である。７は高杯の脚部で、屈曲せずに裾部まで外反しながらひろがる。８は器台で最大径を口縁部にもち、中央よりもやや上位で鋭く屈曲し

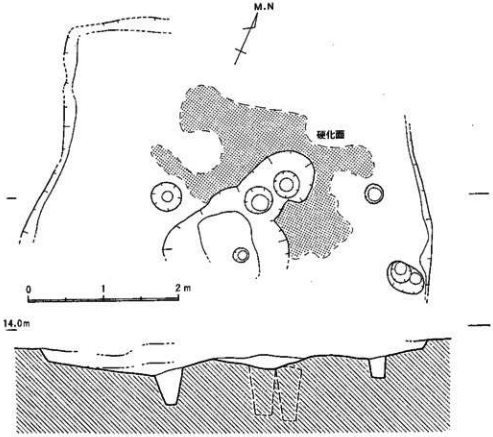


※調査区は1/200、路線図は1/2000
※Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ次調査区の相対的位置関係と、Ⅵ次調査Ⅱ、Ⅲ区の相対的位置関係は正しい。

第２図　学頭遺跡調査区位置図



第3図　学頭・八児遺跡周辺地形図(1/3000)



第４図　学頭遺跡SA2遺構実測図(1/2)

直線的に裾部に続く。脚部の中位に５つの円形透かしをもつ。９も器台で直線的な脚部から中央よりもやや上位で鋭く屈曲し、わずかに外反しながら口縁へ続く。口縁部は複合口縁で、口縁部の外方に延びた拡張部に不規則な刻目を施している。遺物の時期としては弥生末～古墳時代初頭頃とおもわれる。

土坑

１号土坑（第６、７図）

１号土坑は５次調査の２区３層上面で検出された。東西に細長い楕円形を呈し、長軸約2.4ｍ、短軸約0.6ｍ、深さ約0.5ｍを計る。底は船底状で東側で２段に落ち込み、遺物は第４層から一括して出土している。

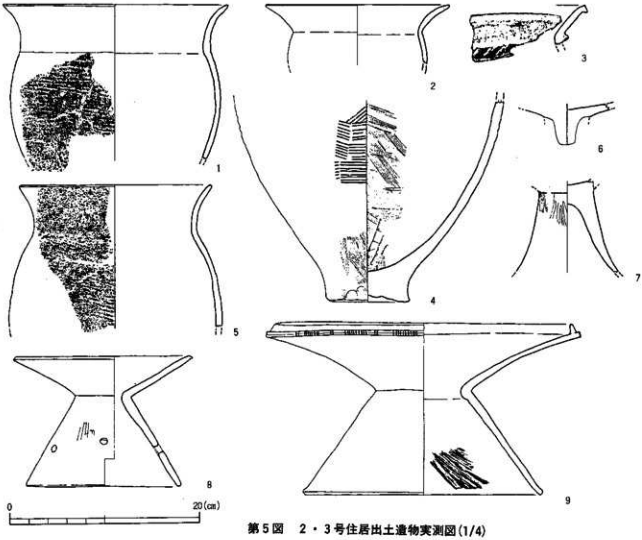
１は口縁部に断面台形の突帯をもつ小型の甕である。３は大型甕の口縁部でいわゆる逆Ｌ字状をなし、口唇部がややくぼむ。２、５はいわゆる下城系の甕で、口縁部の下位に一条の刻目突帯をめぐらせる。４、６は口縁部がほぼ水平方向にのびる甕の口縁部で、４は屈曲部がなめらかなカーブをえがくが、６は屈曲部に明瞭な稜線がみられる。これらの遺物はほぼ同一の時期（弥生時代中期後半）として考えられる。

溝状遺構

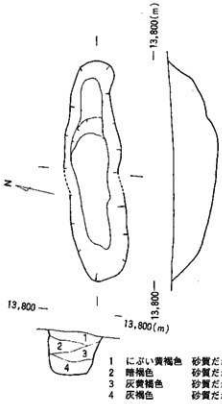
１号溝状遺構

２～４次調査において検出された。断面形がＶ字形を呈し、幅が約２ｍ、深さ約１ｍを計る。遺物はかなりの密度で出土した。(8.9.10図)

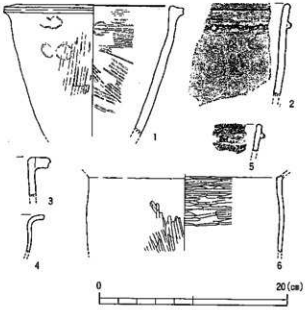
１～16、23は甕である。１はあまり張らない胴部から頸部で屈曲し、やや外反しながら口縁部へむかい、口縁部で最大径を計る。胴部の最大径を中央よりもやや上位にもち、底部はやや上げ底である。２、３、５、８は底部は不明だがほぼ１と同様の形態をもつ。４はかなり張った胴部から頸部で強く屈曲し、やや外反しながら口縁部へむかう。口唇部がやや肥厚している。６はあまり張らない胴部から強く屈曲しやや外反しながらおおきく外方にのびる。７はほぼ直立した胴部から強く屈曲していわゆる逆Ｌ字状の口縁部をなす。９、11はほぼ直立した口縁部下方に一条の刻み目突帯をめぐらすもので、９には口唇部にも刻み目がみられる。10はくの字状に屈曲した口縁部下位に一条の刻み目突帯をめぐらせる。15、23は器高がひくく、頸部から短く口縁がのびるもので、最大径は胴部にもつ。12、16は胴部片で、12は断面台形の突帯が一条みられ、16は



第5図　2・3号住居出土遺物実測図(1/4)



第6図　1号土壙遺構実測図(1/40)



第7図　1号土壙出土遺物実測図(1/4)

外側にタタキ調整がみられる。13、14、31は底部でともに平底を呈する。

17、20～30、32～34は壺である。17は小型で口縁部が直立からわずかに外方にひらく。27、28は大型と中形の複合口縁壺とみられ、27は口縁部の外方への拡張がみられる。20は頸部に波状の刻み目をもつ偏平な突帯をめぐらせる。21、22は肩部でそれぞれ一条、三条の突帯がみられる。24は肩部に櫛描波状文、胴部屈曲部の上下に羽状文を施す。26、32、33はほぼ球形の胴部で丸底を呈するとおもわれる。29、34は平底の底部で球形の胴部をもつ。30は平底の底部で底に竹管文状の痕跡がみられる。

36～43は高杯である。36は口縁部で杯部が二段に屈曲するとおもわれる。37～39は脚柱部で。やや内傾しながら杯部へ接続する。40はいわゆるエンタシス状の脚柱部で、41は内湾する脚部で40のような形態の脚柱部をもつとおもわれる。42は直立する脚柱部からゆるやかに外反しながら裾部に続き、その屈曲部につの円形透かしをもつ。43は口縁部と脚裾部が大きく開くもので、脚柱部中央が最も細くなる。44は器台の脚部とおもわれ、外面に細かい櫛描波状文を施す。18、19、35、45、46、49は鉢形土器である。35は明瞭な頸部屈曲がみられ、底部は胴部から段をもち、平底となる。47、48、50は小型器種である。47は胴部中央にあまい段をもち、上位に櫛描波状文を施す。

時期的には9、11のいわゆる下城系の甕の頃から40、41といったエンタシス状の脚柱部を持つ高杯、27、28の複合口縁壺のころまでと幅があり、出土位置などからも時期の決定は難しい。ここでは弥生中期後半以降のものとして扱っておく。

6号溝状遺構

5次調査2区において検出された。幅約0.9m、深さ約1.1mを計る。調査区の東端にその一部が確認されたのみだが多くの遺物が出土し、やはり時期差がみられる。(11図)

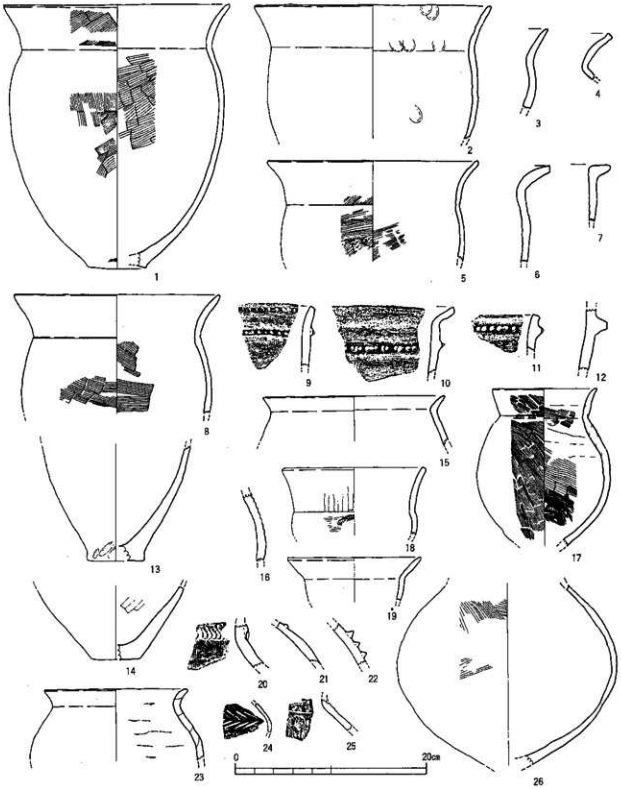
1～4、6、8は甕で、3はくの字口縁をもち頸部下に一条の刻み目突帯がめぐる。1.4は口縁部が外上方に延びるもので最大径をそれぞれ口縁部、胴部ではかる。2、6、8は平底の底部で2は胴部と底部の境に明瞭な段をもたず、6、8は外反する。5、7、9～17は壺である。5、7は複合口縁で、7は口縁部外面に櫛描波状文を施す。9は内傾した頸部から口縁部で短く外反する。10は口縁部が直立する短径のものである。11は底部が円盤状にとびだすもの、12、14は胴部が菱形状を呈し平底である。13は胴部に刻み目をもつ突帯をはさんで重孤文を施しており壺の胴部とおもわれる。16は重孤文が施された胴部片である。17は胴部屈曲部に小さな突帯をめぐらせ、その上位に櫛描波状文、下位に幾何学的な線刻を施す。15は脚付きの鉢形土器で、胴部中央よりやや上位に小さな突帯がめぐり、口縁部からその突帯の間に細かいやや乱れた櫛描波状文を施す。11は浅い鉢形土器で、高杯の杯部と類似した形態をしている。18は小型器種の鉢形土器である。

遺物の時期は3、13などに他の遺物よりもやや古い様相がみられ、全体として弥生後期～古墳時代初頭の中におさまると思われる。遺構の時期もこの時期を考えたい。

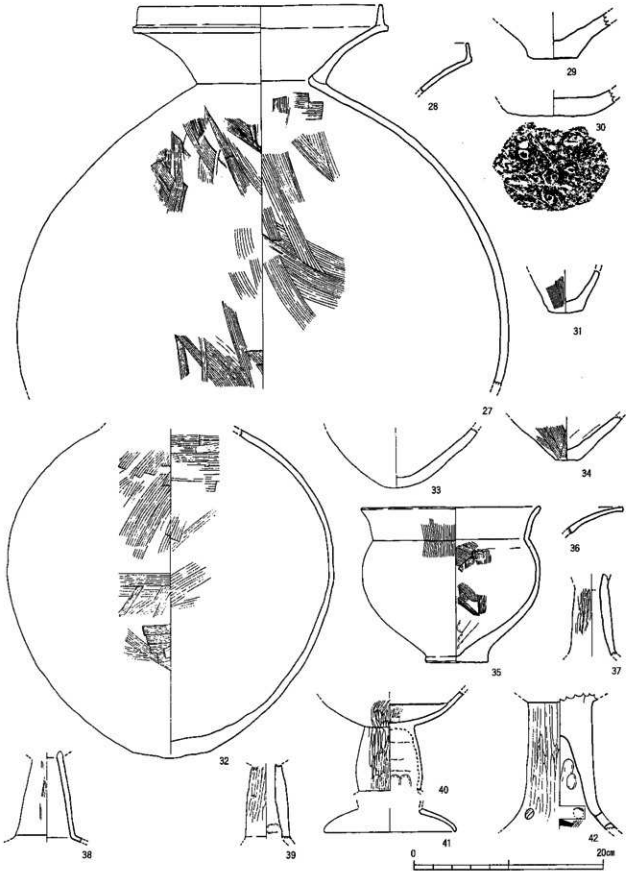
周溝状遺構（12図）

周溝状遺構は6次調査2区において検出された。幅約2m、深さ0.4mの浅い溝が弧を描きながら調査区南側に延びている。平面プランでみると円形というにはいびつで隅丸方形にちかい印象をうけるが、単なる溝状遺構の可能性もある。遺物は細片がまばらに出土したがその多くは底付近からの出土であった。(13図)

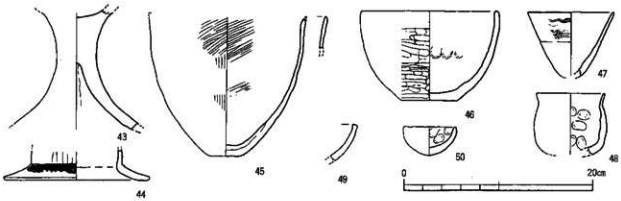
1は複合口縁壺で球形の胴部から頸部で外上方に屈曲し外反しながら口縁部へとむかう。口縁部の外方拡張部分と口唇部の端部は丸く仕上げられ、文様などはみられない。またこの壺の底部は5で、平底を呈する。1、5ともに風化が激しく、調整は不明である。2、3も複合口縁壺の口縁部とおもわれるが両者ともに口唇部を平坦にしあげている点で1とはことなる。4は甕の口縁部とおもわれる。6は16世紀代の明の染付けとみられるが、第1層からの出土で流れ込みとおもわれる。底付近からの出土遺物は器種、量ともに少ないが、古墳時代初頭の時期とおもわれる。



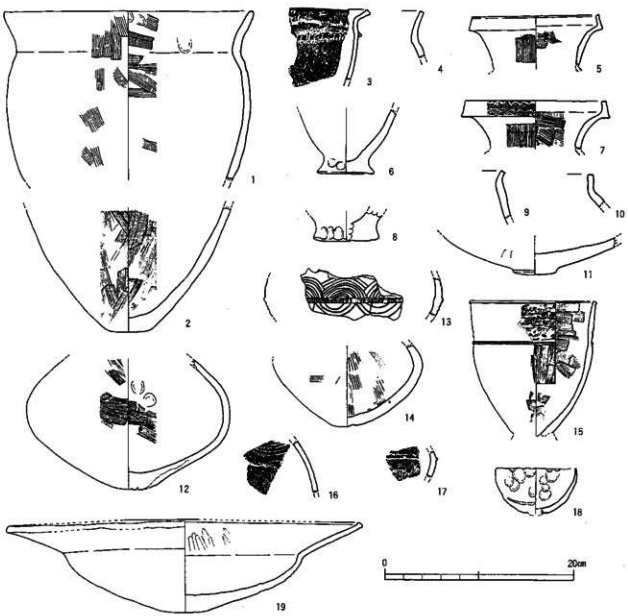
第８図　１号溝状遺構出土土器実測図(1)



第９号　１号溝状遺構出土遺物実測図(2)(1/4)



第10図　1号溝状遺構出土遺物実測図(3)(1/4)



第11図　6号溝状遺構遺物実測図(1/4)

(2) 中世の遺構

ここでは遺物から時期を特定することは難しいが、概ね中世の範囲内でとらえられるものをとりあげる。

溝状遺構

8号溝状遺構は5次調査1区第2層上面で検出された。幅約1.8m、深さ0.9mを計る。溝の北側で2段のテラスが確認された。検出できたのがごく一部のため遺物は3点のみだが、すべて床面付近からの出土で、青磁、土師皿の小破片であった。

9号溝状遺構は6次調査1区第2層上面で検出された。幅約1.3m、深さ約0.3mを計る。この溝は11号と同一の可能性が高い。遺物（14図）は12、14～20で、12は備前系の摺鉢、14～19、20は青磁椀、18は土垂である。時期としては12や14、16の線描蓮弁文、15の端反状の形態から15～16世紀頃のものとおもわれる。

10号溝状遺構は6次調査1区第2層上面で検出された。幅約1.3m、深さ約0.7mを計る。この溝は9、10号と切り合っているが、その前後関係は判断できなかった。遺物（14図）は、11、13で、13は底部に糸切り痕を残し、口縁部が端反状になる土師皿、11は外面に雷文帯をもつ青磁椀である。11の青磁から15～16世紀頃のものとおもわれる。

11号溝状遺構は6次調査1区第2層上面で検出された。幅約1.2m、深さ約0.4mを計る。遺物（14図）は1～10で、1は瓦質の羽釜もしくは火鉢とみられ胴部に菊花文がみられる。2、3の陶器は2が在地系、3が肥前系の瓶で、いずれも近世のものとおもわれ、流れ込みと考えられる。5、6、7は青磁椀である。4、8は土師皿でそれぞれ底に糸切り、ヘラ切りの痕跡を残す。9、10は備前系の摺鉢である。遺物の時期としては8の土師皿に古い様相がみられるが、5の青磁や、9、10の備前系摺鉢から15～16世紀頃のものとおもわれる。

12号溝状遺構は6次調査1区第2層上面で検出された。幅約1.5m、深さ約1mを計る。溝の東側に攪乱を受けているが、3面ほどの段が確認された。遺物はほとんどなかったものの、切り合っている溝の関係からやはり15～16世紀頃のものとおもわれる。

(3) 時期不明の遺構

住居

1号住居は3号住居と同様に方形プランの一角が検出された。遺物は少なく、時期の限定はさけたい。ここでは2点の遺物をあげたが（第16図1、3）、1は鋤先状を呈し、2は斜め上方に延び、ともに歪の口縁部である。

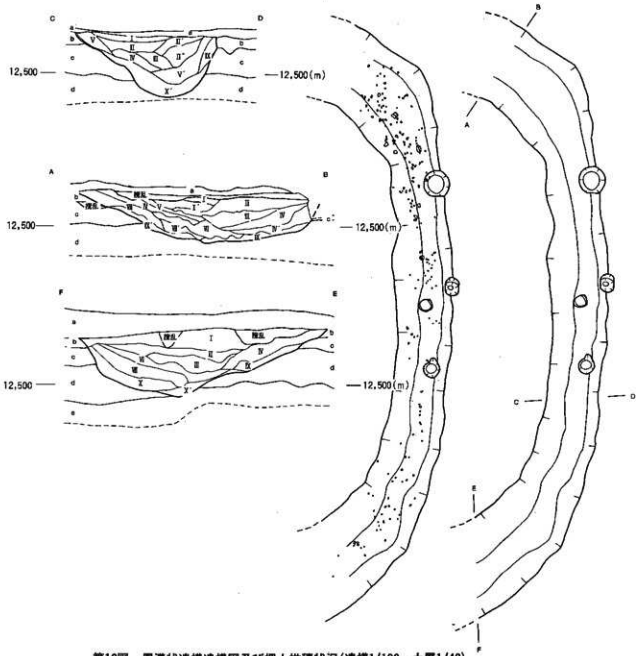
土坑

2号土坑は5次調査1区第3層から検出された。平面プランは長方形で底部分の長軸1.3m、短軸0.8m、深さは検出面から0.45mを計る。側壁、床に厚さ5cmほどの礫土を貼り付けており、遺物はほとんどみられなかった。

3号土坑は5次調査1区第3層から検出された。平面プランは楕円形で長軸2.3m、短軸0.6m、深さ0.1mを計る。中央東寄りに30cm大のやや偏平な石が埋め込まれたような状態で出土し、石の西側で焼土がやや浮いたかたちで検出された。遺物としては第27図30が半分にわれたような形の管玉の破片が1点みられたのみであった。

4号土坑は5次調査1区第2層から検出された。平面プランは長方形で底部分の長軸1.3m、短軸0.6m、深さは検出面から0.45mを計る。SC2と同様の構造のもので、遺物はほとんどみられなかった。

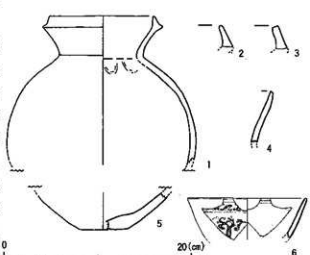
5号土坑は5次調査1区第2層から検出された。平面プランは楕円形で長軸1.6m、短軸0.7m、深さ0.3mを計る。底の中央部が最も窪んだ船底状を呈し北側の土坑端部に柱穴が1つみられる。遺物はほとんどみられなかった。



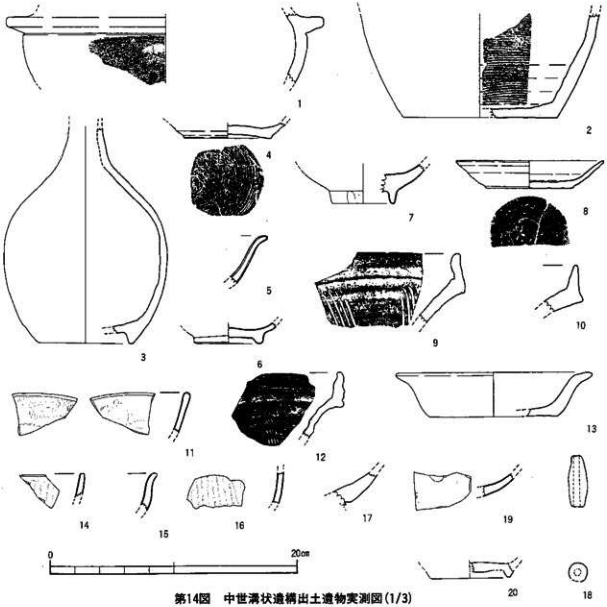
第12図　周溝状遺構遺構図及び埋土堆積状況(遺構1/100、土層1/40)

6号土坑は直径1.6mのほぼ円形プランで深さ0.15mを計る。遺物は縄文、弥生土器の細片がわずかにみられた。

7号土坑は6次調査1区2層上面で検出された。径約3mのほぼ円形プランを呈し、深さは最大で2.4mを計る。調査中の雨の影響で崩落したため正確な形状等は記録できなかったが、遺物（第16図2、4～9）は細片がかなり出土した。遺物からみるとかなりの時期幅がみられるが、床面付近からの出土はなかった。2は高杯の杯部である。4は壺の底部で外面に竹管文状の痕跡が2つみられる。5は土師皿で底部に糸切り痕跡を残す。6は陶器の底部で器種は不明である。7は東播系の捏鉢口縁部で注ぎ口状になるとみられる。8は青磁の椀、9は常滑焼の甕である。時期は古墳時代から中世のものまでみられる。



第13図　周溝状遺構出土遺物実測図(1/4)



第14図　中世溝状遺構出土遺物実測図(1/3)

溝状遺構

2号溝状遺構は5次調査2区で検出された。幅約0.8m、深さ0.4mを計る。

3号溝状遺構は5次調査2区で検出された。幅約0.5m、深さ0.1mを計る。

4号溝状遺構は5次調査2区で検出された。幅約0.5m、深さ0.2mを計る。

5号溝状遺構は5次調査2区で検出された。幅約0.8m、深さ0.1mを計る。

以上の溝は上層の堆積が攪乱をうけており、実際はもっと上層から掘り込まれていたものと考えられる。また、遺物はみられなかったため時期は不明である。

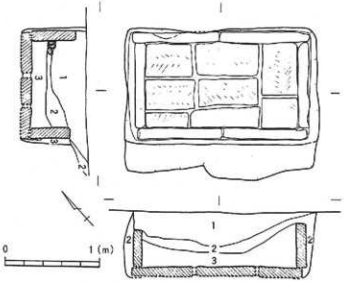
7号溝状遺構は5次調査1区第2層上面で検出された。幅約1.5m、深さ0.25mを計る。遺物はすべて細片で、量も少ないため時期不明である。

13号溝状遺構は6次調査2区第2層上面で検出された。現道路部分に掘り込まれており、幅、深さは不明である。また、遺物もなかったため時期不明である。

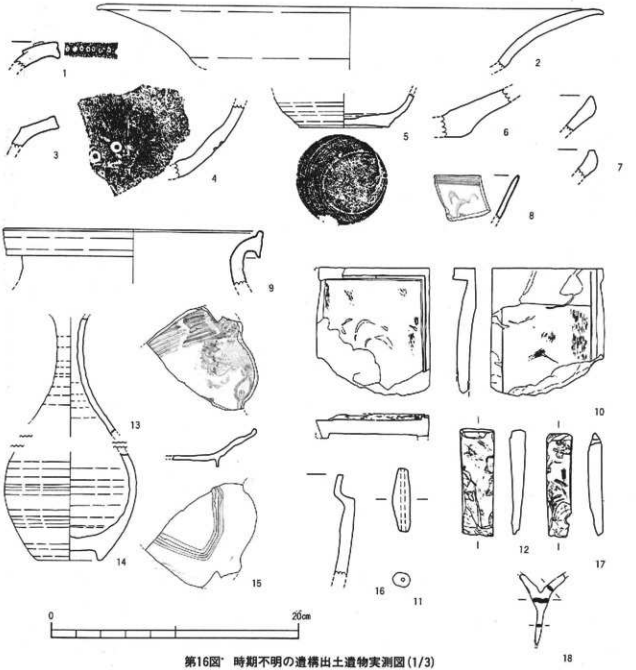
14号溝状遺構は6次調査3区第2層上面で検出された。検出状況から13号と同一のものとおもわれる。遺物は（16図10～16）すべて上層からの出土で、時期を特定できるものはない。10は両面硯、12、17は砥石である。13、14は同一個体で、白磁の瓶である。15は高台が菱形で口縁部が波状を呈する染め付けの皿で鳥が描かれている。16は陶器の壺である。

石組遺構

6次調査2区第2層上面で検出された。長辺60cm短辺30cmの長方形の切石を長軸1.8m、短軸1.1mの長方形に組み合わせ、岩のつぎめを丁寧に目張りしている。遺物はまったくみられなかった。



第15図　石組遺構遺構実測図(1/40)



第16図　時期不明の遺構出土遺物実測図(1/3)

第1表　2・3号住居出土土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整		色調		焼成	胎土	備考
				内器面	外器面	内器面	外器面			
5	1	甕(山線～鬼橋)	Ⅲ B トレ SAI-234	ナデ	ナデ・工具ナデタタキ	浅黄色・明褐灰	赤橙・橙 浅黄橙	良好	3.5～2mm以下の砂粒を含む	
5	2	甕(口線～鬼橋)	Ⅲ B トレ SAI-102, 7	ナデ	ナデ	橙・黄橙	浅黄色・橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含み、0.5mm以下の砂粒を含む	
5	3	壺(口線)	Ⅲ	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	橙・にぶい黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
5	4	甕(鬼部～底部)	Ⅲ-221, 317, 318, 319 B.C.D トレ SAI-1, 2, 3	ハケ目	タタキ・指ナデ ハケ目	褐灰	にぶい橙	＋	5.5mm～2mm以下の砂粒を含む	スス付着
5	5	甕(口線～鬼橋)	Ⅲ A トレ SAI-88, 233	ナデ	ナデ・タタキ	橙	浅黄橙・橙	＋	2mm以下の砂粒が少量、3mm以下の粒を多量に含む	
5	6	高杯(折部)	Ⅲ B トレ SAI-250	ナデ	ナデ	灰	黄橙	＋	2.5～1mm以下の砂粒を多く含む	
5	7	高杯(脚部)	Ⅲ B トレ SAI-172	ナデ	ヘラミガキ	にぶい橙・橙	橙・浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を多量に含む	黒炭
5	8	器台(杯)	Ⅲ C トレ AI-107	ナデ	ヘラミガキ・ナデ	浅黄橙	浅黄橙 黄橙・灰白	＋	0.5～1mm以下の砂粒が多い	黒鉱、五方透し
5	9	器台(口縁～脚部)	Ⅲ B トレ SAI-203	ナデ・ハケメ	ナデ・刷み	浅黄橙・橙	浅黄橙・橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	粗金口縁

第2表　1号土坑出土土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整		色調		焼成	胎土	備考
				内器面	外器面	内器面	外器面			
7	1	甕(上線～胴部)	V, Ⅱ SC Ⅰ	ハケ目のあとナデ指おさえ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙 にぶい赤褐	良好	3mm以下の砂粒を含む。2mm以下の砂粒を含む	黒鉱、スス付着
7	2	壺(口縁～胴部)	V, Ⅱ SC Ⅰ	ナデ	ナデ・炭帯	橙	暗褐	＋	2mm以下の砂粒を含む	
7	3	甕(上線)	V, Ⅱ SC Ⅰ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
7	4	壺(口線)	V, Ⅱ SC Ⅰ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	3.5mm以下の砂粒を含む	スス付着
7	5	甕(口線)	V, Ⅱ	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
7	6	甕(胴部)	V, Ⅱ SC	ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	明赤褐	赤褐・暗赤褐	＋	2mm以下の砂粒を少なく含む	

第3表　溝状遺構出土土器観察表(1)

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整		色調		焼成	胎土	備考
				内器面	外器面	内器面	外器面			
8	1	甕(口縁～底部)	Ⅲ-363, 1080, 1081 Ⅲ-2021	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	淡黄 にぶい黄橙	浅黄橙 黒褐色～黒褐	良好	5mm以下の砂粒を多く含む	黒鉱・スス付着
8	2	甕(口縁～胴部)	Ⅳ, SE-1	ナデ	ナデ	浅黄橙・橙	浅黄橙	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
8	3	甕(口縁～頸部)	Ⅳ, SE-1	ハケ目・ナデ	ナデ	黄橙	橙	＋	3～4mm程度の砂粒を多く含む	
8	4	壺(口縁～胴部)	Ⅳ, SE	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
8	5	甕(口縁～頸部)	Ⅳ, SR	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	黒鉱・スス付着
8	6	壺(口縁～頸部)	Ⅲ, WSE3下	ナデ	ナデ	橙	明褐灰	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	
8	7	壺(口縁～頸部)	Ⅲ, WSE3下	ハケ目	ナデ	黄橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
8	8	壺(口縁～胴部)	WSK3下 Ⅲ, SE3A	ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目	灰白	灰白	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	
8	9	壺(口縁)	Ⅲ, WSE3	ナデ	ナデ・ハケ目 炭帯直線木ずり	にぶい橙	にぶい黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
8	10	壺(口縁)	Ⅲ, SE3	ハケ目・ナデ	ナデ・炭帯刷毛	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	スス付着
8	11	壺(口縁)	Ⅲ, WSE3	ナデ・ハケ目	ナデ・炭帯刷毛	にぶい橙	にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
8	12	甕(胴部)	Ⅲ, WSE3 Ⅲ, WSE3下	ナデ	ナデ・炭帯	橙	にぶい橙・灰褐	＋	2.5mm以下の金雲母を多く含む	黒鉱
8	13	甕(胴部～底部)	Ⅳ, SE3	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙・にぶい橙	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	
8	14	壺(胴部～底部)	Ⅳ, SE1	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	2.5～5mm以下の砂粒を多く含む	黒鉱・スス付着
8	15	甕(胴部)	Ⅳ, SE	ナデ	ナデ	黄橙・明赤褐	黄橙・にぶい橙	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	
8	16	甕(胴部)	Ⅳ, SK	ナデ	ナデ・平行タタキ	浅黄橙	橙・浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
8	17	壺(口縁～頸部)	Ⅲ, SE3 Ⅲ-1140	ハケ目・ナデ・指おさえ	ハケ目・ナデ 指おさえ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂を含む	スス付着・黒変
8	18	壺(口縁～頸部)	Ⅲ-7 Ⅲ, WSE3	ナデ	ナデ・ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	
8	19	壺(口縁～頸部)	Ⅲ, WSK3	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	＋	0.5～2mmの砂粒を含む	
8	20	壺(頸部)	Ⅲ, WSE3	ハケ目 炭帯S字状の刷毛	ハケ目	浅黄橙	黄橙	＋	2～3mm程の砂粒を含む。1mm以下の砂粒を含む	
8	21	壺(頸部～胴部)	Ⅲ, SE3	不明	不明・炭帯	明黄褐	浅黄橙	＋	3mm大粒を含む。5mm以下の砂粒を含む	
8	22	壺(頸部)	Ⅲ, WSK3	ナデ	ナデ・炭帯	黄橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
8	23	壺(口縁～頸部)	Ⅳ, SE	ナデ	ナデ	橙・にぶい橙	浅黄橙 にぶい黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
8	24	壺(胴部)	Ⅲ, SE3	ナデ・ハケ目	ナデ・櫛描波状文 羽状文	黄橙	橙	＋	0.5mm以下の砂粒を少し含む	
8	25	壺(頸部～胴部)	Ⅲ, SE3	ナデ・指ナデ	ナデ	褐灰	黄橙	＋	3mm以下の砂粒を少し含む	
8	26	壺(頸部～胴部)	Ⅳ	ナデ	不明・ハケ目	黒褐	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
9	27	壺(口縁・頸部)	Ⅳ, SE-4	ハケ目のあとナデ	ハケ目のあとナデ	灰褐・にぶい橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	黒鉱
9	28	高杯(折部)	Ⅳ, SE-3	ナデ	櫛描波状文 ハケ目	橙	橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
9	29	壺(底部)	Ⅳ, SE	ナデ・指押え	ナデ	浅黄	黄橙	＋	3.5mm以下の粒を多く含む。1mm以下の砂粒が少し含む	
9	30	壺(底部)	Ⅳ, SR-1	ナデ	ナデ 刷毛の痕跡がみられる	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む。2mm以下の砂粒が多く含む	
9	31	ミニチュア(底部)	Ⅲ, SE3	ナデ・指押え	ハケ目	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	黒変

第４表　溝状遺構出土土器観察表(2)

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内部面	文様および調整 外部面	色調 内部面	色調 外部面	焼成	胎土	備考
9	32	皿(側部・底部)	Ⅱ-1063-1065 WSE3,SE3下	ハケ目のあとナデ	ハケ目	灰褐	橙	良好	3mm以下の砂粒を含む。1mm以下の砂粒を含む	スス付着
9	33	壺(底部)	Ⅳ,SK	ナデ	ナデ	浅黄橙・灰黄	橙・浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
9	34	ミニチュア(底部)	Ⅳ,SE	ナデ	ハケ目	橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
9	35	壺・鉢(完形)	Ⅱ-1150-1159 WSF3	ハケ目のあとナデ 指押え	ハケ目	灰赤	赤	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
9	36	高杯(杯部)	Ⅳ,SE	ナデのあと磨き	5mm幅の磨き	橙	黄橙・黄灰	＋	3mm以下の砂粒を含む。1mm以下の砂粒を含む	
9	37	高杯(脚部)	Ⅳ,SE	工具によるナデ	磨き	橙	橙・浅黄橙	＋	3mm以下の粒を多く含む。1mm以下の砂粒を含む	黒斑
9	38	高杯(脚部)	Ⅳ,SE	ナデ	磨き	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む。1mm以下の砂粒を多く含む	
9	39	高杯(脚部)	Ⅳ,SE-3	ナデ	磨き	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む。1mm以下の砂粒を含む	黒斑
9	40	高杯(杯部～脚部)	Ⅱ,SE3B	ナデ・磨き	ヘラミガキ	橙	にぶい橙	＋	極く細かい砂粒を含む	黒色
9	41	高杯(脚部)	Ⅳ,SE	ナデ	磨き	橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
9	42	高杯(脚部)	Ⅳ,SE	ナデ・ハケ目 指押え	磨き	浅黄橙・灰白	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
10	43	高杯(脚部)	Ⅳ,SK	不明	不明	橙～黄橙 浅黄橙	橙～黄橙 浅黄橙	＋	4.5mm以下の砂粒を多く含む。1.5mm以下の砂粒を含む	
10	44	高杯(脚部)	Ⅱ-1200 Ⅱ,WSE3下	ナデ	ヘラミガキ 無間隔な並び文	にぶい橙・褐灰	にぶい橙・褐灰	＋	1mm以下の砂粒を含む	透し
10	45	鉢(はぼ完)	Ⅳ,SE	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	橙	橙	＋	2～3mm以下の砂粒を含む	スス付着
10	46	甕(口縁～肩部)	Ⅳ,SE	ナデ・指押え	ナデ・ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	＋	0.5～4mmの砂粒を含む	黒斑・スス付着
10	47	ミニチュア(甕～鉢部)	Ⅳ,SE	ナデ	ナデ・無間隔な並び文	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
10	48	ミニチュア(口縁～肩部)	Ⅲ,W,SE3	ナデ・指押え	ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
10	49	甕(口縁)	Ⅲ,W,SE3下	ナデ	ナデ	黄橙	橙・浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を多く含む	
10	50	ミニチュア(壺)	Ⅲ,W,SE3下	ナデ・指押え	ナデ・指押え	浅黄橙	浅黄橙	＋	3～5mm以下の砂粒を含む	
11	1	壺(口縁～側部)	Ⅴ,Ⅱ,SE	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	橙	浅黄橙	良好	5mm以下の砂粒を含む	(内)黒斑 (外)スス付着
11	2	壺(側部～底部)	Ⅴ,Ⅱ Ⅴ,Ⅱ,K,SE	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	橙	にぶい橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	(外)スス付着
11	3	壺(口縁～肩部)	Ⅴ,Ⅱ,E,SE	ナデ	ナデ・部ヨ目突帯	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	(外)スス付着
11	4	壺(口縁～側部)	Ⅴ,Ⅱ,E,SE	ハケ目	ナデ・ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	(外)スス付着
11	5	壺(口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅱ,E,SE	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
11	6	小形の高杯か壺 (脚部～底部)	Ⅴ,Ⅱ,K,SE	ナデ	ナデ・指押え	橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	
11	7	壺(口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅱ,E,SE	ナデ・ハケ目	櫛描波状文 ナデ・ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	
11	8	甕(底部)	Ⅴ,Ⅱ,E,SK	ナデ	指押え ナデ・タタキ	灰白	橙	＋	4～8.5mmの砂粒を含む	
11	9	甕(口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅱ,E,SE	ヘラミガキ	ナデ・ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	(内)黒斑 (外)黒斑
11	10	甕(口縁)	Ⅴ,Ⅱ,E,SE	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む。1mm以下の砂粒を少し含む	
11	11	甕(側部～底部)	Ⅴ,Ⅱ,K,SE	ナデ	板状工具の跡 ナデ	橙	橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む。2mm以下の砂粒を少し含む。1mm以下の砂粒を少し含む	
11	12	甕(側部～底部)	Ⅴ,Ⅱ,E, SE,Ⅱ,SE	ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目	橙	浅黄橙	＋	2.5mm以下の砂粒を多く含む	
11	13	壺(側部)	Ⅴ,Ⅱ,K,SE	ナデ	ナデ・重弧文 刻み目突帯	橙	浅黄	＋	5mm以下の砂粒を含む	
11	14	壺(側部～底部)	Ⅴ,Ⅱ,K,SE Ⅱ,Ⅱ,SE	ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目 ケズリ	橙	橙	＋	5mm以下の砂粒を多く含む。2mm以下の砂粒を少し含む	
11	15	脚付鉢 (上段～脚部)	Ⅴ,Ⅱ,K,SE Ⅱ,Ⅱ,SE	ハケ目・指押え	突帯・ナデ 無間隔な並び文・ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を多く含む	
11	16	壺(側部)	Ⅴ,Ⅱ,E,SE Ⅱ,Ⅱ,SE	ナデ	ナデ・重弧文	灰白	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
11	17	鉢(側部)	Ⅴ,Ⅱ,E,SE	ナデ・ハケ目	粗ハケ目調 指押え・無間隔な並び文	黄橙	浅黄橙	＋	0.5mm以下の砂粒を含む	(内)黒斑
11	18	ミニチュア (口縁～底部)	Ⅴ,Ⅱ,E,SE	ナデ・指押え	極く薄いエ具跡 ナデ・指押え	橙	明黄橙	＋	1mm以下の砂粒を多く含む	
11	19	皿	Ⅴ,Ⅱ,E,SE	ミガキ	ナデ・ミガキ	浅黄橙	浅黄	＋	1mm以下の砂粒を多く含む	

第５表　周溝状遺構出土土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内部面	文様および調整 外部面	色調 内部面	色調 外部面	焼成	胎土	備考
13	1	壺(口縁～側部)	Ⅵ,E SL-56,110,124	ナデ・指押え	ナデ	灰白	橙	良好	3～1.5mm以下の砂を含む	瓦質
13	2	二重口縁壺(口縁)	Ⅱ,SL-202	ナデ	ナデ	褐橙	灰白	＋	3.5～1mm程度の砂粒を少し含む	
13	3	二重口縁壺(口縁)	Ⅱ,SL-101	ナデ	ナデ	浅黄橙	褐橙	＋	4～1mm以下の砂粒を少し含む	
13	4	甕(口縁)	Ⅵ,Ⅱ	ナデ	ナデ	黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む	
13	5	壺(底部)	Ⅵ,Ⅱ,SL-106	ナデ	ナデ	灰黄	黄灰	＋	3.5mm以下の砂粒を少し含む	瓦質

第６表　周溝状遺構出土遺物観察表

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	形態・手法の特徴など	色調 内部面・外部面	焼成	胎土	備考
13	6	埴輪(口縁～頸部)	Ⅵ,Ⅱ	内・外面共に施釉	(内)明緑灰、(外)明緑灰	堅緻	精良	

第7表　時期不明清状遺構出土土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	形態・手法の特徴など	色調 内部面・外部面	焼成	胎土	備考
14	1	羽釜	Ⅵ,ⅠSE1-22	内面ナデ 外面ナデ,鍔ナデ,雲花文押印	(内)灰白、(外)灰	良好	1mm以下の砂粒を含む	
14	2	甕(胴部～底部)	Ⅵ,ⅠSE1	内面ケズリ 外面ナデ,施釉	(内)褐、(外)黒褐	堅緻	3mm以下の砂粒を含む	
14	3	びん (底部,胴部～底部)	Ⅵ,ⅠSE1	内面ナデ、外面施釉	(内)にぶい赤,暗赤灰 (外)明灰黄,灰黄褐	良好	精良	
14	4	上師杯(底部)	Ⅵ,ⅠSE1	内外面ともに横ナデ	橙	＋	＋	
14	5	青磁(口縁)	Ⅵ,Ⅰ-SE1-36	内外面ともに施釉	オリーブ灰	堅緻	＋	
14	6	青磁碗(底部)	Ⅵ,ⅠSE1	内外面ともに施釉貫入	オリーブ灰	＋	＋	
14	7	青磁碗(底部)	Ⅵ,ⅠSE1-21	内外面ともに施釉	オリーブ灰	＋	5mm以下の砂粒を少し含む	
14	8	土師杯 (口縁～底部)	Ⅵ,ⅠSE1-34	内外面ともに横ナデ・ヘラ切痕	浅黄橙	良好	精良	
14	9	擂鉢	Ⅵ,ⅠSE	内外面ともに横ナデ 内面に擂目条痕	(内)暗赤褐、(外)明赤褐	＋	＋	
14	10	擂鉢	Ⅵ,ⅠSE1	内外面ともに横ナデ 内面に擂目条痕	にぶい赤褐	＋	2mm以下の砂粒を含む	
14	11	青磁碗(口縁)	Ⅵ,ⅠSE3-18	内外面ともに施釉・雲文体	褐調・オリーブ灰・胎土調・灰白	堅緻	精良	
14	12	こね鉢	Ⅵ,ⅢSE	内外面ともにナデ 内面に7条の櫛目・外面に一部自然釉	(内)灰褐、(外)灰褐・灰	＋	2mm以下の砂粒を含む	
14	13	碗(口縁～底部)	Ⅵ,ⅠSE3-15	内外面ともにナデ・糸切痕	(内)灰白、(外)褐灰	良好	精良	
14	14	青磁(口縁)	Ⅵ,ⅠSE4	内外面ともに施釉	褐調・灰オリーブ・胎土調・灰白	堅緻	＋	
14	15	青磁(上縁)	Ⅵ,ⅠSE4-13	内外面ともに施釉	褐調・灰オリーブ・胎土調・灰白	＋	＋	
14	16	青磁(胴部)	Ⅵ,SE4-2	内外面ともに施釉貫入	褐調・オリーブ黄・胎土調・灰白	＋	＋	
14	17	碗部	Ⅵ	内外面ともに施釉、外面一部露胎	褐調・灰白・胎土調・灰白	＋	＋	
14	18	上師	Ⅵ,ⅠSE4-16	－	(外)淡赤橙	－	－	
14	19	青磁	Ⅵ,ⅠSE4	内外面ともに施釉	褐調・オリーブ灰・胎土調・灰白	堅緻	精良	
14	20	碗部	Ⅵ	内外面ともに施釉貫入	褐調・オリーブ灰・胎土調・灰白	＋	＋	

第8表　時期不明遺構出土遺物観察表

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	形態・手法の特徴など	色調 内部面・外部面	焼成	胎土	備考
16	1	甕(上縁)	第3SA2	口縁部は緩やかで湾曲性強くなる。内面は横ナデだとされるが、内面は横ナデに入り込むもの	橙	良好	3mm以下の砂粒を含む	
16	2	高杯(杯部)	Ⅵ,ⅠSC	内外面とも風化し調整不明	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	黒色物付着
16	3	甕(上縁)	第3SA2	内外面とも横ナデ	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
16	4	甕(底部)	Ⅵ,ⅠSC	内面はナデで整形後、入り込み、外面は縦方向に入り込み・竹管文あり	橙	＋	3.5mm以下の砂粒を含む 1mm以下の金雲母粒を含む	
16	5	上師質(皿)	Ⅵ,ⅠSC	内外面ともロクロ回転ナデ 底部糸切り	浅黄橙	＋	精良	
16	6	陶器(底)	Ⅵ,ⅠSC	内外面ともナデ 底部は低いナデ	(内)明褐灰、(外)オリーブ灰	＋	3mm以下の砂粒を含む	
16	7	こね鉢	Ⅵ,ⅠSC	内面は風化著みたがナデ 外面は横ナデ	(内)灰白、(外)黄灰・灰白	＋	4mm以下の砂粒をまばらに含む	
16	8	青磁(碗)	Ⅵ,ⅠSC	内外面とも施釉を貫入	オリーブ灰	堅緻	精良	
16	9	常滑(甕・口縁)	Ⅵ,ⅠSC	内外面とも施釉を貫入し、自然釉が残っている	(内)灰オリーブ・赤褐 (外)赤褐・オリーブ黒	＋	2mm程の砂石を含む 小礫を少量含む	
16	13	白磁びん(胴部)	Ⅵ,ⅢSE	釉の下にナデの痕がみられる	灰白	＋	精良	
16	14	白磁びん (胴部～底部)	Ⅵ,ⅢSE	釉の下にナデの痕がみられる	灰白	＋	＋	
16	15	染付(皿)	Ⅵ,ⅢSE	蹄手の底部でひと形、内面に文様	明緑灰・灰白	＋	＋	
16	16	陶器(びん)	Ⅵ,ⅢSE	内外面とも施釉が貫入してある 外面に波状の文様が施してある	灰	＋	＋	

第9表　時期不明遺構出土石器観察表

図面番号	遺物番号	機別	出土地区	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
16	10	石硯	Ⅵ,Ⅲ,SE	9.95	9.1	1.8	197.7		
16	12	砥石	Ⅵ,Ⅲ,SE	8.5	2.8	0.8	46.1		
16	17	砥石	Ⅵ,ⅢE遺一括	8.25	2.1	1.1	30.6		
16	18	鉄鏃	Ⅵ,ⅠE区	5.5	3.7	0.52 3.7	5.5		

第3節　遺　物

1　縄文時代

1　土器（第17図～第26図）

学頭遺跡は、現在長崎県文化課に勤務する安楽勉氏が宮崎県在住のころ発見した遺跡である。当時から縄文時代の遺跡として有名であったが、Ⅰ～Ⅳ次の調査までは縄文土器の出土点数はそれほど多くなく、弥生土器のみが多量に出土していた。Ⅴ次の調査は栗野神社前の宅地付近であったが、ここにいたり漸く多量の弥生土器に混在し、しかも下層に至るほどまとまった縄文土器が出土した。残念ながら層位的には細かく検討できなかったが、縄文後期後半～晩期前半の土器が主体で、特に後期後半の土器が多く出土している。Ⅵ次の調査区では縄文土器は殆ど出土していない。

出土土器の半数は無文の粗製土器であるが、有文土器では曽畑式土器・市来式土器（口縁部がくの字状に屈曲した）・鍋崎式土器・晩期の突帯文土器や孔列文土器等が数点見られるほかは、三万田式土器以降のいわゆる黒色磨研系の土器が多く、次に丸尾式土器など貝殻文系の土器片が多いが、黒色磨研土器に比すると量的には少ない。底部は平底のもと上げ底のものがあるが、上げ底の方が平底の倍ほど出土している。

縄文土器は殆ど包含層から出土し、整理に要した時間もごく限られていた。そんな中で有文土器を中心に黒色磨研土器の主だったものや少量出土の土器で時期的特徴を有するもの等を選別し図化した。個々の詳細については別表の土器観察表を参照していただきたい。なお、黒色磨研土器については県内でまとまって出土した例が高千穂町陣内遺跡・陣内第２遺跡や山田町中村遺跡、宮崎市平畑遺跡等まだ数えるほどしかないため、今回は編年の進んでいる隣県の熊本県や鹿児島県の編年に倣い、学頭遺跡においても同時期のものが存在するかを追認しつつ分類した。

第17図１～２は曽畑式土器である。１は胎土に滑石を含んでいる。宮崎県南部地方では滑石を含む曽畑式土器はまれである。口縁部外面の刺突文の下に区画の横沈線文は見られないが、胎土に滑石を含むこと、口縁部内面に文様が見られないこと等、水ノ江和同氏のいう曽畑Ⅰ式新段階～曽畑Ⅱ式古段階頃のものであろう。２は波状口縁で口縁部内外面に横方向の沈線文・短沈線文を施文し、曽畑Ⅱ式新段階のものと思われる。３は類似の土器としてここに載せた。口唇部の残りが悪いため刻みの有無は不明だが、口縁部外面下部に沈線状の押引文を５条横方向に施文し、その上に下から上へ斜め方向に、さらにその上に２条の横方向の押引文を施している。施文順序が下から上へと通常の曽畑式土器とは逆の施文になっている。内面には浅い貝殻条痕文が残る。曽畑式土器に先行する時期のものか。

４～10は貝殻腹縁による条痕文や刺突文等を有する貝殻文系の土器である。４～５は市来式土器である。口縁形態からは４の方がより古式と考えられている。しかし、県南地方では小さく三角形に肥厚する４のタイプのものは概して大型の器形が少なく、大きく屈曲する５のタイプのものは逆に小型の器形が少ない傾向があるように思われ、時期差なのか形態差なのか今のところはっきりしない。６～８は、前迫亜一氏のいう丸尾式土器である。波頂部に沈線文で定型化された文様を施文する６のタイプは古段階であろうとされる。しかし、田野町丸野第２遺跡など県南地方の傾向としては、貝殻腹縁刺突文に沈線文を併用するものと貝殻腹縁刺突文のみのものとの口縁形態には、外反と軽いくの字屈曲の２者が見られるようであり、口縁部の製作過程が若干異なると考えられる２者が同時期に存在していた可能性も考えられる。９は口縁下部に貝殻腹縁のロッキングを施すもので、貝殻腹縁による同部位への施文のある土器は宮崎市松添遺跡（貝塚）や平畑遺跡等でも出土している。これらの土器は、軽い外反口縁で貝殻条痕文と貝殻腹縁刺突文のみの単純な文様が施されることから丸尾式に後続する時期のものと考えられる。10は口縁端部とわずかに屈折した頸部の２カ所に貝殻腹縁で羽状（厳密には下側の刺突文は少ない）の刺突文を施文するもので、胴部内面の屈折部には稜線が見られる。器面には指押さえ痕や貝殻条痕文が残る。この口縁部断面が三角形の片刃状になり口縁

端部と屈折した頸部の２カ所に文様を施す土器は、これまでの貝殻文系土器には見られない形態のものである。恐らく辛川Ⅱ式～西平式期にその影響の下成立した貝殻文系の土器と思われる。宮崎市納屋向遺跡や平畑遺跡等に類例が見られる。

11は鐘崎式土器である。口縁部上面に沈線による渦文と連続刺突文、端部に１条の沈線文を巡らす。図化しなかったもう１点は沈線文のみ見られる。

12～24はナデを主体とした土器である。辛川Ⅱ式～西平式並行の時期のものと考えられる。器厚や口縁端部形態、器形等はかなり異質のものではあるが、14は口縁端部の３条の沈線文、頸部よりやや上方の刺突列点文とその下の沈線文など辛川Ⅱ式相当の時期、15は口縁部内面の凹線文、口縁端部の磨消縄文と３条の沈線文（拓本の右端に上２条を繋ぐ刺突文と下２条を繋ぐ刺突文が見られる）、頸部の刺突列点文など西平式相当の時期のものであろう。12の波頂部の上下２段のハの字状の刺突文は対向弧文を意識したものと思われ、13の波頂部の口唇部刺突、その下の対向弧文や三角構成の文様など同じく西平式に並行する時期のものであろう。16～18は口縁部形態や施文部位の類似からここに載せた。また、胴部片では20に崩れた対向弧文が見られ、19～20・22～24には横走沈線文が、22～24には頸部に刺突列点文、21には弧文と直線文の組合わせが見られるなどやはりこの時期のものと思われる（24は頸部内面の屈曲や器面・施文状況などから太郎迫式期くらいまで新しくなる可能性もある）。これらの土器は、Ｚ字状反転文は見られず磨消縄文のないものや乱れた横走沈線文のみのものも多いが、後期中葉以降鐘崎式土器以外に顕著な縄文施文の土器があまり見られないこの地方の該期の特徴であろうか。

25～39は太郎迫式～三万田式期のものと思われる。県南部では当該時期の有文の鉢形土器・深鉢形土器は殆ど出土せず、無文のナデまたは粗い研磨の深鉢形土器が多く、丁寧な研磨のものは珍しい。25は波状口縁の内面に太い沈線文があり、26は屈曲した頸部から短く外傾した波状口縁と丸く張り出す胴部等その特徴から太郎迫式期のものと考えられる。しかし、26は明るい色調のナデ調整の土器である。27～28・30～32は調整にミガキが見られるもので、27～28はやや短めの外反した口縁部を持ち、30～32は長めの外傾または外反した口縁部を持つものである。29は類似の器形からここに載せたがナデ調整である。これらは器形的には辛川Ⅱ式以来の鉢形土器の特徴を残しているものと考えられ、器厚の厚さなどは地域的な特徴と思われる。33～35は同様の頸部付近と思われるが、33～34はナデ調整である。36～39は三万田式期の鉢・浅鉢形土器である。37は細短沈線文が見られるもので、県南地方では細線羽状文は極めてまれである。

40～43は高坏の脚部と思われる。41はナデ調整であるが細線羽状文のある突帯文があり、42～43は研磨されて透孔を持つ。40はナデ調整である。焼成や胎土の状況、装飾のなさなど他と異なっており、あるいは弥生時代以降のミニチュア土器の可能性もある。

44～53は凹線文が施文される土器である。44は凹線文の上に縦方向の短凹線文（押点文か）が見られる深鉢形土器である。46はナデ調整で浅く境の不明瞭な２条の凹線文が見られる。49は薄い器厚で丁寧な研磨が施された浅鉢形土器で、細線文による扇状の文様が施される。50は屈折部の上に凹線文の一部と思われる凹面が見られるが、胴部は割合直線的である。51は凹線文間が突帯状となる注口土器もしくは浅鉢形土器である。53は浅い２条の凹線文が施され波頂部には押点文、胴部がわずかに張り出す器形の浅鉢形土器である。このような器厚の厚い土器は県南地方では時々出土している。これらの凹線文の見られる土器は、鳥井原式期から一部御領式期にかけての時期のものであろう。

54～55はやや新しく後期末ぐらいになると思われるもので、54は凹線文の中に沈線文を施す浅鉢形土器、55は太めの沈線文の間が段状になる鉢形土器である。

56～69は晩期初頭に位置付けられる土器である。56は口縁部に２条の細い沈線文を施し押点文は見られない。57は太めの沈線文のある浅鉢形土器である。58の土器は口縁部直下に屈曲点があり器面調整は粗いが、

4条の沈線文は晩期のものか後期のものか時期がはっきりしない。59は狭い無文の口縁帯があり、61は凹線状の口縁帯、胴部と頸部の境は凹線文で表すものである。62は小さく立ち上がる口縁部の外面に1条の沈線文を施すもので、65～69は胴上部で屈曲、頸部が外反し同じく小さな立ち上がりの口縁部を作る。65が無文の外は1条の沈線文が見られる。69は口唇部にも1条の沈線文がある。63～64はやや器高の高い浅鉢形土器片である。鉢形土器は胴部がくの字状に屈曲するという特徴が見られる。

70～75は熊本の古閑式や鹿児島の入佐式期のものと思われる。深鉢形土器では、外傾した幅広の口縁帯に3～4条の沈線文を施す70～71や志賀里系の文様と思われる弧状の細沈線文を施す72などがある。73～75は短頸の浅鉢形土器で、口縁部内面の段で立ち上がりを表している。なお、入佐式に見られる長頸の浅鉢形土器は学頭遺跡では見られないが、平畑遺跡では数点出土している。

77～82は黒川式期相当の土器である。77は口縁端部外面に1条の沈線文、内面には段が見られ、鰭状突起を有する。胴部は79～80同様丸く張り出すものと思われる。80には胴部に蝶ネクタイ状突起が見られる。78は無文の口縁帯の下でくの字状に屈折するもので、81～82は胴部と頸部の2カ所に屈曲点が見られる浅鉢形土器である。これらの浅鉢形土器は80が風化してはっきりしない外はすべてヘラミガキされている。

76は口縁部が突帯文状に肥厚する深鉢形土器である。刻目突帯文土器の前段階とされる刻目のない突帯文土器の時期のものかもしれない。

84～85は孔列文土器、86～87は刻目突帯文土器である。ともに数点出土。

83は口縁部が外反した浅鉢形土器である。時期は不明。88は方形状の透かしが見られる口縁部片であるが、器形は不明である。89は弧状の突帯文の上下に貝殻腹縁によると思われる弧状刺突文が施される土器で、88～89ともに後期後半の土器と思われる。

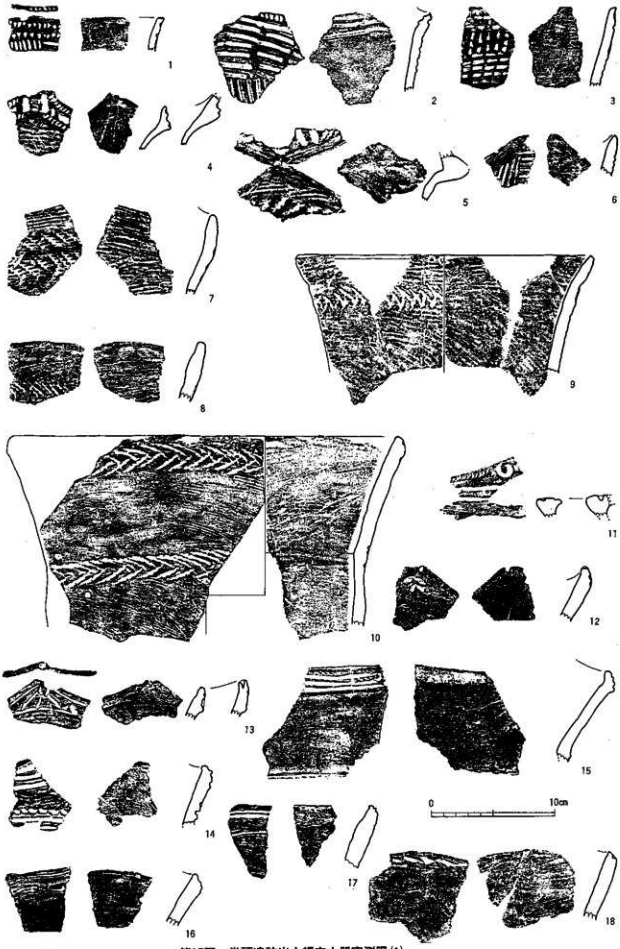
90～99は粗製の無文土器である。90～96は胴部と口縁部の境付近の内面が肥厚し段や稜線を有するものである。91～93のように口縁端部が三角形の片刃状の断面を持つ特徴的なもので94など巻貝条痕によると思われる調整のものなどがあるが、これらの特徴や器形等から後期後半の粗製無文土器の可能性がある。97～99は時期的な特徴がなくどの時期のものか不明である。

100～102は後期の貝殻文系土器の底部と思われる。いずれも橙色系の明るい色調で100は市来式～丸尾式土器の底部であろう。106～113など上げ底またはわずかな上げ底や調整に研磨が見られるものは、磨研土器など貝殻文系以外の土器の底部と思われる。

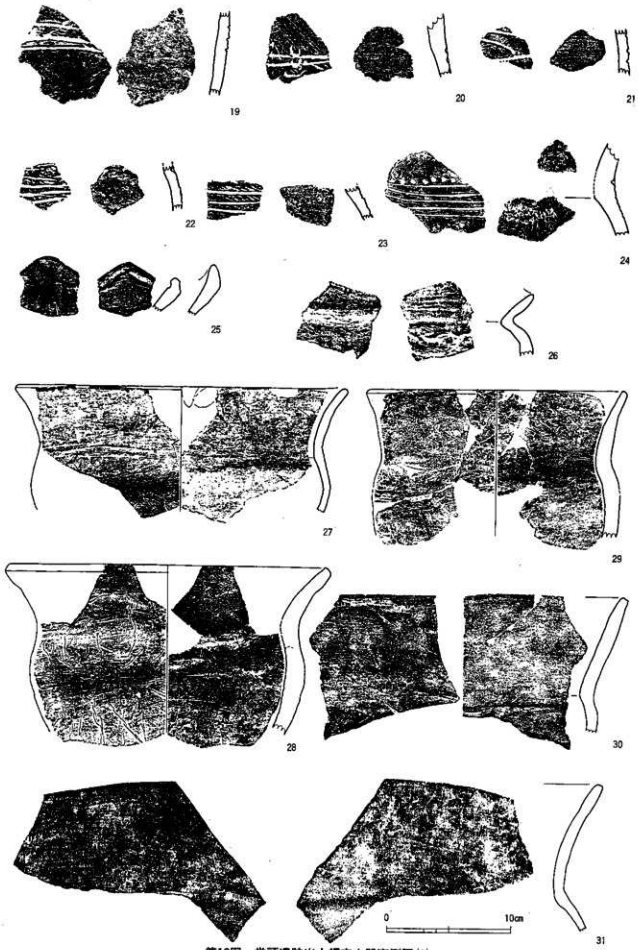
以上、学頭遺跡出土の縄文土器について報告したが、磨研土器について若干の感想を述べておきたい。まず深鉢形土器については、有文のものが非常に少ないこと、調整のミガキは雑で丁寧な研磨の土器はあまり見られないこと。一方、浅鉢形土器は、有文の比較的時期比定可能なものが御領式期を除いて三万田式期から晩期中葉頃まで確認でき、調整も丁寧な研磨のものが多いこと。そのほか後期後半の磨消縄文や細線羽状文がまれであるのは、その時期の鉢形土器や深鉢形土器が殆ど見られないことと関係があるかもしれない。今回これらの土器を分類するにあたり、熊本などの標識となる土器を実見しないまま図上での類似による分類を行ったため多くの誤認もあるものと思われる。しかし、凹線文を有する土器や器厚の分厚い磨研土器が学頭遺跡でも再確認されたことは今後の該期の土器研究にとって有意義であると考える。

第10表　縄文土器観察表(1)

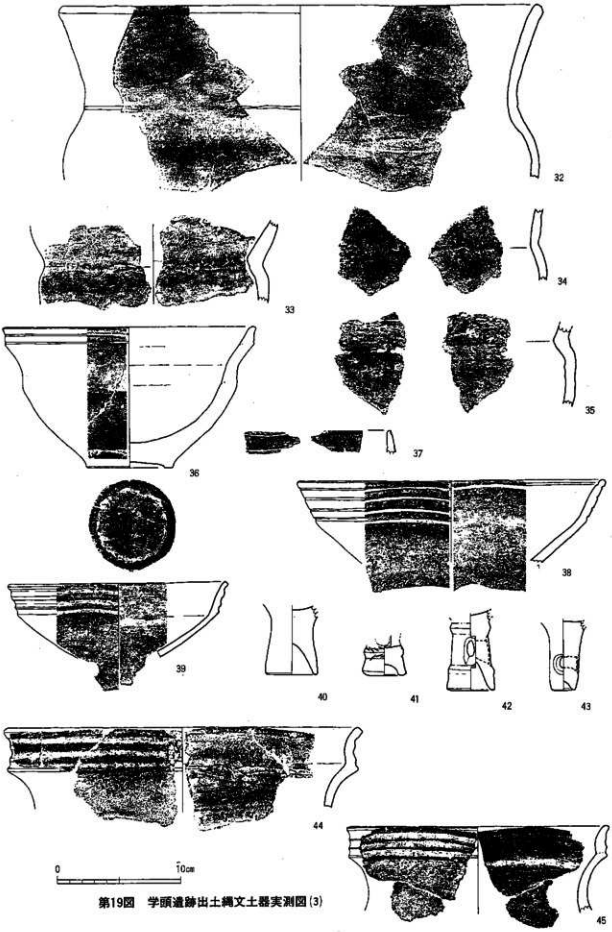
図版番号	出土地区	文様	調整	色調 外器面	色調 内器面	胎土の特徴	備考
1	V－Ⅱ	口唇部に刻み。外面に横方向に2列の連続刺突文。その下に縦方向、横方向の沈線文。	内外面ともナデ	橙	橙	滑石を含む。2ミリ以下の長石粒、軟物粒及び砂粒を含む	
2	Ⅲ－E	口縁部に沈線文が刻み。外面は横方向の沈線の下に斜方向の沈線。内面は3条の沈線	内外面とも横ナデ	灰褐	にぶい褐	1ミリ以下の石英及び砂粒を含む	波状口縁。沈線の工具は幅広の平らな工具
3	V－Ⅱ	外面は斜方向の沈線状押引文の下に、2条の横方向の列文、下端に5条の斜方向の列文	外面はナデ 内面は横方向の貝殻条痕文の上をナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	1ミリ以下の砂粒を含む 黒い軟物粒を微量含む	工具は竹管状の工具



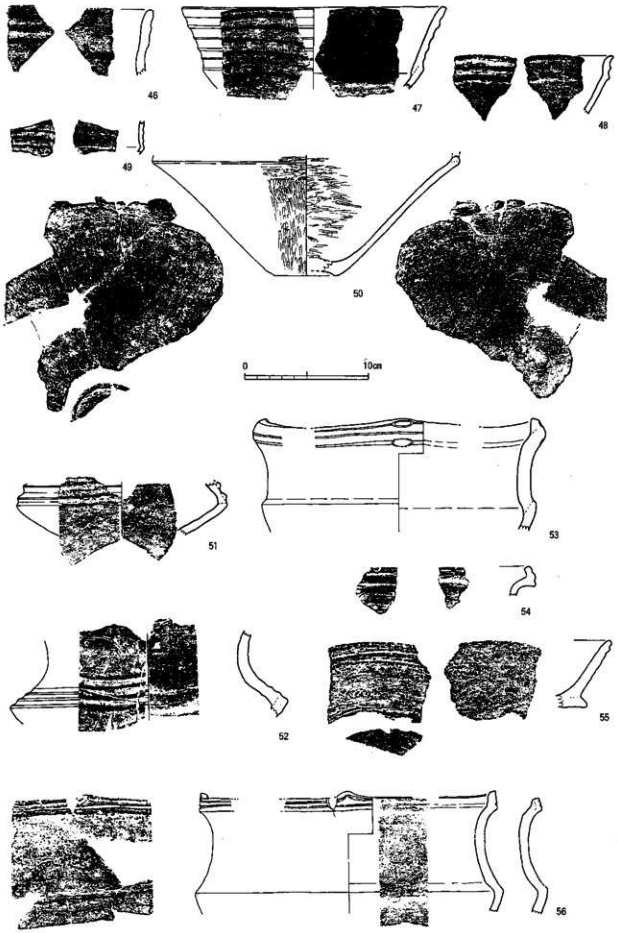
第17図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(1)



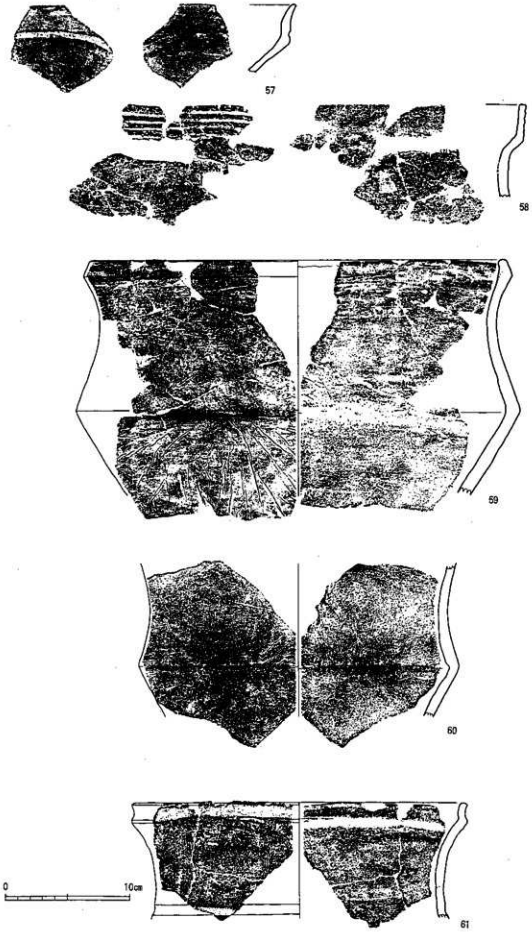
第18図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(2)



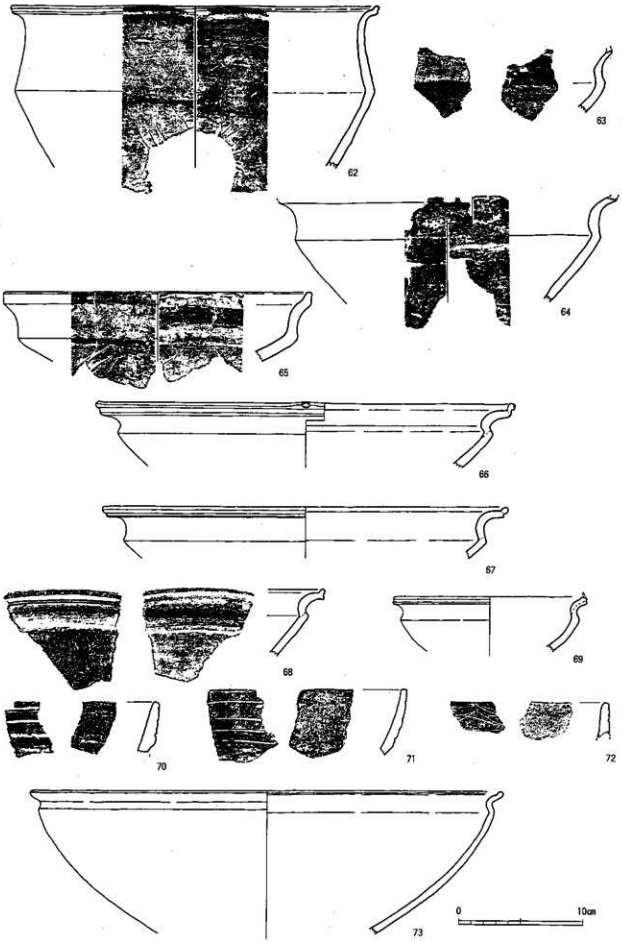
第19図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(3)



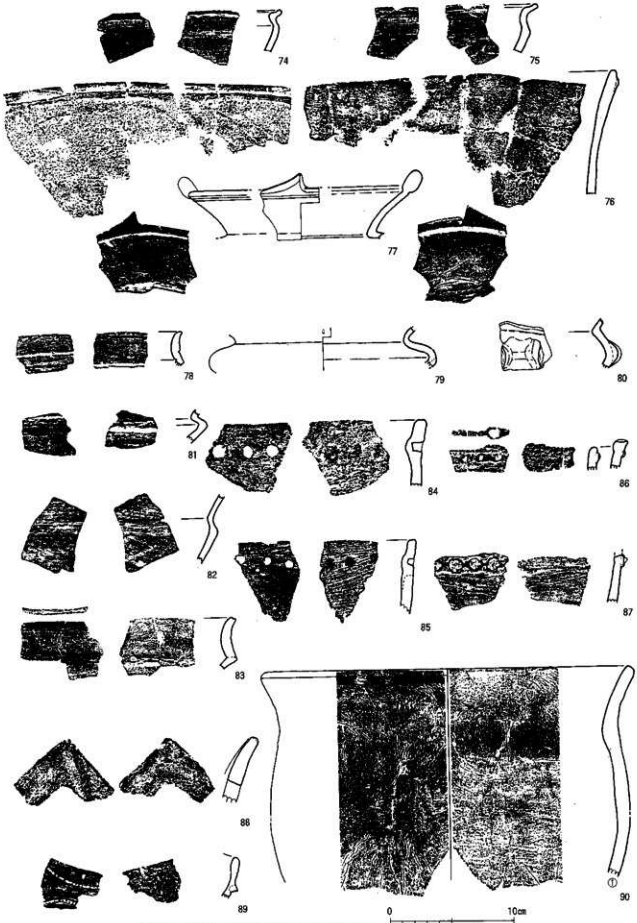
第20図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(4)



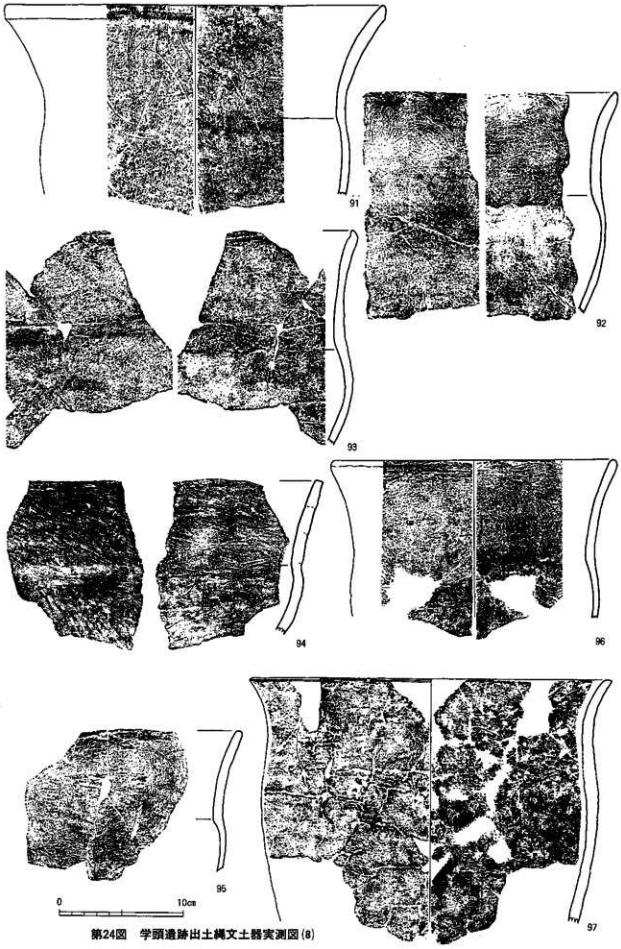
第21図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(5)



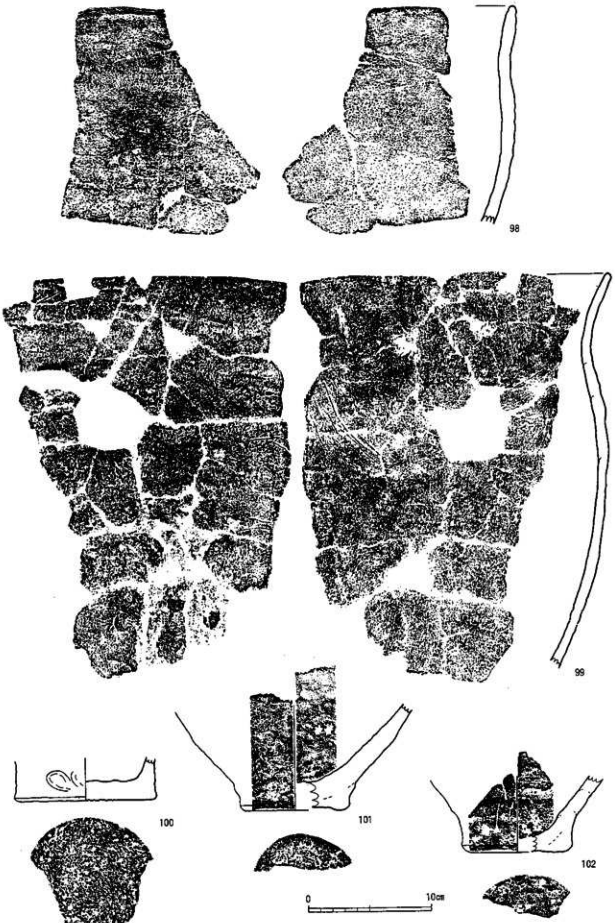
第22図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(6)



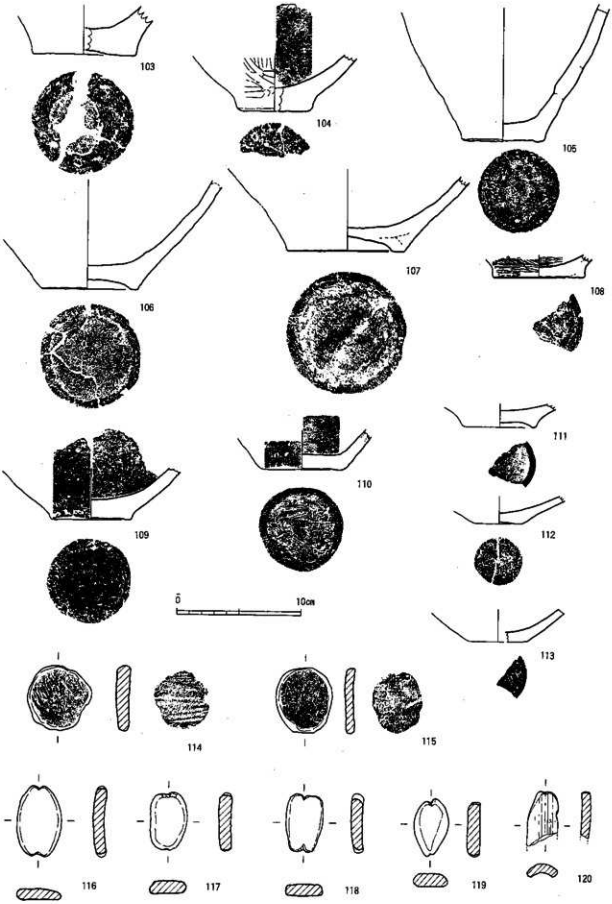
第23図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(7)



第24図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(8)



第25図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(9)



第26図　学頭遺跡出土縄文土器実測図(10)

第11表　縄文土器観察表(2)

図番号	出土地区	文様	調整	色調 外器面	色調 内器面	胎土の特徴	備考
4	Ⅱ	波頂部押圧文の中に結節。両側に短沈線文。その横に上下の刺突文の間に沈線文。	外面は横方向の貝殻条痕文の後ナデ。内側はナデ	橙	明赤褐	1～2ミリ以下の石英質、黒い鉱物粒及び砂粒を含む	波状口縁。波頂部欠損
5	Ⅴ－Ⅰ	波頂部横方向の短沈線文の両側に縦方向の短沈線文。その縦と横に沈線隆帯例突文	外面は横方向の貝殻条痕の後ナデ。内面は粗いナデ	にぶい赤褐	明赤褐	1ミリ以下の長石、石英等鉱物粒及び白色の砂粒を含む	波状口縁
6	Ⅴ－Ⅰ	横方向の4条の沈線文の間隔に5条以上の斜方向の沈線文	内外面ともナデ。内面の一部に貝殻条痕文の痕跡あり	にぶい橙	にぶい橙	1ミリ以下の石英、長石等鉱物粒及び砂粒を含む	*
7	Ⅰ	口縁伝部のと下に斜方向の貝殻腹縁例突文	内外面とも貝殻条痕文。一部内外面にナデ	橙	橙	2～3ミリの褐色の砂粒、1ミリ以下の長石、石英、黒色の鉱物粒等を含む	*
8	Ⅰ	斜方向の貝殻腹縁例突文	内外面とも横方向の貝殻条痕の後ナデ。口唇部はナデ	橙	橙 浅黄橙	1.5ミリ以下の石英砂1粒含む。2ミリ以下の砂粒を含む	口縁部内側に段状になるとみられる凹線状のテガがみられる
9	Ⅲ	貝殻腹縁による口ッキング	内外面とも横又は斜方向の貝殻条痕文の上を粗いナデ	にぶい橙	橙	2～3ミリの赤褐色の砂片及び1ミリ以下の石英、角閃石等鉱物粒を含む	
11	Ⅴ－Ⅱ	口縁上部に横沈線例突文による羽状文	外面は横方向の貝殻条痕文の後ナデ。外面は一部ヨコ又は縦のナデ	褐	橙	1ミリ以下の長石、石英、角閃石等鉱物粒を多く含む。2～4ミリの赤褐色の砂片も少量含む	
12	Ⅴ－Ⅰ	口縁上部に波文・沈線・例突文あり	外面はナデ。内面は丁寧なナデ。又はヘラミガキの風化したものか。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な長石等鉱物粒及び砂片を含む	
13	Ⅰ	波頂部に結ん、その下にハの字型の例突文	内外面ともナデ	明赤褐 にぶい橙 にぶい黄橙	橙 灰褐 にぶい橙	1ミリ以下の砂粒及び微細な長石、石英等鉱物粒を含む	波状口縁
14	Ⅴ－Ⅰ	口縁部に3条の沈線文。器胴付近は例突列文の下に2条の沈線文	外面は貝殻条痕の後ナデ。内面はナデ	赤褐	暗褐	2ミリ大の砂粒を含む。微細な長石等鉱物粒を含む	*
15	Ⅴ－Ⅲ	口縁部直下に1条の沈線文。その下に2条の沈線文	内外面とも横ナデの上を一部ミガキか	黒褐	赤褐	3ミリ大の砂粒を含む。1ミリ以下の石英、雲母等鉱物粒を含む	*
16	Ⅴ－Ⅱ	口縁部直下に3条の沈線文。その下に2条の沈線文	内外面ともナデ。外面に一部貝殻条痕文の痕跡	明赤褐	明赤褐	2～4ミリ大の砂粒及び1ミリ以下の長石、石英等鉱物粒を含む	波状口縁か
17	Ⅲ	口縁部直下に3条の沈線文。その下に1条の沈線文。内面に凹線文あり	内外面ともナデ。外面に一部貝殻条痕文の痕跡	橙 にぶい橙	橙 浅黄橙	1～3ミリの砂粒及び微細な鉱物粒を含む	
18	Ⅴ－Ⅰ	口唇部にヘラ状工具による連続の短沈線文	外面はナデ 内面は貝殻条痕の後ナデ	明赤褐	橙	1～4ミリの褐色の砂粒及び、微細な石英等鉱物粒を含む	波状口縁か
19	Ⅰ	横方向の三条の沈線文	内外面ともナデ	橙	橙 淡黄	2ミリ大の砂粒及び長石等微細な鉱物粒を含む	外面に部分的にスス
20	Ⅴ－Ⅰ	横方向の沈線2条に上下の対向縄文。その下に連続する縄文	外面は斜方向の貝殻条痕の後ナデ。内面はナデ	明赤褐	橙	1ミリ以下の砂粒及び、石英等鉱物粒を含む	
21	Ⅰ	沈線による条例突文と1条の沈線文。工具は櫛歯状等状のヘラ状工具。	内外面ともナデ。内面上部に貝殻条痕文ともしきものが見られる	褐灰	にぶい橙	2ミリ大の砂粒及び1ミリ以下の長石、石英粒、雲母を含む	
22	Ⅰ	沈線は沈線文の中に刺例列文。横方向の上を部分的に幾ミガキを施した後、横方向の沈線文	内面はナデ	褐灰	黒褐	微細な雲母、石英、黒色鉱物粒を含む	内面に炭化物 外面にスス
23	Ⅰ	隆帯付近に例例列文。その下は一部ナデ。横に例文の上に横方向の沈線文	内面はナデ	にぶい赤褐 暗赤褐	明赤褐 橙	1ミリ以下の砂粒及び長石、黒色鉱物粒を含む	
24	Ⅲ－Ⅱ	先端の欠った棒状工具による例突列文の下に5条の沈線文	内外面ともナデ	明赤褐	にぶい褐	2ミリ以下の砂粒、長石等鉱物粒を含む。5ミリ大の砂粒も含む	外面に2本、外面の一部に赤色顔料らしきものが付着。波状口縁
25	Ⅴ－Ⅱ	内面に1条に沿って太い沈線文がある	外面は横方向のヘラミガキ。内面はナデ。口唇部は縦方向ヘラミガキ	黒褐	褐灰	1ミリ以下の砂粒及び微細な鉱物粒を含む	外面にスス。外面の一部に赤色顔料らしきものが付着。波状口縁
26	Ⅲ	－	内外面ともナデ。内面口縁部に一部ミガキか	にぶい橙	にぶい橙	2ミリ大の砂粒を含む	波状口縁
27	Ⅴ－Ⅱ	－	内外面ともヘラミガキ。口唇部はナデ	橙 にぶい橙	浅黄	1ミリ以下の砂粒、雲母を含む	外面にスス
28	Ⅴ－Ⅰ	－	内面はナデ。外面は横方向ヘラナデの上を縦方向に幾ミガキ	橙	褐	2ミリ以下の砂粒を含む	外面にスス
29	Ⅴ－Ⅰ	－	内外面ともナデ	橙	橙 黄橙	1ミリ以下の砂粒を含む。石英等微細な鉱物粒を含む	外面にスス
30	Ⅴ－Ⅰ	－	外面はヘラミガキ。内面はナデ	暗褐	にぶい橙	1ミリ以下の石英、長石、黒色鉱物粒及び砂粒を含む	
31	Ⅴ－Ⅰ	－	外面は横方向のヘラミガキ 内面は縦方向のヘラナデ	黒褐	褐	微細な鉱物粒及び砂粒が多く含まれる	外面にスス
32	Ⅴ－Ⅱ	－	内面は丁寧なナデ。もしくは風化したヘラミガキ。外面は横方向のヘラミガキ	にぶい赤褐 暗赤褐	橙 灰褐	1ミリ以下の砂粒及び長石、石英等、鉱物粒を多く含む	外面にスス
33	Ⅴ－Ⅰ	－	内外面とも横ナデ	灰褐 褐灰	黄橙 にぶい橙	1.5ミリ以下の砂粒及び微細な鉱物粒を多く含む	
34	Ⅴ－Ⅰ	一部に浅い凹線状のくぼみがある	内外面とも丁寧なナデ	褐	明褐 褐	1ミリ以下の砂粒及び長石、長石等鉱物粒を多く含む	外面にスス
35	Ⅴ－Ⅰ	－	内面はナデ。外面は横・斜方向の雑なミガキ	橙	橙	2ミリ以下の砂粒が多い。長石など微細な鉱物粒を少量含む	外面にスス
36	Ⅴ－Ⅰ	口縁部に2条の沈線文	内面は丁寧な横ナデ。外面は横方向のヘラミガキ	浅黄橙	浅黄橙	1～4ミリの砂粒が多い。長石、石英等の鉱物粒を少量含む	外面にスス
37	Ⅴ－Ⅱ	2条の沈線文の上下に細沈線文	内外面とも横方向のヘラミガキ	黒褐	灰褐	1ミリ以下の石英等鉱物粒を少量含む	黒色磨研土器
38	Ⅴ－Ⅰ	外面口縁部に4条の沈線文。内面には1条の沈線文	内面はヨガキか丁寧なナデ。外面の沈線付近は縦ヘラミガキ。その下は横ヘラミガキ	褐	橙	1～2ミリの砂粒及び石英他、微細な鉱物粒を含む	
39	Ⅴ－Ⅰ	口縁部に2条の数度の横方向のヘラミガキによるあるのの沈線文	内外面とも風化していると横方向のヘラミガキ	にぶい橙 黄灰	にぶい黄橙	微細な石英、黒色鉱物粒を含む	外面にスス
40	Ⅴ－Ⅰ	－	内外面ともナデ	にぶい橙	灰褐 にぶい橙	1～3ミリの砂粒及び1ミリ以下の黒っぽい鉱物を多く含む。白英等の微細な鉱物粒を少量含む	胴部外側にスス。胴底部付近周りにスス。ナデ土器の可能性がある

第12表　縄文土器観察表(3)

図版番号	出土地区	文様	調整	色調 外器面	色調 内器面	胎土の特徴	備考
41	V	突帯上に細線羽状文。風化著しい	内外面ともナデ	淡黄橙	淡黄橙	長石、黒っぽい鉱物を含む	脚部に貫通する透し孔上げ底
42	V－I	1条の突帯文	内外面ともミガキ 脚部内面はナデ	黒褐 灰黄褐	黒褐 灰黄褐	微細な長石等鉱物粒及び砂粒を含む	脚部に貫通する透し孔
43	V－II	－	＊	にぶい黄橙	褐灰	黒色鉱物粒を少量含む。1ミリ以下の砂粒を含む	脚部に貫通する透し孔上げ底
44	V－I	口縁、帯に3条の凹線文、縦方向の櫛目痕文。頸部付近に凹線文か	内面は横方向のヘラナデ 外面は横ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2ミリ以下の砂粒が多い。少量の石英等鉱物粒を含む	
45	V－I	口縁帯に3条の凹線文	内面は縦方向のヘラナデ。外面は下寄せ横ナデ又は縦方向のミガキか	橙	明赤褐 にぶい褐	1～2ミリの砂粒、石英を多く含む	
46	V－I	口縁部に2条の凹線文	内外面ともナデ	淡黄	淡黄	1ミリ前後の砂粒が多い	
47	V－I	口縁部に5条の横方向のミガキによる凹線文	内外面ともに横方向の丁寧なヘラミガキ	にぶい褐 黒褐	灰黄褐	1～3ミリ大の砂粒を少量及び石英等微細な鉱物粒を含む	
48	V－I	口縁部に2条の凹線文	外面は「寄せナデ」。内面は「寄せナデ」かヘラミガキの風化したもの	にぶい赤褐	にぶい赤褐	石英、長石粒、1ミリ以下の砂粒を多く含む	
49	V－I	縁を今なたも条以上の凹線文（凹線文のはミガキ）その上に斜状の櫛痕文	内外面は横方向のヘラミガキ	黒	褐灰	1ミリ以下の微細な砂粒及び鉱物を含む	内面黒曜石に工具痕 黒色炭研土器
50	V－I	胴曲の上部に凹線文か	外面胴曲部及び内面は横方向のヘラミガキ。外面胴部下半は縦方向のヘラミガキ	灰褐	にぶい橙 黒褐	1ミリ以下の砂粒を含む	
51	V－I	胴部上半に3条以上の凹線文	内外面ともナデか。風化著しい	灰黄褐	にぶい黄橙	＊	外面にスス
52	V－I	胴部上半に3条の凹線文	内外面とも横方向のミガキ	明赤褐 赤黒	赤褐	1ミリ以下の石英、角閃石等の鉱物粒及び砂粒を多く含む	外面の一部にスス
53	V－II	口縁部近に沿った横の凹線文、頸部直下の櫛痕文下に沿った、口縁部内側に指ナデと思われる1条のくぼみ	内外面ともに横方向のナデ	にぶい橙	暗灰黄	2～4ミリの砂粒及び1ミリ以下の砂粒や石英などの鉱物粒を多く含む	波状口縁
54	V－I	口縁部の3条の凹線文の中に沈線文を施す。（凹線文中は1条）	外面は横方向のヘラミガキ。内面は横方向のナデ。部分的にヘラミガキも見られる	にぶい橙	にぶい橙	黒色鉱物粒を少量含む	波状口縁
55	I	口縁部に2条の太めの沈線文	内面、底部はナデ。外面は横方向のヘラミガキと思われる。風化著しい	橙	淡黄橙	1～2ミリの砂粒及び1ミリ以下の石英、角閃石などの鉱物粒を多く含む	
56	V－I	口縁部に2条の雑な沈線文	内外面ともナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1ミリ以下の砂粒や石英を多く含む	外面にスス 波状口縁
57	V－I	頸曲付近に太めの沈線文	外面は横方向のヘラミガキ。内面は横方向の雑なヘラミガキ	褐 にぶい赤褐	赤褐 黒褐	2ミリ以下の砂粒、微細粒及び1ミリ以下の長石、石英等鉱物粒を含む	
58	V－I	口縁帯に挽くて雑な4条の沈線文	外内面とも横ナデ	灰白	灰褐	2ミリ以下の砂粒が多い	
59	V－I	－	外面は胴曲部以上を横ナデの後、縦方向ヘラがき。下部は縦ナデの後、横方向のミガキ。内面は横ナデ上部に縦状条痕が残る	灰褐	にぶい橙	2ミリ以下の砂粒が多い。微細な石英、黒色鉱物粒を含む	外面の一部にススス
60	V－I	－	外面は横及び斜方向の丁寧なナデ 内面はナデ	暗赤褐	黄橙	金雲母、石英、角閃石、長石等鉱物粒及び1～2ミリの砂粒を含む	外面にススス
61	I	口縁部付近に1条の凹線文	内外面ともに横ナデ	橙	灰褐	3ミリ以下の砂粒及び、石英、長石、黒い鉱物粒等を多く含む	
62	V－I	口縁部に1条の幅広沈線文	＊	淡黄橙	淡黄 暗灰黄	2ミリ以下の砂粒及び、角閃石、金雲母等鉱物粒を多く含む	外面にススス
63	V－I	－	内外面とも横方向のナデの後ヘラミガキ	にぶい橙	淡黄橙	2ミリ以下の砂粒及び、石英、黒い鉱物粒等を多く含む	
64	I	－	内外面とも横方向のヘラミガキ	にぶい黄橙 灰黄褐	褐灰 明灰黄	2ミリ以下の砂粒を多く含む。1ミリ以下の長石、黒い鉱物粒等を含む	外面に一部ススス
65	V－I	口縁部内面に肥厚文状のくぼみ	＊	にぶい褐	にぶい橙	1～3ミリ大の砂粒を少量含む。1ミリ以下の石英、黒い鉱物粒を多く含む。石英は特に多く含む	＊
66	V－I	波頂部に押圧。その下に1条の沈線文	内部頸部以上から外面にかけて横方向のヘラミガキ。内面下部は丁寧な横ナデか	にぶい赤褐 にぶい橙	にぶい橙	1ミリ以下の石英、長石等鉱物及び砂粒を含む	
67	V－I	口縁部に1条の沈線文	内外面とも横方向のヘラミガキ	暗褐	にぶい赤褐	1～2ミリの砂粒を多く含む	内面の所々に炭化物 外面に一部ススス
68	V－I	＊	＊	橙	暗褐灰	1ミリ以下の砂粒を多く含む。微細な鉱物粒を含む	外面に一部ススス
69	V－I	口縁部と口縁部外面に沈線文	内外面とも横方向のミガキ	明褐灰	褐灰	1.5ミリ以下の黒い鉱物粒、長石及び微細な金雲母を含む。1～4ミリ大の砂粒を含む	
70	II－W	口縁帯に横方向の3条の沈線文	内外面とも粗い横ナデ	淡黄橙 褐灰	淡黄橙	1ミリ以下の石英、黒い鉱物粒を含む	
71	III	口縁帯に横方向の4条の沈線文	内外面とも横ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	2ミリ以下の石英、長石、黒い鉱物粒及び砂粒を多く含む。石英が目立つ	外面にススス
72	V－II	外面に3条非常に太い沈線による弧文。その下に1条の沈線文	＊	淡黄	淡黄 黄灰	2ミリ以下の砂粒及び、石英等の鉱物粒を多く含む	
73	V－I	－	外面の上部と内面は横方向のヘラミガキ。外面の下部は斜方向のヘラミガキ	灰褐	褐灰	2～4ミリの砂粒を多く含む	外面にススス
74	V－II	－	内外面とも横方向にヘラミガキ	黒褐	灰黄褐	1ミリ以下の砂粒及び石英等の鉱物粒を含む	
75	V－I	－	内外面とも胴部球の胴曲部上より下部は横方向に雑なヘラミガキ。下部は丁寧なヘラミガキ	暗赤褐	灰褐	1ミリ以下の砂粒が多く。長石、石英、黒い鉱物粒を含む	外面と口縁部内面にススス
76	V－I	口縁部に低い突帯	内外面ともナデ	にぶい橙	にぶい橙	2ミリ以下の砂粒を多く含む。石英等鉱物粒を含む。石英は多い	外面にススス 内面に炭化物
77	I	口縁部にヒレ状突起と沈線文	内外面とも横方向のヘラミガキ。頸部より下の内面は横方向のナデ	灰黄褐 明黄褐	灰黄褐 にぶい黄橙	微細な黒い鉱物粒等を少量含む	

第13表　縄文土器観察表(4)

図版番号	出土地区	文様	調整	色調 外部	色調 内部	胎土の特徴	備考
78	V－I	－	内面は横方向のヘラミガキ、外面の縦面部から、上は、ヘラ状が観察なヘラミガキ、下半は丁寧なナデか	灰黄	黄灰	1ミリ以下の黒い鉱物粒等を含む	内面に炭化物
79	V－II	－	内外面とも横方向のヘラミガキ	褐灰	褐灰	微細な鉱物粒を極く少量含む	口縁部下に穿孔
80	VI－I	胴部に横ネタタイ状沈線付突起	内外面とも丁寧なナデ（ミガキの痕化したものか、擦痕著しい）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な鉱物粒を極く少量含む	
81	V－I	－	内外面とも横方向のヘラミガキ	にぶい黄橙	浅黄橙	微細な石英等を極く少量含む	
82	V－II	－	＊	褐灰	褐灰	＊	
83	V－III	口唇部に1条の浅い沈線文	内面はナデ。外面は横方向のヘラミガキか、風化著しい	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1ミリ以下の砂粒を多く含む	
84	VI	口縁部に孔列文	内面下部はナデ。その他はすべて粗い横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	1ミリ以下の砂粒及び、石英等鉱物粒を多く含む	
85	II－W	＊	内外面とも横方向の貝殻条痕文 外面は一部横ナデ	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 にぶい黄橙	3ミリ以下の黒い鉱物粒、石英、長石及び、砂粒を多く含む。黒雲母小粒も多く見られる	
86	VI	口唇部に押点の為の縦状突起と胴日突帯文	内外面とも横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1ミリ以下の鉱物粒や砂粒を少量含む	
87	V	胴日突帯文	内外面とも粗い横ナデ（貝殻条痕か）	にぶい黄橙	にぶい橙	1ミリ以下の砂粒及び、雲母、石英等、鉱物粒を含む	
88	V－I	波頂部に刺みか	外面はナデ。内面は光沢のあるナデ	にぶい黄橙	橙	1ミリ以下の砂粒及び、石英、黒い鉱物粒等を多く含む	波状口縁。通し孔
89	I	比較波状による乱れる弧状の刻突文と弧状の突帯文	内外面とも横ナデ	褐 橙	明黄褐 にぶい黄橙	2ミリ以下の砂粒が多く含まれる 1ミリ以下の長石も目立つ	
90	V－I	－	内面及び外面上部横ナデ、下部は縦ナデ	橙	橙	微細な鉱物粒を含む 2ミリ前後の砂粒を含む	外面に一部スス
91	V－I	－	＊	浅黄橙	にぶい黄橙	3ミリ大の砂粒を少量含む。2ミリ以下の長石、石英、金雲母等、鉱物粒及び、砂粒を多く含む	
92	V－I	－	＊	浅黄橙	浅黄橙	2ミリ以下の黒い鉱物粒、石英、長石及び、砂粒を多く含む	
93	V－II	－	外面は粗い横ナデ 内面は丁寧な横ナデ	褐 灰褐	橙	1ミリ以下の砂粒及び、石英、黒い鉱物粒等を多く含む	外面に一部スス
94	V－I	－	内外面とも縦、斜方向の粗ミガキ及び部分的に条痕文か、内面は横方向のナデ 外面下部は一部横方向の細いヘラミガキ	灰黄褐	灰黄褐	2ミリ以下の石英、黒い鉱物粒及び、砂粒を多く含む	外面に一部黒色物質 内面下部に炭化物
95	V－I	－	外面及び内面上部は横ナデ 内面下部は丁寧な横ナデ	にぶい褐	橙	1ミリ以下の砂粒、石英、黒い鉱物粒等を含む	内面に一部黒色物質 外面にスス
96	V－I	－	内面及び外面上部は横ナデ 外面下部は斜めナデか、外面の調整は粗い	浅黄橙	淡黄	3～3ミリの砂粒及び、1ミリ以下の砂粒や石英、黒色の鉱物粒等を含む	外面にスス
97	I	－	内面及び外面上部は横ナデ 外面下部は縦ナデ	橙	橙	3～4ミリ大の砂粒を含む。1ミリ以下の石英、長石、黒い鉱物粒及び砂粒を多く含む。雲母小粒も目立ちる	
98	V－f	－	＊	にぶい黄橙	浅黄橙	2～5ミリ大の砂粒を含む。1ミリ以下の砂粒及び石英、黒石等鉱物粒を多く含む	
99	I	－	＊	橙	にぶい橙	2ミリ以下の砂粒及び、長石、石英等鉱物粒を含む	外面に一部スス
100	I	－	内外面ともナデ、一部に斜方向の貝殻条痕文か、上部数ヶ所みられる。風化の為は明瞭による整形	明赤褐	橙	3ミリ大の砂粒を含む。1ミリ以下の砂粒及び、長石、石英等鉱物粒を含む	
101	V－I	－	内外面とも斜方向のナデ	橙	浅黄橙 橙	2～4ミリの砂粒を含む	わずかな上げ底
102	V－I	－	＊	橙	橙	2ミリ以下の砂粒、及び微細な石英、黒色鉱物粒を含む	
103	V－I	－	内面はナデ。外面は縦ナデ。底部付近は横ナデ	淡黄	暗灰黄	1～3ミリの砂粒をとても多く含む	わずかな上げ底
104	V－I	－	外面は横、斜方向の粗いヘラミガキ 内面、底部はナデ	にぶい黄橙	浅黄黒褐	1ミリ以下の石英及び砂粒を含む	内面に炭化物
105	V－I	－	内外面ともナデ 底部は指頭によるナデか	淡黄	浅黄橙 褐灰	1ミリ以下の石英、黒色鉱物粒、砂粒を多く含む	わずかな上げ底
106	V－I	－	内面は横ナデ。外面は横ナデ 胴部付近は横ナデ	浅黄橙 褐灰	黄褐	2ミリ以下の砂粒を多く含む。石英など鉱物粒を少量含む。	内面に炭化物。上げ底
107	V－I	－	外面は斜、横方向のナデ 内面はナデ	浅黄橙	にぶい黄褐	2ミリ以下の砂粒及び黒色鉱物粒を多く含む	上げ底
108	V－I	－	外面は縦方向のヘラミガキ。内面は横方向のヘラミガキ。底部はナデか	にぶい橙 橙	淡橙	1ミリ以下の砂粒を多く含む。石英、長石等鉱物粒を微量含む	わずかな上げ底
109	V－I	－	外面は縦方向のヘラミガキ 底部、内面はヘラミガキ	橙	黒	長石、石英、黒等、角閃石等鉱物粒が多い。1ミリ以下の砂粒を少量含む	外面に微量のスス わずかな上げ底
110	V－I	－	外面は縦方向のヘラミガキ 底部、内面はヘラミガキ	赤褐	にぶい褐	2ミリ以下の砂粒及び長石、石英、黒色鉱物粒を含む	内面に炭化物 わずかな上げ底
111	V－I	－	内面はミガキ 外面は横方向のミガキか、光沢あり	褐灰	にぶい黄橙	1ミリ以下の石英等、鉱物粒及び1ミリ大の砂粒を含む	外面にススA。上げ底
112	V－I	－	内面はていねいなナデか 外面は光沢著しいナデか	にぶい黄橙	淡黄	微細な砂粒、石粒を少量含む	わずかな上げ底
113	V－I	－	内外面とも横方向のヘラミガキ	褐灰	褐灰	1ミリ以下の砂粒及び石英、長石等鉱物粒を含む	

2　土器片加工円盤・土器片錘（第26図114～120、観察表を参照）

学頭遺跡では、包含層から縄文土器片を利用した円盤型の加工品が5点程出土している。ナデまたは貝殻条痕調整の明るい色調の土器片である。側面は粗く面取りしただけのものや丁寧に面取りしたものが見られる。3～5㎝程の大きさのやや楕円形である。また、土器片錘は半欠品も含め24点程出土している。形状は小判型が多く短冊型も数点ある。器面調整はナデまたは貝殻条痕のものが多く、磨研土器利用品は4点である。この4点は器厚が薄い浅鉢形土器片で、120は晩期前半の浅鉢形土器の外反した頸部付近と思われる。これらの土器片錘は側面を丁寧に面取りしたものが多い。ただ、切目部分は残りが悪く、殆どは摩耗しているものと思われる。大きさに大小ある。

3　石器（第27図、石器計測表を参照）

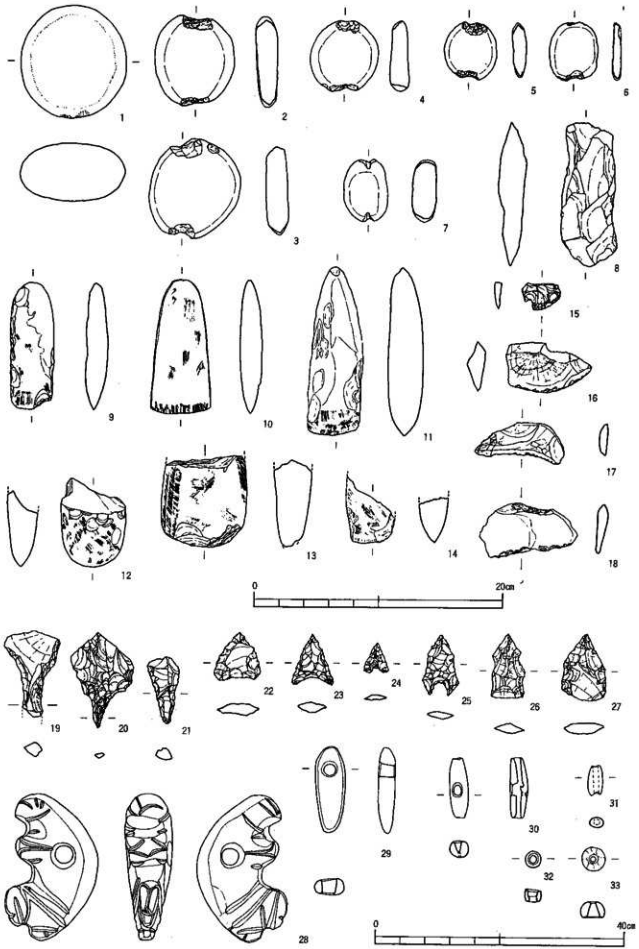
包含層から出土した石器は全体に量的には少ないが、そのうち縄文時代と考えられる石器49点について計測を行った。弥生時代の遺物と混在していたため必ずしも縄文時代の石器と確定できないものも含まれているが、一応ここに掲載した。磨石は1点出土した。花崗岩製と思われる。石皿は出土していない。打欠石錘は5点の出土、切目石錘は1点のみ出土した。いずれも砂岩製である。打製石斧は1点、磨製石斧は局部磨製を含めると10点の出土である。石材は頁岩が多い。石匙は2点、剥片石器はスクレイパーを含め4点出土している。やはり頁岩が多い。打製石鏃は13点の出土である。石材としては頁岩が最も多く、黒耀石（鹿島産を含む）、流紋岩・チャートが見られる。石錐は5点出土し、チャートや頁岩を用いている。28～33は翡翠製の玉類で産地は不明（28・29は糸魚川流域原産の可能性がある）

第14表　土器片加工円盤・土器片錘観察表

図版番号	出土地区	幅(㎝)	長さ(㎝)	厚さ(㎝)	重さ(g)	部位	種別	文様他特徴など	色調 外面	色調 内面
114	Ⅴ－Ⅱ	5.15	5.2	1.1	32.6	胴部片	土器片加工円盤	貝殻条痕の上をナデ	明赤褐	明赤褐
115	Ⅲ	4.55	5.2	0.7	20.7	〃	〃	ナデ。側面は丁寧に面取り	浅黄橙	灰白
116		3.6	5.7	0.9	21.3	〃	土器片錘	ナデ	淡黄	淡黄灰白
117	Ⅲ	2.95	4.6	1.06	17.0	〃	〃	ナデ。切目は摩耗	黄橙・褐灰	褐灰
118	Ⅴ－Ⅱ	2.98	5.65	0.95	17.7	〃	〃	貝殻条痕の上をナデ。側面は面取り	明赤褐	橙
119	Ⅴ	2.75	4.4	1.1	13.3	〃	〃	ナデ。磨耗著しい。切目付近も摩耗	黄橙・黄灰	黒
120	Ⅵ	2.45	4	0.7	9.5	頸部片	〃	ヘラミガキ。磨研浅鉢形土器片。磨耗	にぶい黄橙	褐灰
121	Ⅴ	4.1	5.8	0.85	24.2		〃		橙	にぶい黄橙
122	Ⅴ－Ⅰ	4.3	6.3	0.9	31.9		〃		浅黄橙	浅黄橙
123	Ⅳ	3.6	4.75	1.1	22.4		〃		橙	明赤褐
124	Ⅴ－Ⅰ	4.0	5.45	0.9	21.7		〃		橙	浅黄橙・褐灰
125	Ⅴ	3.65	5.75	0.75	21.9		〃		橙	にぶい褐
126	Ⅴ－Ⅰ	3.3	4.4	0.7	15.0		〃		褐灰・にぶい橙	にぶい橙
127	Ⅴ－Ⅰ	4.4	3.9	0.6	11.0		〃		灰褐	灰褐
128	Ⅴ－Ⅱ	3.4	3.4	0.65	8.8		〃		褐灰・にぶい黄橙	にぶい黄橙
129	Ⅲ	3.2	3.3	0.85	9.3		〃		にぶい橙・褐灰	浅黄橙・にぶい橙
130	Ⅴ－Ⅰ	2.85	3.3	1.1	11.2		〃		橙	橙
131		3.2	2.9	0.9	9.6		〃		橙	灰褐
132	Ⅴ－Ⅰ	2.6	3.0	1.1	9.3		〃		褐灰	にぶい黄橙
133	Ⅴ－Ⅱ	3.15	3.98	0.7	8.4		〃		浅黄橙	褐灰
134	Ⅴ－Ⅱ	2.7	3.05	0.85	6.5		〃		にぶい橙	にぶい橙
135	Ⅴ－Ⅱ	2.45	2.7	0.75	5.6		〃		明褐灰・淡橙	淡橙
136	Ⅴ－Ⅰ	3.38	2.27	0.65	4.6		〃		灰白	にぶい黄橙
137	Ⅴ－Ⅱ	2.45	4.63	0.85	12.2		〃		橙	にぶい橙
138	Ⅴ－Ⅱ	4.53	4.35	1.15	23.6		〃		にぶい橙	にぶい橙
139	Ⅲ	4.93	3.78	0.9	18.0		〃		にぶい橙	にぶい褐
140	Ⅲ	3.78	4.4	1.2	23.4		円盤		にぶい橙	にぶい橙
141	Ⅲ	3.0	3.23	1.05	11.9		〃		にぶい橙	にぶい黄橙
142	Ⅴ－Ⅱ	4.55	5.1	1.5	29.2		〃		橙	橙

第15表　石器計測表

遺物番号	種　別	出土地区	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	石　材	備　考
1	磨石	Ⅳ－Ⅰ	10.0	8.5	4.6	515.6	花崗岩	
2	打欠石錘		7.2	6.4	1.75	125.1	砂岩	
3	〃	Ⅴ－Ⅱ	8.0	7.4	1.75	161.3	〃	
4	〃	Ⅴ	5.7	5.5	1.4	69.0	〃	
5	〃	Ⅲ	4.6	4.3	1.1	32.0	〃	
6	〃	Ⅴ－Ⅱ	4.7	4.0	0.7	19.4	〃	
7	切目石錘	Ⅲ	5.0	3.6	3.0	50.9	〃	
8	打製石斧	Ⅰ	11.5	4.4	2.2	119.5	頁岩	
9	磨製石斧	Ⅲ	10.1	3.3	1.8	91.5	〃	
10	〃	Ⅴ－Ⅰ	10.65	4.8	1.8	136.7	流紋岩	
11	〃	Ⅴ－Ⅱ	13.4	4.3	2.8	238.6	頁岩	
12	〃	Ⅵ－Ⅰ	7.1	5.1	2.3	96.0	〃	基部欠損
13	〃	Ⅴ－Ⅰ	7.4	6.9	2.8	215.6	〃	〃
14	〃	Ⅲ	5.33	3.95	2.3	45.0	〃	〃
15	石匙	Ⅳ	3.15	2.1	0.5	5.0	チャート	
16	〃	Ⅴ	6.9	4.0	1.5	36.8	頁岩	
17	剥片石器	Ⅴ－Ⅱ	7.2	2.8	0.65	15.0	〃	
18	〃	Ⅴ－Ⅰ	7.9	4.1	0.8	24.6	〃	
19	石鏃	Ⅴ	3.5	鏃部 0.9	鏃部 0.6	3.3	〃	鋒先端部欠損
20	〃	Ⅴ－Ⅰ	3.8	〃 0.7	〃 0.2	6.7	チャート	
21	〃	Ⅴ－Ⅰ	2.7	〃 0.75	〃 0.5	1.4	〃	
22	打製石鏃	Ⅴ－Ⅰ	1.9	1.85	0.45	1.4	頁岩	
23	〃	Ⅴ－Ⅰ	2.05	1.7	0.45	0.9	〃	
24	〃		1.2	1.0	0.15	0.1	黒曜石(姫島)	
25	〃	Ⅴ	2.4	1.45	0.35	0.9	チャート	
26	〃	Ⅴ－Ⅱ	2.55	1.38	0.4	1.3	頁岩	
27	〃	Ⅴ－Ⅱ	2.65	1.8	0.45	1.8	〃	
28	玉	Ⅴ	3.85	3.35	1.95	52.8	翡翠	長軸炭か？　両側穿孔
29	〃	Ⅴ	5.5	1.25	0.7	5.5	〃	〃　片側穿孔
30	〃	Ⅴ	2.4	0.8	0.7	1.6	〃	〃　3方穿孔
31	〃	Ⅴ－Ⅰ	1.2	0.6	0.45	0.5	〃	〃　両側穿孔
32	〃	Ⅴ－Ⅱ	0.7	0.65	0.5	0.3	〃	〃　片側穿孔
33	〃	Ⅵ－Ⅰ	1.0	0.9	0.65	1.0	〃	〃　片側穿孔
34	剥片石器	Ⅲ	5.65	2.6	0.8	13.3	頁岩	
35	〃	Ⅴ	6.23	2.4	0.78	14.4	〃	
36	石鏃	Ⅴ－Ⅱ	2.6	鏃部 0.5	鏃部 0.6	2.6	チャート	
37	〃	Ⅴ	3.7	〃 1.1	〃 0.55	3.5	頁岩	鋒先端部欠損
38	打製石鏃	Ⅴ－Ⅰ	2.0	1.1	0.39	0.6	黒曜石	片脚部欠損
39	〃		0.94	0.78	0.19	0.1	〃	下部欠損
40	〃	Ⅴ	1.6	1.3	0.2	0.6	頁岩	
41	〃	Ⅲ	1.8	1.1	0.4	0.7	黒曜石(姫島)	片脚部欠損
42	〃		2.4	1.45	0.4	0.9	流紋岩	先端部片脚部欠損
43	〃	Ⅴ－Ⅰ	1.9	1.5	0.39	0.8	頁岩	先端部欠損
44	〃	Ⅴ－Ⅰ	2.0	1.48	0.32	0.7	〃	
45	磨製石斧	Ⅴ－Ⅰ	12.4	4.6	3.35	224.5	流紋岩	基部欠損
46	〃	Ⅴ－Ⅰ	3.7	2.0	1.5	16.0	頁岩	先端部、基部欠損
47	〃	Ⅴ－Ⅰ	4.85	3.9	1.8	40.6	〃	基部欠損
48	局部磨製石斧	Ⅴ－Ⅱ	6.2	4.0	1.0	51.3	〃	〃
49	磨製石器	Ⅵ－Ⅰ	7.6	2.5	2.15	51.1	〃	石棒か。基部欠損


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
0
20cm
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
40cm

第27図　石器実測図

2　弥生～古墳時代

学頭遺跡では包含層より多くの遺物が出土しておりその約半分がこの時期の遺物である。包含層とはいえその堆積状況は明瞭ではなく、遺物の時期的隔たりがみられるため一括資料として扱うことはできない。そこで弥生時代から古墳時代の土器に関しては次のように形式分類をし、遺物個々の詳述はおこなわない。また、遺構出土として扱ったものはここではとりあげていない。

(1)　甕（28～34図）

甕は口縁～胴部をⅠ～Ⅵ類に、胴部～底部をⅠ～Ⅲ類に分類した。

口縁Ⅰ類　直行口縁に突帯を施すもので５つに細分される。

1　一条の突帯がめぐるもの（124）

2　一条の刻目突帯がめぐるもの（121,123）

3　一条の刻目突帯がめぐり、口唇部にも刻目をもつもの（122,126,127,128）

4　二条の刻目突帯がめぐるもの（129,130,131,133,135）

5　二条の刻目突帯がめぐり、口唇部にも刻目をもつもの（132）

口縁Ⅱ類　Ｌ字口縁をもつもので３つに細分される。

1　Ｌ字口縁以外に特徴の無いもの（138～145,148）

2　胴部に数条の突帯をもつもの（134,136）

3　胴部に数条の沈線をもつもの（137）

口縁Ⅲ類　中型～大型の甕で２つに細分される。

1　Ｌ字口縁で胴部に一条の突帯をもつもの（146,147,154）

2　頸部から大きく外傾する口縁をもち、胴部に一条の突帯をもつもの（152,153,156）

口縁Ⅳ類　頸部から大きく外傾する口縁をもつもので４つに細分される。

1　突帯をもたないもの（150,168～176）

2　口唇部が上方にのびるいわゆるはねあがり口縁をもつもの（556）

3　胴部に一条の突帯がめぐるもの（157～158）

4　胴部に一条の刻目突帯がめぐるもの（159～167）

口縁Ⅴ類　頸部がくの字状に屈曲するもので５つ細分される。

1　口縁部が最大径となるもの（177,178,180,181,182,187,188,189,191～194,195,197,198,200,201）

2　口縁部、胴部の最大径がほぼ等しいもの（179,185,202）

3　最大径が胴部にあるもの（183,186,190,199,202）

4　器高と最大径がほぼ等しく、球形を呈する胴部に最大径をもつもの（203,205）

5　内面にヘラケズリ調整がみられ、胎土、焼成ともに他者と著しく異なるもの（207）

口縁Ⅵ類　二重口縁形を呈し、口縁部外面に数条の凹線がめぐるもの（206）

底部Ⅰ類　底部と胴部の境が明瞭でないもので４つに細分される。

1　球形に近い胴部をもち、最大径に比して小さな平底を呈するもの（199,204,223,228,230,240）

2　最大径に比して小さな平底を呈するもの（200,224,225,227）

3　胴部のたちあがりが急峻で平底を呈するもの（246,247）

4　わずかに上げ底を呈するもの（201,229）

底部Ⅱ類　底部と胴部の境が明瞭だが、外反しないもので２つに細分される。

1　平底を呈するもの（192,208,209～213,215,244）

2　わずかに上げ底を呈するもの（217,236）

底部Ⅲ類　底部が外反するもので3つに細分される。

1　平底もしくはほぼ平底を呈するもの（214,216～220,222）

2　わずかに上げ底を呈するもの（221,226,231,233,243）

3　著しい上げ底を呈するもの（234,235,237～239,241～243,245）

なお249～251,254,255,261～263,265,555は小型の甕形土器で、甕の分類に準拠する。252,253,256～259,264は小型の鉢形土器である。260は壷のⅥ類－1に分類される。

(2)　壷（35～40図）

壷は口縁部Ⅰ～Ⅵ類に、頸部をⅠ～Ⅴ類に、底部をⅠ～Ⅲ類に分類した。

口縁Ⅰ類　鋤先状を呈するもので6つに細分される。

1　口縁部が水平方向に短く直線的に延び、口唇部が肥厚しないもの（271,285）

2　口縁部が水平方向に延び、口唇部が肥厚したもの（289）

3　鋤先部分の上面が直線的で口唇部下端がたれぎみに発達するもの（268,269）

4　鋤先部分の上面、下面が外反しながら水平方向に延びるもの（275,276,278,279）

5　鋤先先端部分が独立した三角突帯となったもの（286～288）

6　口縁部がやや下方に延び、口唇部上端が発達したもの（281,283）

口縁Ⅱ類　Ⅰ類と形態は類似するが鋤先状にならないもので3つに細分される。

1　口縁部下方の内面から独立した器壁が内側に延びるもの（272,280）

2　口縁部がほぼ水平方向に延びるもの（266,267,293,297,298）

3　口縁部がやや垂れ気味になるもの（290）

口縁Ⅲ類　口縁部が斜め上方に延びるもので6つに細分される。

1　口唇部がくぼむもの（294,296,306）

2　口唇部が発達したもの（295）

3　口唇部をほぼ平に仕上げたもの（299,300,301,303）

4　広口のもの（302）

5　口縁部が短く水平方向に屈曲するもの（304,305）

6　口縁部外面に刻み目突帯をめぐらせるもの（326,327）

口縁Ⅳ類　頸部がくの字に屈曲するもので6つに細分される。

1　頸部内面の稜が明瞭で長胴なもの（307,311）

2　頸部内面の稜が明瞭で胴部が球形に近いもの（312,313）

3　頸部内面の稜が明瞭で短頸のもの（314,315,317）

4　頸部内面の稜が明瞭でなく比較的長頸のもの（308,309,310）

5　頸部内面の稜が明瞭でなく短頸のもの（318,319）

6　頸部内面の稜が明瞭でなく口縁部が外反するもの（316）

口縁Ⅴ類　複合口縁をもつもので6つに細分される。

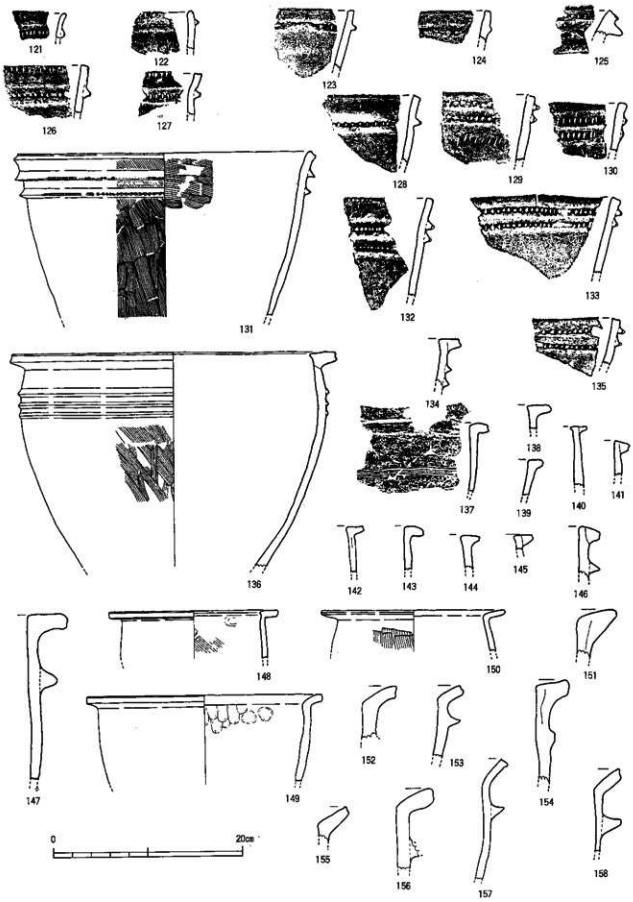
1　口縁部に凹線を施すもの（320～324）

2　口縁部が内傾し口唇部が平なもの（328,329,331,334,338,344,346,347,350）

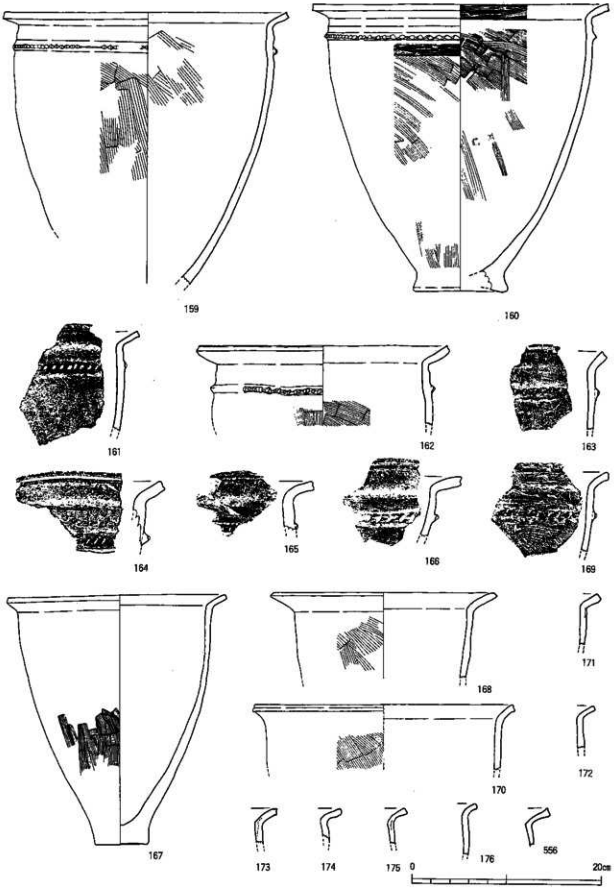
3　口縁部がほぼ直立するもの（333,339～342）

4　口唇部上端が発達したもの（330,355）

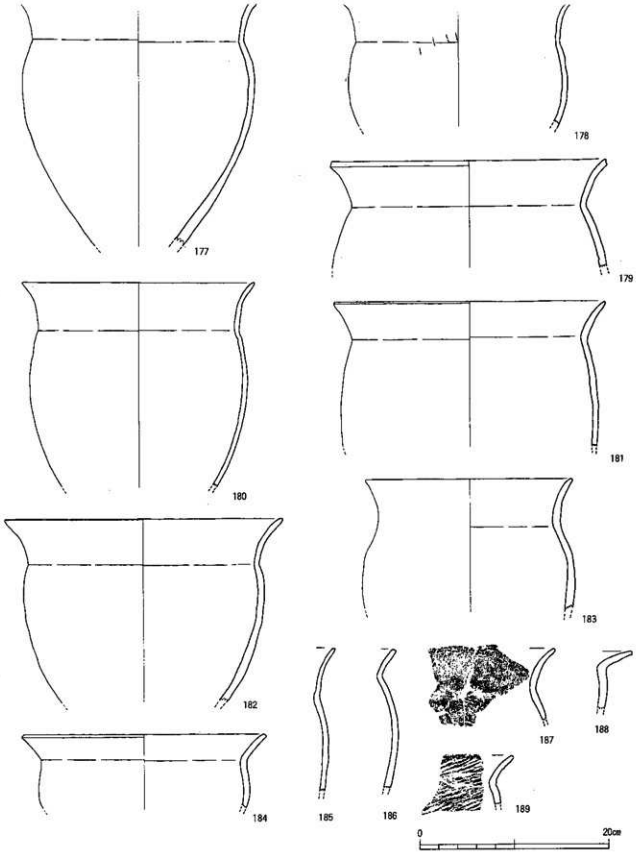
5　口縁部が外反しながらたちあがるもの（337,345,352）



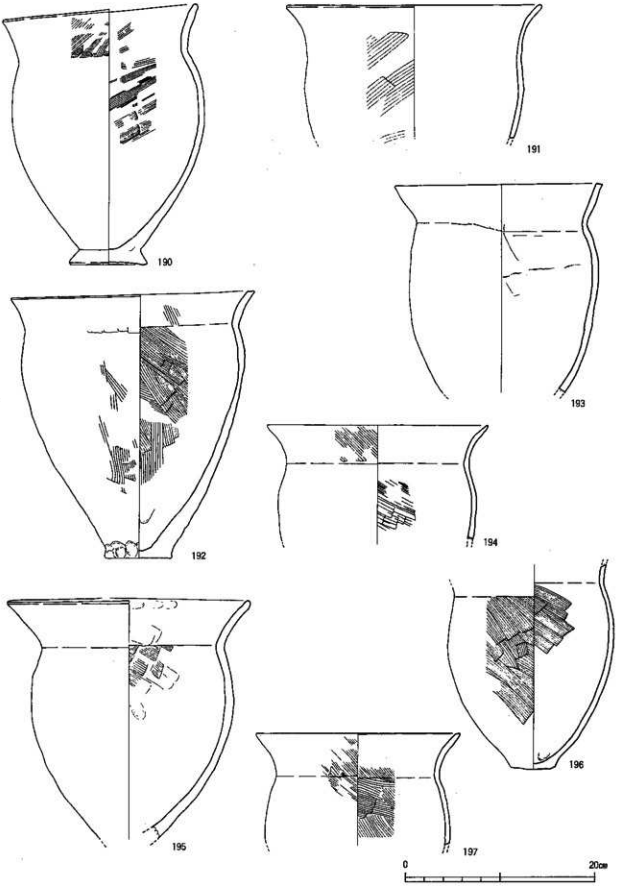
第28図　弥生～古墳時代土器実測図(1)



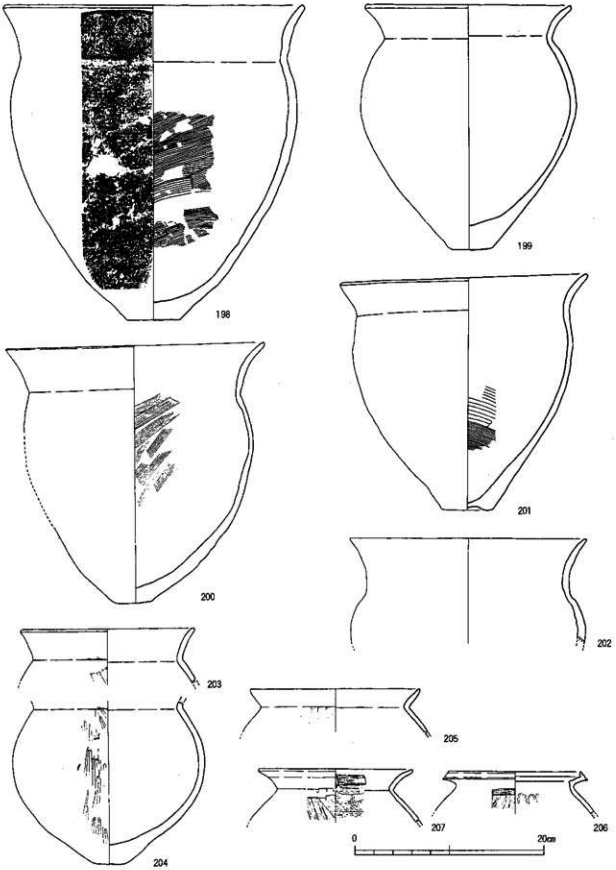
第29図　弥生～古墳時代土器実測図(2)



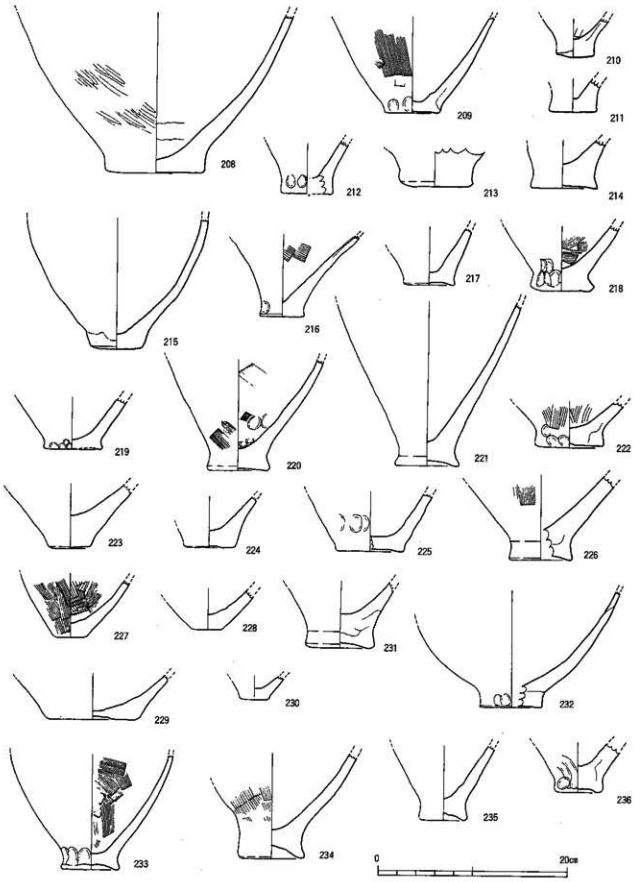
第30図　弥生～古墳時代土器実測図(3)



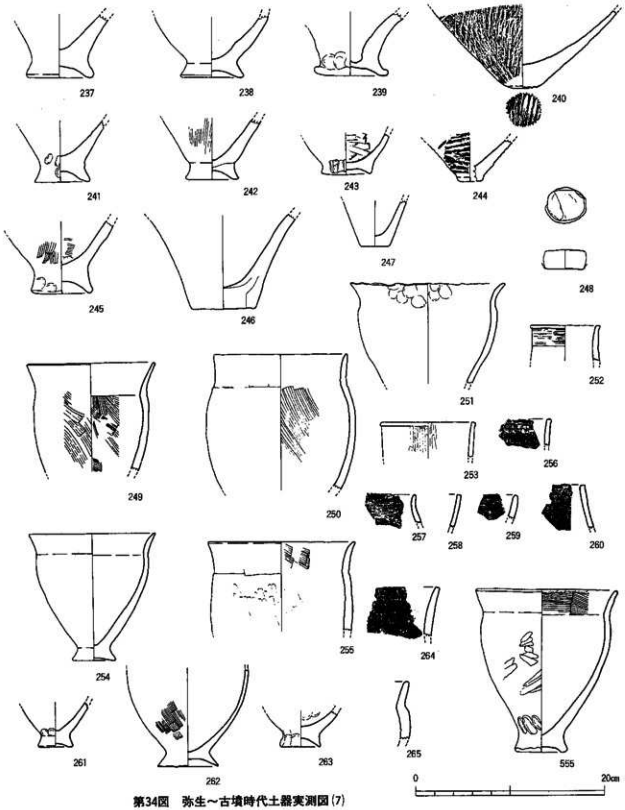
第31図　弥生～古墳時代土器実測図(4)



第32図　弥生～古墳時代土器実測図(5)



第33図　弥生～古墳時代土器実測図(6)



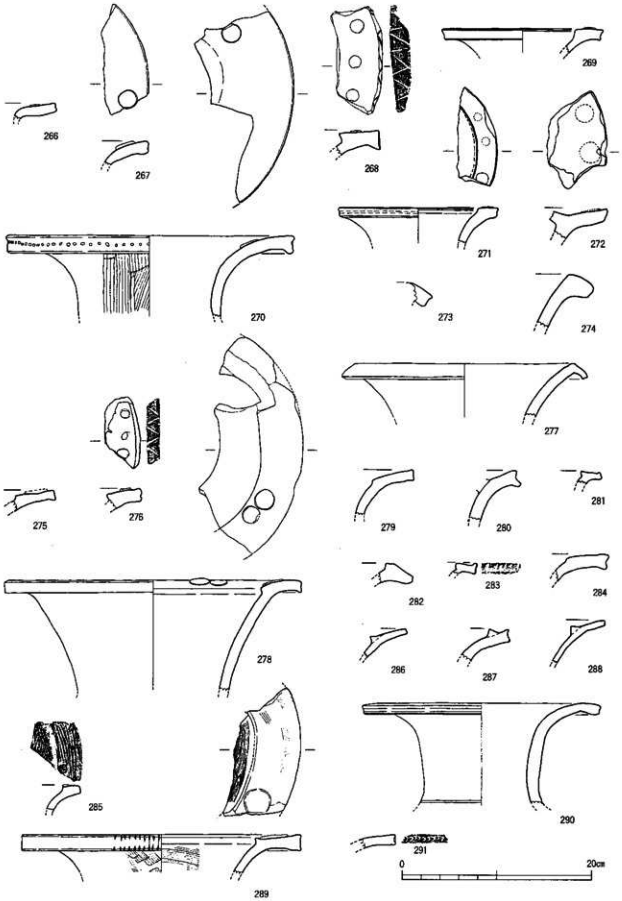
第34図　弥生～古墳時代土器実測図(7)

6　口縁部が短く、内傾するもの（336,343,348,354）

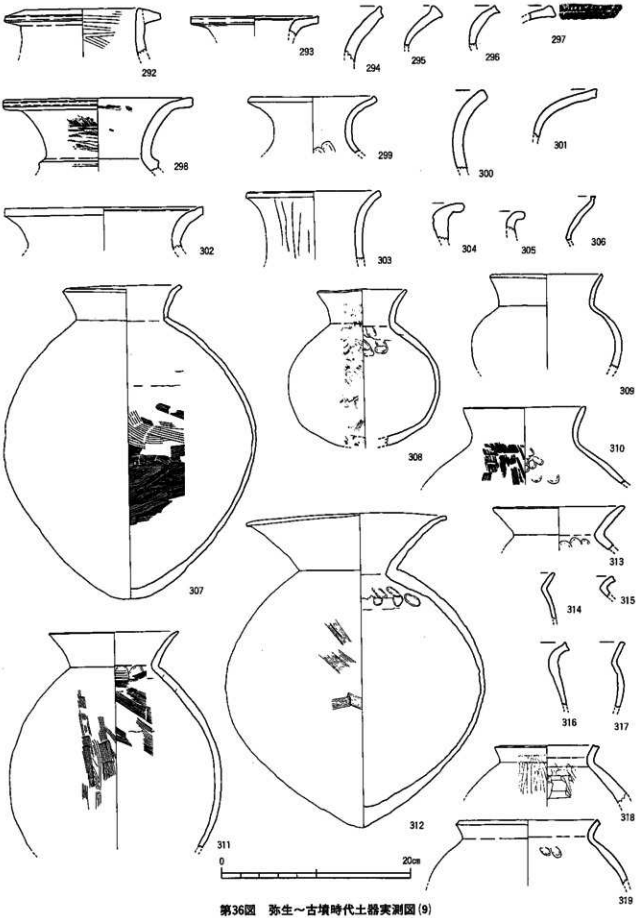
口縁Ⅵ類　頸部が内傾するもので３つに細分される。

1　長頸で口縁部まで直線的なもの（356,357,359）

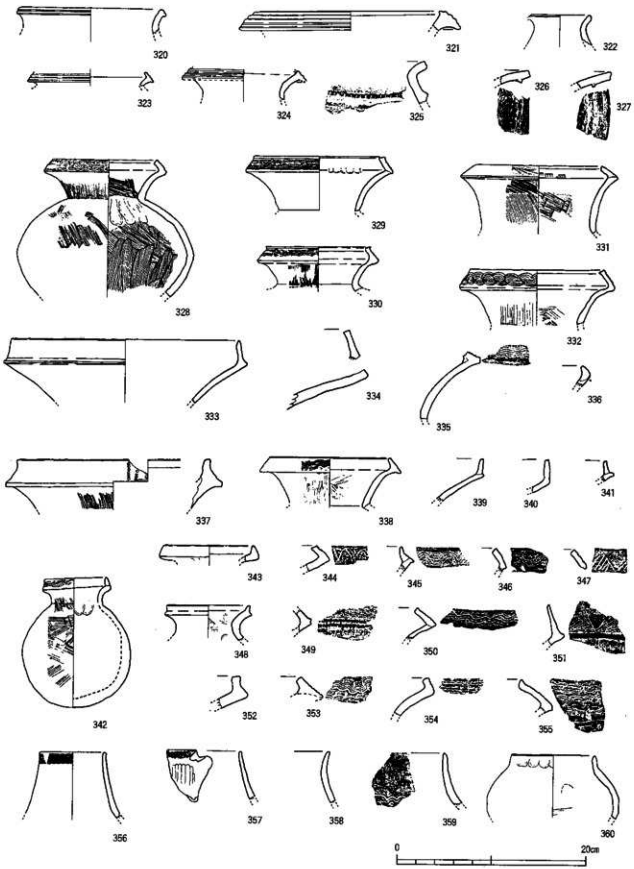
2　長頸で口縁部付近で外反するもの（358）



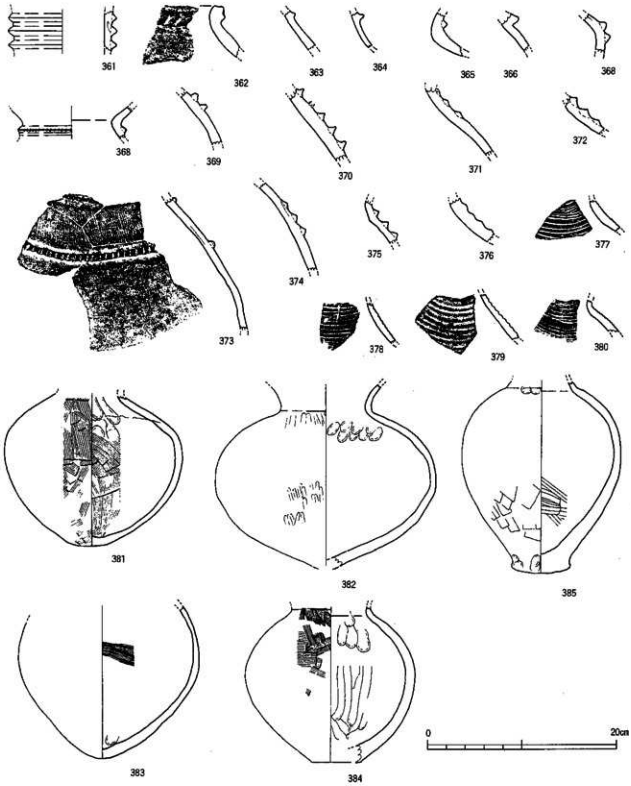
第35図　弥生～古墳時代土器実測図(8)



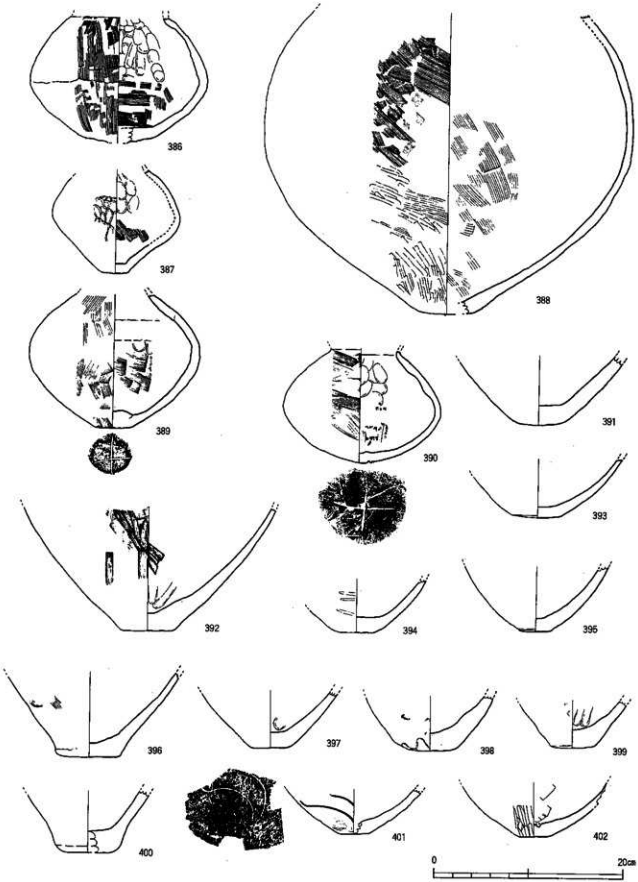
第36図　弥生～古墳時代土器実測図(9)



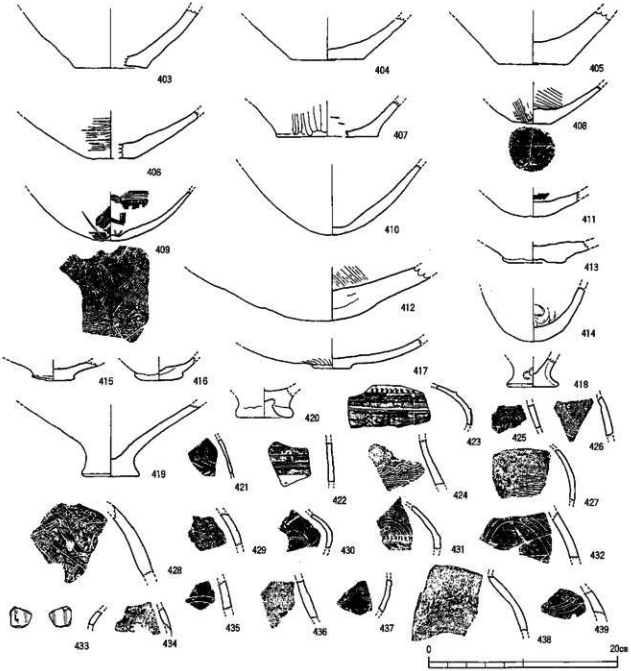
第37図　弥生～古墳時代土器実測図(10)



第38図　弥生～古墳時代土器実測図(11)



第39図　弥生～古墳時代土器実測図(12)



第40図　弥生～古墳時代土器実測図(13)

3　短頸のもの（360）

頸部Ⅰ類　頸部に一条の突帯をもつもの（363～366）

頸部Ⅱ類　頸部に一条の刻み目突帯をもつもの（362,368）

頸部Ⅲ類　頸部から胴部に数状の突帯をもつもの（369～372,374,375,376）

頸部Ⅳ類　頸部から胴部に数状の刻み目突帯をもつもの（373）

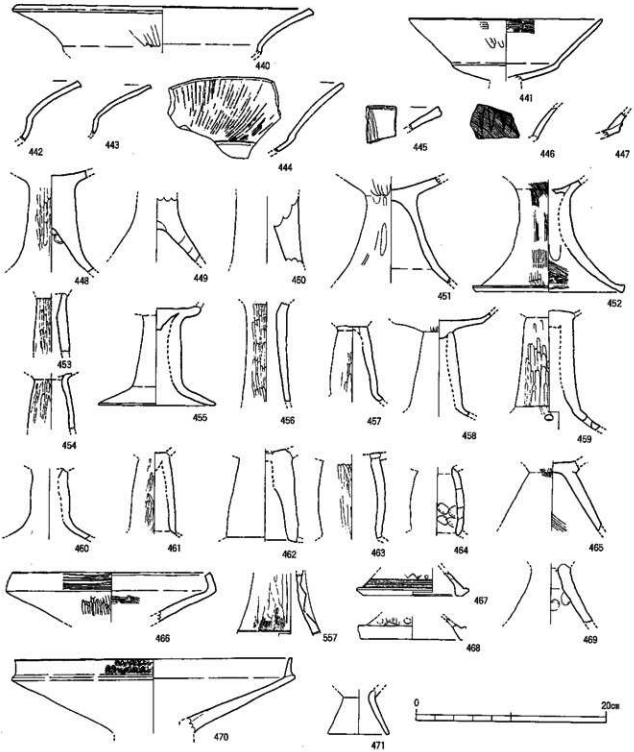
頸部類Ⅴ　頸部から胴部に数状の凹線を施すもの（377～380）

底部Ⅰ類　丸底のもの（382,383,386,390,409,410,411,412,414）

底部Ⅱ類　胴部と底部の境に明瞭な段をもたない平底のもの（381,387,388,391,394,398,401,402,406）

底部Ⅲ類　胴部と底部の境に明瞭な段をもち丸底気味のもの（385）

底部Ⅳ類　胴部と底部の境に明瞭な段をもち平底のもの（384,392,393,396,397,399,400,403～404,407）



第41図　弥生～古墳時代土器実測図(14)

底部Ⅴ類　胴部と底部の境に明瞭な段をもち上げ底になるもの（413,412）

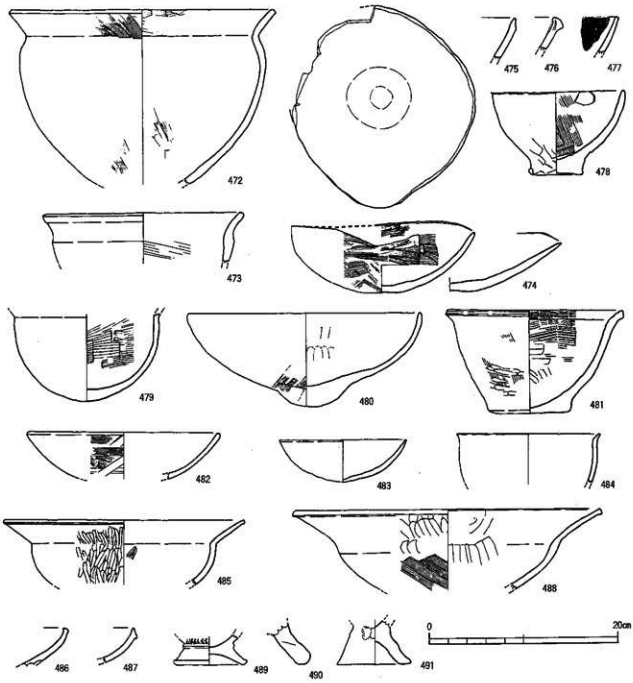
底部Ⅵ類　底部が円盤状を呈するもの（395,415～417）

底部Ⅶ類　底部が外反するもの（418,419）

なお421～432,434～439は胴部片とおもわれるが、突帯、櫛描波状文、重弧文、鉈歯文、線刻などがみられる。

(3)　高杯（41図）

高杯は杯部をⅠ～Ⅱ類に、脚部をⅠ～Ⅲ類に分類した。



第42図　弥生～古墳時代土器実測図(19)

杯部Ⅰ類　杯部に段をもつもので4つに細分する。

1　口唇部を丸く仕上げたもの（441,444）

2　口唇部が肥厚し、平なもの（440,442,443）

3　口唇部が肥厚し、くぼむもの（445）

4　杯部の段に突帯がめぐるもの（447）

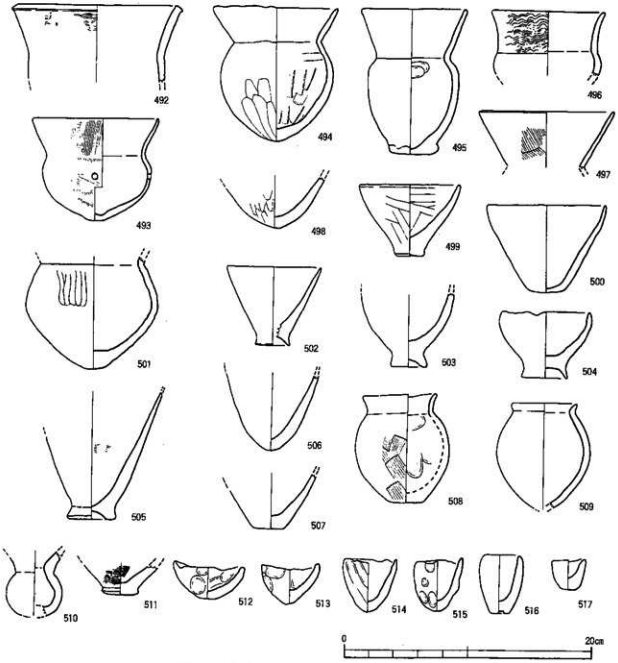
杯部Ⅱ類　口縁部が屈曲し内側に立ち上がるもの（466）

脚部Ⅰ類　脚柱部の中央付近脚裾部が分離しないもの（448～450）

脚部Ⅱ類　脚柱部から裾部まで外反しながらひろがるもの（451,452,460）

脚部Ⅲ類　脚柱部から裾部が大きく屈曲するもので3つに細分する

1　屈曲が緩やかなもの（459,445）



第43図　弥生～古墳時代土器実測図(16)

2　屈曲が鋭いもの（457,458,461）

3　脚柱部がエンタシス状を呈するもの（462～464）

脚部Ⅳ類　脚部が直線的に裾部にむかうもの（465,469）

脚部Ⅴ類　脚部に円形や矢羽状の透かしをもち、裾部が肥厚したもの（467,468,557）

(4)　器台（41図）

器台は出土が少なく、それぞれが一形式をなす。

(5)　鉢（42図）

鉢は注ぎ口をもつもの（474）や高杯の杯部に類似したもの（485,488）、脚台を持つもの（489）など多種多様であり、形態でくくることが難しいのでここでは分類しない。

(6)　小型器種（43図）

小型器種でも手捏土器や甕形、壺形、鉢形、いわゆる小型丸底壺など多様なものがみられ、形態ごとにくくることは難しいため、ここでは分類しない。

第16表　弥生～古墳時代土器観察表(1)

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内器面	文様および調整 外器面	色調 内器面	色調 外器面	焼成	胎土	備考
28	121	壺 (L16G)	Ⅲ,EP-26	ナデ	ナデ・刻目突帯	浅黄橙	橙	良好	1mm程の砂粒を含む	
28	122	壺 (口縁～胴部)	Ⅳ,東ミツ下	ナデ・指押さえ	ナデ・刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	スス付着
28	123	壺 (口縁～胴部)	Ⅲ-1220	不明	ナデ・ハケ目・刻目突帯	明赤褐	にぶい赤褐	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
28	124	壺 (口縁～胴部)	Ⅳ	ナデ・指押さえ	ナデ・突帯	浅黄橙	浅黄橙	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	
28	125	壺 (口縁～胴部)	Ⅳ,Ⅲ	ナデ	ナデ・口唇部刻目・突帯	にぶい橙	にぶい橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
28	126	壺 (口縁～胴部)	Ⅴ,Ⅰ-1106	ナデ	ナデ・口唇部刻目 刻目突帯	橙	橙	＋	9mmの粒、3.5mm以下の砂粒を含む	
28	127	壺 (口縁～胴部)	Ⅴ,Ⅰ-1106	ナデ	ナデ・ハケ目・刻目突帯	橙	褐 にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
28	128	壺 (口縁～胴部)	Ⅲ-629	ナデ・工具によるナデ	ナデ・ハケ目・刻目突帯	明赤褐	にぶい赤褐	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	
28	129	壺 (口縁～胴部)	Ⅳ	ナデ	ナデ・2条刻目突帯	にぶい橙	浅橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
28	130	壺 (口縁～胴部)	Ⅳ	ハケ目	ナデ・2条刻目突帯	浅黄橙 明褐灰	浅黄橙 明褐灰	＋	0.5mm以下の砂粒を含む	
28	131	壺 (口縁～胴部)	Ⅲ-492	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目 2条刻目突帯	橙	橙 黄橙	＋	5mm以下の砂粒を少し含む	(Pt)黒斑 スス付着
28	132	壺 (口縁～胴部)	Ⅳ	ナデ	ナデ・口唇部刻目 2条刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	
28	133	壺 (口縁～胴部)	Ⅲ-343	ナデ	ナデ・2条刻目突帯	浅黄橙	浅橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
28	134	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ,Ⅰ-150	ナデ	2条突帯	黄橙	黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
28	135	壺 (口縁～胴部)	Ⅲ-484	ナデ	ナデ・2条刻目突帯	浅黄橙	浅黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	
28	136	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ,ⅠDD	ナデ	ナデ・ハケ目	橙	明褐 黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
28	137	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ,ⅠDD-17	ハケ目	ハケ目 4条の梅鉢平行文	浅黄橙	浅黄橙 にぶい橙	＋	0.5～3mmの砂粒を含む	
28	138	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	橙 にぶい橙	黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
28	139	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	0.5～2mmの粒を含む	
28	140	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅰ-575	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙 淡赤橙	＋	0.5～2mmの砂粒を多く含む	
28	141	壺 (口縁～頸部)	－	ナデ	ナデ	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 にぶい橙	＋	0.5～5mmの砂粒を多く含む	スス付着
28	142	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-685	ナデ・ハケ目・指押さえ	ナデ・ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
28	143	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ,ⅠDD-24	ナデ	ナデ・指押さえ	にぶい褐 にぶい橙	にぶい橙 にぶい褐	＋	3mm以下の砂粒を含む	
28	144	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	褐灰	灰 橙	＋	1.5mm以下の砂粒を多く含む	
28	145	壺 (口縁)	Ⅲ-954	ナデ	ナデ	浅黄橙 灰白	浅黄橙 褐灰	＋	1mm以下の砂粒を含む	スス付着
28	146	壺 (L16G～頸部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ・突帯	灰白	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
28	147	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ	突帯・指押さえ	にぶい黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	
28	148	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ・工具によるナデ	ナデ	にぶい橙 淡橙	淡橙	＋	1mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
28	149	壺 (L16G～頸部)	Ⅳ	ナデ・指押さえ	ナデ	橙	にぶい橙 にぶい褐	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
28	150	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ,SK-D	ナデ・工具によるナデ	ナデ・ハケ目	橙	橙 灰褐	＋	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
28	151	壺 (口縁)	Ⅴ,表採	ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
28	152	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ,表採	工具によるナデ・ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
28	153	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-1235	ナデ・ハケ目	ナデ・突帯	明褐灰 浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
28	154	壺 (L16G～頸部)	Ⅱ-Bトレ外	ナデ・ハケ目	ナデ・突帯	灰白 にぶい橙	灰白 浅黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	
28	155	壺 (口縁)	Ⅳ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	0.5～3mmの砂粒を多く含む	
28	156	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	工具によるナデ	ナデ・工具によるナデ	灰黄	浅黄橙 灰黄褐	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	
28	157	壺 (L16G～頸部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ・ハケ目・突帯	浅黄橙 黄橙	黄橙 浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	スス付着

第17表　弥生～古墳時代土器観察表(2)

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内器面	文様および調整 外器面	色調 内器面	色調 外器面	焼成	胎土	備考
28	158	壺 (口縁～頸部)	V	ナデ	ナデ・突帯	にぶい橙	橙	良好	2mm以下の砂粒を含む	
29	159	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-909,911 912,922 中ミゾ下	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目・刻目突帯	橙	橙 黒褐	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	胎土に5%以下スス付着
29	160	壺 (口縁～底部)	Ⅲ-423,423	ハケ目	刻目突帯・ナデ・ハケ目	橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	炭化物スス付着
29	161	壺 (L縁～頸部)	Ⅲ-998	ナデ・ハケ目	ナデ・指ナデ・刻目突帯	浅黄橙	黒褐 浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	胎土に5%以下スス付着
29	162	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-925	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目・刻目突帯	橙	にぶい橙	＋	1～2.5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
29	163	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ-SE W	ナデ	ナデ・刻目突帯	淡橙	にぶい黄橙	＋	1～2mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
29	164	壺 (L縁～頸部)	Ⅱ,東拡下	ナデ?・ハケ目	ナデ・刻目突帯	にぶい黄 浅黄橙	にぶい橙	＋	1～3mm以下の砂粒を少し含む	
29	165	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ・刻目突帯	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
29	166	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-1170	ナデ・ハケ目	ナデ・刻目突帯	浅黄橙 橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含み、1.5mm以下の砂粒を含む	刻目に海綿状圧痕
29	167	壺 (口縁～底部)	Ⅴ-Ⅱ	ナデ・指おさえ	ハケ目・ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を少し含む	スス付着
29	168	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-150	ナデ?	ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
29	169	壺 (L縁～頸部)	Ⅳ-SE W	ナデ	刻目突帯・ナデ・ハケ目	にぶい黄橙 浅黄橙	にぶい橙 にぶい褐	＋	2～0.5mmの砂粒を含む	
29	170	壺 (口縁～頸部)	Ⅱ-397	ナデ	ナデ・ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	＋	1.5～3mm以下の砂粒を含む	指紋及び部縞状スス付着
29	171	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-345	ナデ	ナデ	にぶい橙 浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
29	172	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-E	ナデ	ナデ	浅黄橙 灰	浅黄橙 灰	＋	2mm以下の砂粒を含む	
29	173	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-919	ナデ	ナデ・指おさえ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を多く含む	
29	174	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	浅黄橙	にぶい橙	＋	0.5～3.5mm以下の砂粒を含む	炭化物付着スス付着
29	175	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-E 東中ミゾ下	ナデ・ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	スス付着
29	176	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-1236	ナデ	ナデ・ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	1～2mm以下の砂粒を含む	スス付着
30	177	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	橙	灰黄褐 黄褐	＋	3～5mm以下の砂粒を多く含む	
30	178	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ	褐灰 浅黄橙	黒褐 浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
30	179	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	スス付着
30	180	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	スス付着
30	181	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ナデ・ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	
30	182	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	指おさえ・ナデ	ナデ	橙	黄橙 明褐灰	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	
30	183	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙 橙	＋	3.5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
30	184	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-450	ナデ	ナデ	橙	橙 褐灰	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
30	185	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	スス付着
30	186	壺 (L縁～頸部)	Ⅴ,Ⅱ Ⅲ-118	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	にぶい橙 橙	褐灰 赤褐	＋	5mm以下の砂粒を含む	スス付着
30	187	壺 (口縁～頸部)	Ⅱ-55	不明	ナデ・タタキ	橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
30	188	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ	ナデ・ハケ目	ナデ	橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	
30	189	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ Ⅱ,Ⅱ層 Ⅱ,ESE	ナデ	タタキ	浅黄橙 橙	にぶい橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
31	190	壺 (口縁～底部)	Ⅲ	ハケ目・ナデ	タタキ・ハケ目	橙	橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	黒変 スス付着
31	191	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ 1125 1129 1136	不明	ハケ目・ナデ	橙	黄橙	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
31	192	壺 (口縁～底部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ハケ目	ナデ	橙	橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	黒変
31	193	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	浅黄橙	橙 浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	黒変 スス付着
31	194	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ	褐灰	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	スス付着

第18表　弥生～古墳時代土器観察表(3)

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整		色調		焼成	胎土	備考
				内器面	外器面	内器面	外器面			
31	195	壺 (L線～調部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄	良好	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
31	196	壺 (旗部～炭部)	Ⅲ-1098	ハケ目	ナデ	褐灰 にぶい黄橙	橙 にぶい橙 褐灰	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
31	197	壺 (L線～調部)	Ⅱ 1112 1127	ハケ目	ナデ・ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
32	198	壺 (L線～底部)	Ⅲ 1095	ナデ・ハケ目・指押さえ	ハケ目・平行タタキ ナデ	にぶい橙	黄橙 橙・灰褐	＋	1～4mmの砂粒を多く含む	スス付着
32	199	壺 (口縁～底部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
32	200	壺 (L線～底部)	Ⅲ-1139	ハケ目・指おさえ	タタキ	橙	橙	＋	6mm以下の砂粒を含む	黒斑
32	201	壺 (完形)	Ⅱ Bトレ	ナデ・ハケ目	不明	橙 灰白	黄橙 灰白	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
32	202	壺 (口縁～調部)	Ⅳ	ナデ・指ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	スス付着
32	203	壺 (口縁～調部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ハケ目・ミガキ	灰白	浅黄橙 灰褐	＋	1mm以下の砂粒を含む	203と204は同一個体
32	204	壺 (L線～底部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ハケ目・ミガキ	灰白	浅黄橙 淡橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
32	205	壺 (L線～調部)	Ⅴ,Ⅲ	不明	ナデ	灰黄褐	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
32	206	壺 (L線～調部)	Ⅲ	ナデ	ハケ目	褐色 赤褐	褐色 赤褐	悪い	1mm以下の砂粒を含む	スス付着
33	207	壺 (L線～調部)	Ⅲ WSE3 Ⅲ-1151	ハケ目・ケズリ	ナデ・ハケ目	暗赤褐	明赤褐	良好	5mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
33	208	壺 (調部～底部)	Ⅳ SH	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	黄橙 橙・灰	浅黄橙 褐灰・橙	＋	1.5mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
33	209	壺 (調部～底部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ・工具によるナデ	ナデ・ハケ目	黒褐 にぶい橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
33	210	壺 (底部)	Ⅱ Ⅲ層	ヘラ状工具	不明	褐灰	黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
33	211	壺 (底部)	Ⅲ-283	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む 粒子も多く含む	黒色物付着
33	212	壺 (底部)	Ⅴ,I SG	ナデ	ナデ・指おさえ	黒	橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
33	213	壺 (底部)	Ⅴ,I	調整	ナデ		浅黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を多く含む	
33	214	壺 (底部)	Ⅳ	不明	ナデ	褐灰	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
33	215	壺 (調部～底部)	Ⅳ	ナデ・工具によるナデ	ナデ・工具によるナデ	にぶい橙	橙 にぶい橙	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	
33	216	壺 (調部～底部)	Ⅴ,Ⅲ	ハケ目	タタキ	褐灰 にぶい橙	浅黄橙 灰白	＋	4mm以下の砂粒を含む	
33	217	壺 (調部～底部)	Ⅴ,I-114	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄橙	＋	4～5mmの小礫と1～3mmの砂粒を多く含む	
33	218	壺 (調部～底部)	Ⅴ,Ⅲ,Ⅱ層	ハケ目	ナデ・指おさえ	浅黄橙	にぶい橙 橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	黒斑
33	219	壺 (調部～底部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ナデ・指おさえ	褐灰	橙	＋	7mm以下の砂粒を含む	黒斑
33	220	壺 (調部～底部)	Ⅳ	ナデ・ハケ目	ナデ	にぶい橙	浅橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	
33	221	壺 (調部～底部)	Ⅳ,WSH	ナデ	ナデ・工具によるナデ	浅黄橙	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
33	222	壺 (調部～底部)	Ⅴ,I-1130	ハケ目	ハケ目・指押さえ	浅黄橙 褐灰	浅黄橙	＋	1～3mmの砂粒と4mm程の小礫を含む	
33	223	壺 (調部～底部)	Ⅴ,I-1972	ナデ	ナデ	褐灰 灰白	浅黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	
33	224	壺 (底部)	Ⅲ-1160	ナデ	指ナデ	灰褐	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
33	225	壺 (底部)	Ⅴ,I	ナデ	ナデ	灰白 黄灰	浅黄橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	炭化物付着
33	226	壺 (調部～底部)	Ⅲ-472	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	褐灰 灰黄	浅黄橙	＋	0.5～2mmの砂粒を多く含む	
33	227	壺 (調部～底部)	Ⅴ,I-1762	ハケ目	ハケ目	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
33	228	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅱ Ⅱ層-1	ナデ	ナデ・ハケ目	橙	橙	＋	3～5mmの砂粒を含む 2mm以下の砂粒を多く含む	黒色物付着
33	229	壺 (調部～底部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	＋	2mm以下の粒を含む	
33	230	ミニチュア 壺(底部)	I	ナデ	ナデ	浅黄橙	黄橙	＋	1～2.5mm以下の砂粒を含む	
33	231	壺 (調部～底部)	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	

第19表　弥生～古墳時代土器観察表(4)

図版番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内器面	文様および調整 外器面	色調 内器面	色調 外器面	焼成	胎土	備考
33	232	壺(胴部～底部)	Ⅲ	ナデ	ナデ・指おさえ	黒	にぶい橙	良好	4mm以下の砂粒を含む	黒斑
33	233	壺(胴部～底部)	Ⅴ,Ⅱ Ⅱ層	ナデ・ハケ目	ナデ・指押さえ	橙	橙 にぶい橙 明褐灰	＋	7mm以下の粒、1.5mm以下の砂粒を含む	スス付着
33	234	壺(胴部～底部)	Ⅴ,Ⅱ 表層-93	不明	ナデ・ハケ目	黄橙	にぶい橙 浅黄橙	＋	1～4mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
33	235	壺(底部)	Ⅴ,Ⅱ SH1	ナデ	ナデ・工具	にぶい橙	にぶい橙 褐灰	＋	2mm程度の砂粒を多く含む。1.5mm程度の粒を含む	
33	236	壺(胴部～底部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	褐灰	橙	＋	0.5～1mmの砂粒を多く含む	
34	237	壺(胴部～底部)	Ⅱ-302	ナデ	工具のナデ・ナデ	黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
34	238	壺(胴部～底部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	
34	239	壺(胴部～底部)	Ⅲ-1218	工具のナデ	工具のナデ・指頭痕	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む 4mm以下の小礫を少し含む	
34	240	壺(胴部～底部)	Ⅲ	板状工具のナデ	タタキ	橙 黄灰	橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	
34	241	壺(胴部～底部)	Ⅴ,表採	ナデ	ナデ・指おさえ	灰白	黄橙 浅黄橙	＋	4mm以下の粒を含む 微細粒を少し含む	
34	242	壺(胴部～底部)	Ⅴ SC	ナデ	ハケ目・ナデ	褐灰	橙 灰白	＋	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
34	243	壺(胴部～底部)	Ⅴ,Ⅲ	ハケ目・ナデ	ナデ・指おさえ	浅黄橙 橙	褐灰・橙 浅黄橙	＋	3mm以下の粒を含む 微細粒を少し含む	
34	244	壺(胴部～底部)	Ⅴ,Ⅲ	棒状工具ナデ	タタキ	にぶい橙	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
34	245	壺(胴部～底部)	Ⅴ	ハケ目・ナデ・指おさえ	ハケ目・ナデ	にぶい橙	にぶい橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	
34	246	壺(胴部～底部)	Ⅲ-921	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の粒を含む	黒変
34	247	壺(底部)	Ⅴ,Ⅰ	不明	不明	橙	黄橙	＋	2～3mm以下の砂粒を多く含む	
34	248	壺(底部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
34	249	壺(口縁～胴部)	Ⅴ,Ⅲ	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を少し含む	黒変
34	250	壺(口縁～胴部)	Ⅴ,Ⅱ-304	ハケ目・ナデ	ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
34	251	壺(口縁～胴部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ナデ・指おさえ	工具のナデ・指おさえ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	黒斑
34	252	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	櫛描波状文・ナデ	橙	橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
34	253	壺(口縁)	Ⅲ,EP-15	ナデ・ミガキ	ミガキ	橙	橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
34	254	壺(口縁～底部)	Ⅱ,東拡下	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
34	255	壺(口縁～胴部)	Ⅴ,Ⅱ-315	ナデ・ハケ目	ナデ	橙	橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	スス付着
34	256	壺(口縁～胴部)	Ⅲ,E	ナデ	沈線・ナデ・ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
34	257	壺(口縁～頸部)	Ⅲ,Eミゾ下	ナデ	沈線・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
34	258	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅲ	ハケ目	ナデ・ハケ目	橙	橙	＋	微細砂粒を含む	
34	259	壺(口縁)	Ⅰ	ナデ	櫛描波状文・ナデ	橙	橙・明褐灰	＋	きめ細い	
34	260	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	櫛描波状文・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を多く含む	
34	261	壺(底部)	Ⅲ-1110	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	5.5mm以下の粒を含む 3mm以下の砂粒を含む	
34	262	壺(胴部～底部)	Ⅴ,Ⅱ	不明	不明・(脚)ナデ	赤灰	橙	＋	4mm以下の粒を含む	
34	263	壺(胴部～底部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ・指おさえ	指ナデ	にぶい橙	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
34	264	壺(口縁)	Ⅴ,表採	ナデ	櫛描波状文・ミガキ	黄橙	黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	
34	265	壺(口縁～胴部)	Ⅱ,東拡下	ナデ・ハケ目	ナデ・工具のナデ	橙	橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	スス付着
35	266	壺(口縁)	Ⅳ	ナデ	ナデ	にぶい橙 灰褐	にぶい橙	＋	0.5mm以下の砂粒を含む	口縁部に円形浮文
35	267	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ・指押さえ	橙	にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	口縁部に円形浮文
35	268	壺(L縁)	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	＋	6mm以下の砂粒を含む	L縁部に円形浮文

第20表　弥生～古墳時代土器観察表(5)

図版番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内器面	文様および調整 外器面	色調 内器面	色調 外器面	焼成	胎土	備考
35	269	壺(口縁)	Ⅱ,Aトレ-78	ナデ	ナデ	淡橙	浅黄橙	良好	2mm以下の砂粒を多く含む	口縁部に円形浮文 黒斑
35	270	壺(口縁)	Ⅲ,WSE3,幅	ナデ	竹管列点文(口唇部) ナデ・ハケ目	明赤褐	にぶい赤褐	＋	2～3mm の砂粒を少しと1mm以下の砂粒を多く含む	口縁部に円形浮文 焼黒
35	271	壺(口縁)	Ⅴ,I-730	ナデ	ナデ	浅黄橙 橙・黄灰	橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	口縁部に円形浮文
35	272	壺(口縁)	Ⅴ,表採	ナデ	ナデ	橙 灰白	橙 灰白	＋	1mm以下の砂粒を含む	口縁部に円形浮文
35	273	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
35	274	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰白	＋	2mm以下の砂粒を含む	黒斑
35	275	壺(L縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	円形浮文の剥離痕
35	276	壺(口縁)	Ⅲ,W落C	ナデ	ナデ・刻み(L唇部)	にぶい橙	にぶい橙	＋	1mm以下の粒を含む	口縁部に円形浮文
35	277	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	
35	278	壺(口縁)	Ⅲ,1160	ナデ	ナデ	橙 淡橙	浅黄橙	＋	2.5mm以下の砂粒と高郎小礫を含む	口縁部に円形浮文
35	279	壺(口縁)	Ⅲ,352	ナデ	ナデ	灰黄褐 橙	淡橙	＋	5mm大の粒と1mm以下の砂粒を少し含む	
35	280	壺(口縁)	Ⅲ	ナデ	ナデ・ハケ目	明黄褐 灰褐	浅黄橙 にぶい橙 褐灰	＋	3mm以下の砂粒を含む	
35	281	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	沈線(口唇部) ナデ	黄橙	黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	
35	282	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	にぶい橙	褐灰 にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	
35	283	壺(L縁)	Ⅲ-294	ナデ	刻み(L切部) ナデ	浅黄色	浅黄色	＋	1mm以下の砂粒を含む	
35	284	壺(L縁)	Ⅳ	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
35	285	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	橙	橙 暗赤灰	＋	3mm以下の粒を含む	口縁部に円形浮文
35	286	壺(口縁)	Ⅱ,東拡下	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
35	287	壺(口縁)	Ⅲ-1141	ナデ	刻み(L唇部) ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	微細粒を含む	
35	288	壺(口縁)	Ⅲ-256	ナデ	不明	黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
35	289	壺(口縁)	Ⅲ-558	ナデ・ハケ目	刻み(L唇部) ナデ・ハケ目	にぶい赤褐	明赤褐	＋	3mm以下の砂粒を少し含む	口縁部に円形浮文
35	290	壺(L縁)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ	橙	橙 にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
35	291	壺(L縁)	Ⅱ Aトレ-175	ナデ	羊歯状貝文(L唇部) ハケ目・ナデ	橙	橙	＋	7mm大の粒、1mm以下の砂粒を少し含む	
36	292	壺(L縁)	Ⅴ,Ⅰ-714	ハケ目	ナデ	浅黄橙	淡橙 浅黄橙	＋	0.5～2.5mmの砂粒を多く含む	
36	293	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ナデ・沈線	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
36	294	壺(L縁)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ナデ	褐灰	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含み、2mm以下の砂粒は少ない	
36	295	壺(口縁)	Ⅳ	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
36	296	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	黄橙	橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含み、1mm以下の砂粒をごくわず少含む	
36	297	壺(L縁)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ナデ	刻み(L唇部) ナデ・ハケ目	灰白	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
36	298	壺(口縁一頸部)	Ⅰ-16	ハケ目	ナデ・ハケ目	浅黄橙 明黄褐	浅黄橙 黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	
36	299	壺(口縁)	Ⅱ SK,A ＋W落	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
36	300	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	
36	301	壺(口縁)	Ⅲ-252	ナデ	ナデ	浅黄橙 褐灰	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含み、1mm以下の粒を含む	
36	302	壺(L縁)	Ⅱ	沈線・ナデ	工具のナデ・ナデ	黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	
36	303	壺(口縁)	Ⅱ,Aトレ-1	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	2mmの砂粒を含む	
36	304	壺(口縁)	Ⅱ-面	ナデ・工具のナデ	指押さえ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	＋	5mm・3mm以下の砂粒を多く含む	
36	305	壺(L縁)	Ⅴ	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	

第21表　弥生～古墳時代土器観察表(6)

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内器面	文様および調整 外器面	色調 内器面	色調 外器面	焼成	胎土	備考
36	306	壺 (L層)	Ⅱ-229	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	良好	1mm以下の砂粒を含む	
36	307	壺 (完形)	Ⅳ	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	浅黄橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	黒斑
36	308	壺 (口縁～胴部)	Ⅱ-ﾋﾟﾄ下 Ⅱ-東拡下	ナデ・指押さえ	ナデ・ハケ目	にぶい橙 橙	橙	＋	2.5-2.1mmの砂粒を含む	
36	309	壺 (L層～胴部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	2.5mm以下の砂粒を多く含む	
36	310	壺 (口縁～胴部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ・指押さえ	ナデ・ハケ目	にぶい橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
36	311	壺 (口縁～胴部)	Ⅳ	ナデ・ハケ目・指押さえ	ナデ・ハケ目	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 橙	＋	2-0.5mmの砂粒を多く含む	黒斑
36	312	壺 (完形)	Ⅱ,1133	ナデ・指頭ナデ 指押さえ	ハケ目	にぶい赤褐	明赤褐	＋	1-1.5mmの砂粒を多く含む	黒斑
36	313	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ,1225	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	2-1mm以下の砂粒を含む	
36	314	壺 (口縁～胴部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ・ミガキ	浅黄橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
36	315	壺 (L層)	Ⅱ,E中ミツ	ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む	黒斑
36	316	壺 (L層～胴部)	Ⅱ,S22-3	ナデ	ナデ・工具によるナデ	にぶい橙	にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	
36	317	壺 (L層～胴部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ハケ目	ナデ・ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	＋	4-2-1mmの砂粒を含む	スス付着
36	318	壺 (L層～胴部)	Ⅳ	ナデ ヘラ状工具によるナデ	ナデ ヘラ状工具によるミガキ	にぶい橙	橙	＋	点部小量、粗良	
36	319	壺 (口縁～胴部)	Ⅰ,Ⅱ	ナデ・指押さえ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	
37	320	壺 (口縁)	Ⅲ-123	ナデ	沈線・ナデ	明褐灰	灰褐	＋	2mm以下の砂粒を含む	
37	321	壺 (口縁)	Ⅲ	ナデ	5本の凹線文・ナデ	にぶい橙	淡赤橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
37	322	壺 (口縁)	Ⅳ	ヘラ磨き	3本以上の凹線文 ヘラ磨き	にぶい黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
37	323	壺 (口縁)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ナデ	4本以上の凹線文・ナデ	橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
37	324	壺 (L縁)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	2本の凹線文・ナデ	浅黄橙	にぶい橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	
37	325	壺 (口縁)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	キザミ突帯・ナデ	黄橙	浅黄橙	＋	0.5mm以下の砂粒を含む	
37	326	壺 (口縁)	Ⅱ-336	ナデ・ハケ目	貼付突帯・ナデ	灰褐	にぶい橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	(内)黒斑
37	327	壺 (L縁)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	キザミ突帯・ナデ	淡橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
37	328	壺 (L縁～胴部)	Ⅳ-柄	ハケ目	櫛描き波状文・ハケ目	浅黄色	浅黄色	＋	2mm以下の砂粒を含む	
37	329	壺 (L縁～頸部)	Ⅱ	ナデ	櫛描き波状文・ハケ目	橙	橙 黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
37	330	壺 (L縁～頸部)	Ⅱ	ナデ	櫛描き波状文・ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む 1mm以下の砂粒を多く含む	
37	331	壺 (L縁～頸部)	Ⅱ-240	ハケ目・ナデ	ハケ目	橙	淡橙	＋	3mm以下の砂粒を少し含む	黒斑
37	332	壺 (口縁～頸部)	Ⅱ-463 461	ナデ・ハケ目	櫛描き波状文 ハケ目・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む	
37	333	壺 (口縁～頸部)	Ⅲ-1147	ナデ	ナデ	黄橙	橙	＋	1mm以下の砂粒を多く含む	
37	334	壺 (口縁～頸部)	Ⅱ-468 453	ミガキ・ナデ	ハケ目・ミガキ	にぶい橙	橙	＋	0.5mm以下の砂粒を少し含む	
37	335	壺 (L縁～頸部)	Ⅱ-450	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	浅黄橙	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を少し含む	
37	336	壺 (L縁)	Ⅱ-310	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	
37	337	壺 (L縁～頸部)	Ⅱ,東拡 下-T	ナデ	若管文・ナデ・ハケ目	浅黄橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
37	338	壺 (L縁～頸部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	櫛描き波状文 ナデ・ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	＋	5mm以下の砂粒を少し含む	
37	339	壺 (口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む	(内)黒斑
37	340	壺 (口縁～頸部)	Ⅳ	ナデ	不明	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む 1mm以下の砂粒を少し含む	
37	341	壺 (口縁)	Ⅴ,Ⅰ-227	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
37	342	壺 (完形)	Ⅴ,Ⅱ	ハケ目・ナデ	櫛描き波状文	橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む 雲母小量	(内)炭化物

第22表　弥生～古墳時代土器観察表(7)

図版番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整		色調		焼成	胎土	備考
				内器面	外器面	内器面	外器面			
37	343	壺(口縁)	Ⅳ	ナデ	ナデ・ハケ目	橙	淡橙	良好	2mm以下の砂粒を含む	
37	344	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	(外)黑斑
37	345	壺(口縁)	Ⅰ,E セクションⅠ	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む	
37	346	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	褐灰	褐灰	＋	1mm以下の砂粒を含む	
37	347	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	縄蓆文	浅黄橙	浅黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を少し含む	
37	348	壺(口縁～頸部)	Ⅳ,SH	ナデ・ハケ目・指押さえ	ナデ	灰白	灰白	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	
37	349	壺	Ⅲ	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	橙	橙	＋	1.5mm以下の砂粒を少し含む	
37	350	壺(口縁～頸部)	Ⅲ-264	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	浅黄橙	黄橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む	
37	351	壺(口縁)	Ⅳ	ナデ	縄蓆文・ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	＋	精良	(内)黑斑
37	352	壺(口縁)	Ⅲ	ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
37	353	壺(口縁)	Ⅲ	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	にぶい橙	にぶい橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
37	354	壺(口縁～頸部)	Ⅴ,Ⅱ Ⅱ層-148	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
37	355	壺(口縁)	Ⅲ-241	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を少し含む	
37	356	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	櫛描き波状文・ミガキ	浅黄橙	暗色	＋	0.5mm以下の砂粒を少し含む	(内)炭化物
37	357	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ナデ	櫛描き波状文・ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を少し含む	
37	358	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
37	359	壺(口縁)	Ⅴ,Ⅲ,SSK	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
37	360	壺(口縁～頸部)	Ⅱ-Cトレ	指ナデ・ハケ目	ナデ	浅黄橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
38	361	壺(頸部)	Ⅳ	ナデ	ナデ・3条の突帯	黑	にぶい黄橙	＋	1～3mm以下の砂粒を少し含む	炭化物付着 ス入付着
38	362	壺(口縁)	Ⅲ W面A	不明	不明・キザミ	橙	橙	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	
38	363	壺(頸部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ナデ	ナデ・ミガキ・突帯	にぶい黄橙	明赤褐 にぶい黄橙	＋	3mm程の粒を含む 1mm以下の微粒を含む	施朱
38	364	壺(頸部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ハケ目	ナデ・突帯	明赤褐	明赤褐	＋	1mm以下の砂粒及び微粒を含む	施朱
38	365	壺(頸部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ・突帯	浅黄橙	浅黄橙	＋	0.5～2.5mmの砂粒を多く含む	
38	366	壺(頸部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ・ミガキ・突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	3mm程の粒を含む 1mm以下の砂粒を含む	
38	367	壺(頸部)	Ⅲ-412	ナデ	ナデ・2条の突帯	にぶい橙 浅黄橙	淡赤橙 淡橙	＋	0.5～2mmの粒を含む 0.5mm以下の粒を微量に含む	
38	368	壺(頸部)	Ⅲ,E第ミツ	ナデ	ナデ・突帯	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
38	369	壺(頸部)	Ⅲ-526	ナデ	ナデ・2条の突帯	にぶい橙	にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を含む 4mm程の小礫を含む	
38	370	壺(頸部)	Ⅴ,Ⅰ-1128	ハケ目・ナデ	ナデ・5条の突帯	にぶい黄橙 灰褐	浅黄橙	＋	微細～2mmの砂粒を多く含む	
38	371	壺(頸部)	Ⅳ	ハケ目	ナデ・ハケ目 突帯・凹線	褐灰	にぶい橙	＋	0.5～2mmの砂粒を含む	
38	372	壺(頸部)	Ⅴ Ⅱ,Ⅱ層-107	ナデ・指おさえ	ナデ・3条の突帯	浅黄橙	浅黄橙	＋	0.5～2mmの砂粒を多く含む	
38	373	壺(頸部)	Ⅲ-966	ナデ	ハケ目・ナデ・刻目突帯	淡橙	淡橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
38	374	壺(頸部)	Ⅴ,Ⅰ-580	ナデ	ナデ・3条の突帯	明褐灰 灰褐	浅黄橙 橙	＋	0.5～2mmの粒を含む 0.5～1mmの粒を含む	
38	375	壺(頸部)	Ⅳ	ナデ・指おさえ	ナデ・3条の突帯	黑	灰白 にぶい黄橙	＋	0.5～3mmの砂粒を含む 0.4mmの粒を少し含む	炭化物付着
38	376	壺(頸部)	Ⅱ	ナデ	ナデ・5条の突帯	にぶい橙	にぶい橙	＋	0.5～2mmの粒を含む 2mm以下の砂粒を含む	
38	377	壺(頸部)	Ⅲ-132	ナデ	9条の沈線	灰褐	にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
38	378	壺(頸部)	Ⅰ	ナデ	ナデ・凹線	浅黄橙	橙	＋	微細～1mmの砂粒を含む	
38	379	壺(頸部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ・凹線	淡黄 黄灰	浅黄橙	＋	0.5～1mmの砂粒を多く含む	

第23表　弥生～古墳時代土器観察表(8)

図版番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内器面	文様および調整 外器面	色調 内器面	色調 外器面	焼成	胎土	備考
38	380	壺 (脚部)	Ⅲ-390	ナデ	11条の沈線	黄橙	明黄褐 黄褐	良好	3mm以下の砂粒を含む	
38	381	壺 (脚部～底部)	Ⅴ,Ⅱ,SSE Ⅴ Ⅴ,Ⅲ	指頭のナデ・ハケ目	ハケ目・3本の線刻	浅黄橙	橙	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	黒斑
38	382	壺 (頸部～胴部)	Ⅰ	ナデ・指おさえ	ヘラミガキ・ナデ	黄橙 褐灰	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	黒斑
38	383	壺 (胴部～底部)	Ⅲ-1099	ナデ・ハケ目・指おさえ	ナデ	淡橙	浅橙 橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	スス付着 黒斑
38	384	壺 (頸部～底部)	表ﾄﾚﾝﾁ,ﾄﾚｾﾞﾒﾝﾄ ⅠⅡ&Ⅴ 459,470,454	指おさえ・指ナデ	ナデ・ハケ目	橙	にぶい橙 橙	＋	2.5mm以下の砂粒を少し含む	黒斑
38	385	壺 (頸部～底部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅲ層	工具のナデ・指ナデ	工具のナデ ヘラ工具のナデ 指おさえ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
39	386	壺 (胴部～底部)	Ⅲ	ハケ目・指押さえ	ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む 3mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
39	387	壺 (胴部～底部)	Ⅴ,Ⅲ	ハケ目・指押さえ	ナデ	にぶい橙	黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	
39	388	壺 (胴部～底部)	Ⅳ	ハケ目の後ナデ	ハケ目・ヘラミガキ	にぶい黄橙	浅黄橙 灰褐	＋	3mm以下の砂粒を少し含む	黒斑
39	389	壺 (胴部～底部)	Ⅲ-401	ナデ・ハケ目・指押さえ	ハケ目の後ナデ	橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	
39	390	壺 (胴部～底部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ・ハケ目・指押さえ	ハケ目の後ナデ	浅黄橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	黒斑
39	391	壺 (底部)	Ⅴ,表採	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
39	392	壺 (底部)	Ⅴ,321,322	ナデ	ハケ目	黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
39	393	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ナデ	黒褐	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
39	394	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ミガキ	褐灰	浅黄橙 橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
39	395	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅲ層	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
39	396	壺 (底部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	褐灰	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
39	397	壺 (底部)	Ⅳ	丁寧なナデ・指押さえ	丁寧なナデ	褐灰	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	
39	398	壺 (底部)	Ⅲ	板状工具によるナデ	ナデ	灰 にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	3.5mm以下の砂粒を含む 1mm以下の砂粒を含む	黒斑
39	399	壺 (底部)	Ⅳ	ナデ・指押さえ	ナデ	浅黄橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
39	400	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙 橙	＋	0.5mmの砂粒、4mm以下の砂粒を含む	スス？
39	401	壺 (底部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	
39	402	壺 (底部)	Ⅱ,Bトレ-12	ヘラ状工具によるナデ	ヘラミガキ	褐灰	浅黄橙 褐灰	＋	3mm以下の砂粒が多い 1mm以下の砂粒が少ない	
39	403	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅰ-415外	ナデ	ナデ・工具によるナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
40	404	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅰ-5423	ナデ	ナデ・指ナデ	浅黄橙 淡橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
40	405	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅰ-2216	ナデ	ナデ	灰褐 灰白	浅黄橙 橙	＋	4.5mm以下の砂粒を含む	
40	406	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ハケ目・ナデ	にぶい黄橙	橙 にぶい橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
40	407	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ・ハケ目	ヘラ磨き・磨き	灰褐	黒褐 明黄褐	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
40	408	壺 (底部)	Ⅳ	ハケ目	ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	ヘラ記号
40	409	壺 (底部)	Ⅲ-601	ナデ・工具によるナデ ハケ目・指押さえ	ナデ・ハケ目・縦刻	黄黄 灰オリーブ	浅黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を少し含む	黒斑
40	410	壺 (底部)	Ⅲ-667	ナデ	ハケ目	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
40	411	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅱ,東層	ハケ目	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	
40	412	壺 (底部)	Ⅲ-1208外	ハケ目	ナデ	灰	黄 黒褐	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
40	413	壺 (底部)	Ⅲ-859	ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
40	414	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅲ	指ナデ	ナデ	橙	にぶい橙 黒褐	＋	5mm以下の砂粒を含む	
40	415	壺 (底部)	Ⅴ,Ⅱ	磨き	ナデ	橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
40	416	壺 (底部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	スス付着

第24表　弥生～古墳時代土器観察表(9)

区画番号	遺物番号	器種	州十地区	文様および調整 内器面	文様および調整 外器面	色調 内器面	色調 外器面	焼成	胎土	備考
40	417	壺(底部)	Ⅳ	磨き	ヘラ磨き	にぶい橙	橙 黒褐	良好	2mm以下の砂粒を含む	黒斑
40	418	壺(底部)	Ⅴ,Ⅱ,P,SE	ナデ	ナデ・指押さえ	褐灰	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	黒斑
40	419	壺(底部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	橙 にぶい橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
40	420	壺(底部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙 にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
40	421	壺(胴部)	Ⅲ,Ⅳ	ナデ・指押さえ	櫛描き波状文 沈線・ナデ	橙	橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
40	422	壺(胴部)	Ⅲ	ナデ	ナデ 櫛描き波状文	灰黄褐	にぶい黄橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	
40	423	壺(胴部)	Ⅱ,EやミリT	ナデ・指ナデ・ハケ目	櫛条・刺状工具による透彫刺突文・櫛描き波状文・ハケ目→ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	0.5mm以下の砂粒を少し含む	
40	424	壺(胴部)	Ⅲ-202	ナデ	ナデ・指押さえ 櫛描文	灰	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
40	425	壺(胴部)	Ⅱ,W落	ナデ	櫛描波状文・沈線	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	丹塗り
40	426	壺(胴部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ハケ目・綾刻	灰	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を少し含む	
40	427	壺(胴部)	Ⅲ,WSE3下	ナデ	ハケ目・櫛描文	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	
40	428	壺(胴部)	Ⅲ-448	ナデ	ハケ目・沈線 指押さえ	浅黄橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	
40	429	壺(胴部)	Ⅲ-K	ナデ	ナデ・重弧文	褐灰	にぶい橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む	
40	430	壺(胴部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ・重弧文 2条沈線文	浅黄橙	にぶい橙	＋	0.5mm以下の砂粒を少し含む	
40	431	壺(胴部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ・指押さえ	重弧文・突帯	灰白 黄灰	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
40	432	壺(胴部)	Ⅴ,Ⅲ	ヘラ磨き	ハケ目・沈線・重弧文	明赤褐	赤褐	＋	精良	丹塗り
40	433	壺(胴部)	Ⅲ	磨き	磨き	浅黄橙	浅黄橙	＋	精良	丹塗り
40	434	壺(胴部)	Ⅳ	ナデ	ナデ・沈線	浅黄橙	灰褐	＋	1mm以下の砂粒を含む	
40	435	壺(胴部)	Ⅴ,Ⅱ	ナデ	ナデ・重弧文	浅黄	黒	＋	1mm以下の砂粒を含む	
40	436	壺(胴部)	Ⅳ	ナデ	ナデ・沈線・刺み	にぶい褐	にぶい黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
40	437	壺(胴部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ・重弧文 7条沈線文	にぶい黄橙	にぶい橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
40	438	壺(胴部)	Ⅱ,Bトレ-16	ナデ	ナデ・重弧文	明黄褐	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
40	439	壺(胴部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ	ナデ・沈線	褐灰	橙	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	
41	440	高杯(杯部)	Ⅲ-1050	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	4～2mm以下の砂粒を含む	
41	441	高杯(杯部)	Ⅳ	ナデ・ハケ目	ナデ・ヘラミガキ	浅橙	浅黄橙	＋	2～1mm以下の砂粒を少し含む	黒斑
41	442	高杯(杯部)	Ⅴ,Ⅲ,Ⅱ層	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	0.5～3mmの砂粒を多く含む	
41	443	高杯(杯部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅲ層	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	0.5～1mmの砂粒を少し含む	
41	444	高杯(杯部)	Ⅲ-621	ナデ・ミガキ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	
41	445	高杯(杯部)	Ⅴ,Ⅰ-1612	ヘラミガキ	ナデ	橙	橙	＋	0.5～1mm以下の砂粒を含む	筋状の埋文分析に提出
41	446	高杯(杯部)	Ⅲ,NSE3	ミガキ	ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	0.5mm以下の砂粒を含む	暗文
41	447	高杯(杯部)	Ⅴ,Ⅰ,A⑥	ナデ	ナデ・刺目突帯	橙	浅黄橙	＋	0.5～2mmの微細粒を含む	
41	448	高杯(脚部)	Ⅴ,Ⅲ	指押さえ・指ナデ	ヘラミガキ・ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
41	449	高杯(脚部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ	灰褐	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
41	450	高杯(脚部)	Ⅴ	ナデ	ナデ	明褐	明褐	＋	7mm以下、3mm以下の砂粒を含む	
41	451	高杯(杯部～脚部)	Ⅲ-1213,1143	ナデ・指押さえ	ミガキ	橙	橙	＋	2～1mm以下の砂粒を含む	
41	452	高杯(脚部～裾部)	Ⅴ,Ⅲ	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	黒斑
41	453	高杯(脚部)	Ⅳ	ナデ	ヘラミガキ	橙	にぶい橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	

第25表　弥生～古墳時代土器観察表(10)

図版番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内器面	文様および調整 外器面	色調 内器面	色調 外器面	焼成	胎土	備考
41	454	高杯(脚部)	Ⅳ	ナデ	ヘラミガキ	浅黄橙	にぶい橙	良好	1.5mm以下の砂粒を少し含む	黒斑
41	455	高杯(脚部～脚部)	Ⅳ	ナデ・工具によるナデ	ミガキ	浅黄橙	にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	黒斑
41	456	高杯(脚部)	Ⅱ Bトレ	ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい橙	＋	0.5～3mmの砂粒を少し含む	黒斑
41	457	高杯(脚部)	Ⅳ	ナデ・指押さえ	ヘラミガキ	浅黄橙	橙	＋	精良	
41	458	高杯(杯部～脚部)	Ⅲ-655	ナデ・工具によるナデ	ナデ・ミガキ	浅黄橙	黄橙	＋	2～6mm以下の砂粒を少し含む	
41	459	高杯(脚部)	Ⅱ-4	ナデ	ヘラミガキ	橙	にぶい橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	すかし
41	460	高杯(脚部)	Ⅲ-1050	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
41	461	高杯(脚部)	Ⅳ	不明	ヘラミガキ	橙	橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	黒色物付着
41	462	高杯(脚部)	Ⅲ-1157	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
41	463	高杯(脚部)	Ⅴ,Ⅰ	不明	ヘラミガキ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
41	464	高杯(脚部)	Ⅳ	指押さえナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	精良	
41	465	高杯(脚部)	Ⅲ-1085	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
41	466	高杯(脚部)	Ⅳ,Ⅰ,WSK	ナデ・ミガキ	ミガキ・沈線	明黄褐	にぶい橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
41	467	高杯(脚部)	Ⅰ	ナデ	ナデ・凹線	浅黄橙	浅黄橙	＋	1～4mm以下の砂粒を含む	
41	468	高杯(脚部)	Ⅴ,Ⅰ	ナデ	ナデ・ハケ目・ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	透し
41	469	高杯(脚部)	Ⅰ	ナデ・指押さえ	ナデ	灰白	淡橙	＋	1～2mm以下の砂粒を含む	
41	470	器台(受部)	Ⅳ	ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ 櫛描き波状文	にぶい橙	浅黄橙	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	黒斑
41	471	高杯(脚部～裾部)	Ⅲ,SK-A	不明	不明	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む	
42	472	壺(口縁～胴部)	Ⅱ 612,615 Ⅲ Ea～b拡	ハケ目	ナデ・指おさえ・ハケ目	明褐	橙 オリーブ黒	＋	0.5mm以下の砂粒を含む	黒斑
42	473	鉢(口縁)	Ⅲ-471	ナデ・ハケ目	ナデ	にぶい橙	にぶい橙 橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
42	474	片口鉢	Ⅲ-973	ハケ目・ナデ・指ナデ	ハケ目・ナデ・指ナデ	橙	浅黄橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	
42	475	鉢(口縁)	Ⅲ W溝	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
42	476	鉢(口縁)	Ⅱ Aトレ-178	ナデ	ナデ	灰	灰	＋	細粒～3.5mmの砂粒を含む	
42	477	鉢(口縁)	Ⅰ	ナデ・ハケ目	ハケ目・櫛描波状文	暗灰	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を多く含む	
42	478	鉢(胴部～底部)	Ⅲ-252	ハケ目・ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
42	479	鉢(胴部～底部)	Ⅲ-1069	ハケ目・ナデ	ナデ	浅黄橙 黒褐	浅黄橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	スス付着 黒炭
42	480	鉢(口縁～底部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	橙	橙 黄橙	＋	0.5～5mmの砂粒を多く含む	スス付着
42	481	鉢(口縁～底部)	Ⅳ SEW	ハケ目	ハケ目・ヘラミガキ	暗灰 浅黄	暗灰 浅黄	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
42	482	鉢(口縁～胴部)	Ⅲ-1067 1052	ナデ	不明	浅黄橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
42	483	鉢(口縁～底部)	Ⅲ-1134	不明	不明	橙	橙	＋	4mm以下の砂粒を多く含む	
42	484	鉢(口縁)	Ⅴ,Ⅱ Ⅱ層-56	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	
42	485	鉢(口縁～胴部)	Ⅱ AB-45,86,243 WS-SA1-581	ミガキ	ミガキ・ナデ	橙	橙 にぶい橙	＋	0.5～3mmの砂粒を含む	
42	486	鉢(口縁～胴部)	Ⅱ-452	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	1mm以下の粒を含む	
42	487	高杯(杯部)	Ⅴ,Ⅰ	ミガキ	ナデ	橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
42	488	高杯(杯部)	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層 Ⅴ,Ⅱ	ヘラミガキ・ナデ	ハケ目 ヘラミガキ・ナデ	橙	橙	＋	0.5～2.5mmの粒を含む	
42	489	脚	Ⅴ,Ⅱ,Ⅱ層	ナデ	ナデ・刷み	暗灰 にぶい黄橙	にぶい橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
42	490	脚	Ⅰ	ナデ・指ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい橙	＋	2mm以下の粒を含む	

第26表　弥生～古墳時代土器観察表(11)

図版番号	遺物番号	器種	出土地区	文様および調整 内器面	文様および調整 外器面	色調 内器出	色調 外器面	焼成	胎土	備考
42	491	鉢	V表採	不明	不明	浅黄橙	浅黄橙 黄橙	良好	0.5mm以下の砂粒を含む	
43	492	壺 (口縁～頸部)	V表採	ナデ	ナデ・櫛描波状文	黄橙	黄橙	＋	1mm以下の砂粒を多く含む	
43	493	壺(ほぼ完形) (小型・丸底)	Ⅳ	ナデ・指おさえ	ハケ目・片側穿孔	橙	浅黄橙	＋	きめが細い	
43	494	壺(ほぼ完形) (小型・丸底)	Ⅲ-1131	ナデ・指紋痕	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐 灰黄	＋	0.5mm以下の砂粒を多く含む	黒斑
43	495	壺 (小型・平底)	Ⅳ	ナデ・指おさえ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	＋	1mm以下の砂粒を含む	
43	496	壺(小型) (口縁～頸部)	V表採	ハケ目・ナデ	ナデ・櫛描波状文	橙	橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
43	497	壺(小型) (口縁)	Ⅳ	不明	ハケ目・ナデ	浅黄橙	褐灰 浅黄橙	＋	0.5～2mmの砂粒を含む	黒斑
43	498	ミニチュア (胴部～底部)	Ⅲ	ナデ	ナデ・ミガキ	黄橙	にぶい黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
43	499	ミニチュア (口縁～底部)	V,Ⅲ	工具のナデ	工具のナデ	褐灰	褐灰	＋	3mm以下の砂粒を含む	
43	500	ミニチュア (口縁～底部)	Ⅲ-302 383	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	
43	501	ミニチュア (胴部～底部)	Ⅳ ⅣSE-2	ナデ	ミガキ	黄橙	浅黄橙	＋	雲母	
43	502	ミニチュア (口縁～底部)	Ⅳ	ナデ・指おさえ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	黒斑
43	503	ミニチュア (口縁～底部)	V,Ⅲ,Ⅱ層	ナデ	ナデ	橙	橙	＋	5mm以下の砂粒を含む	
43	504	ミニチュア (胴部～底部)	V,Ⅲ	ナデ・指おさえ	ナデ・指おさえ	橙	橙	＋	6mm以下の砂粒を含む	
43	505	ミニチュア (胴部～底部)	Ⅳ	ナデ・ハケ目	ナデ	にぶい黄橙 浅黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	＋	5mm以下の砂粒を多く含む	
43	506	ミニチュア (胴部～底部)	Ⅲ-1163	不明	不明	橙	橙	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
43	507	ミニチュア (胴部～底部)	Ⅳ	ナデ	不明	黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙 褐灰	＋	3mm以下の砂粒を多く含む	
43	508	ミニチュア (完形)	V	ナデ・指おさえ	ナデ・ハケ目	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	
43	509	ミニチュア (口縁～底部)	Ⅲ	不明	不明	橙	橙 黄橙	＋	2mm以下の砂粒を含む	
43	510	ミニチュア (胴部～底部)	Ⅳ	ナデ	ナデ	浅黄橙	黄橙	＋	2mm以下の砂粒を少し含む	
43	511	ミニチュア (胴部～底部)	Ⅱ KW ミッ下	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ	暗灰黄	橙	＋	1mm以下の砂粒を少し含む	
43	512	ミニチュア (完型)	Ⅲ-1138	指ナデ	ナデ・指おさえ	にぶい黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	＋	0.5mm以下の砂粒を少し含む	
43	513	ミニチュア (完型)	V,Ⅲ,Ⅱ層	ナデ・指おさえ	指ナデ・指おさえ	にぶい橙	にぶい橙	＋	3mm以下の砂粒を含む	
43	514	ミニチュア (完型)	Ⅲ-136	指ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	＋	4mm以下の砂粒を含む	黒斑
43	515	ミニチュア (完型)	Ⅲ-216	ナデ	ナデ・指おさえ	明褐灰	明褐灰	＋	4mm以下の砂粒を含む	
43	516	ミニチュア (口縁～底部)	Ⅲ-1213	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	
43	517	ミニチュア (口縁～底部)	V,Ⅲ	ナデ	指ナデ・指おさえ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	＋	2.5mm以下の砂粒を含む	
34	555	壺 (完型)	Ⅲ,403	ナデ・ハケ目	工具によるナデ 指押さえ	橙	にぶい橙	＋	1～3mmの砂粒を含む 0.5mm以下の砂粒を多く含む	
39	556	甕 (口縁)	V,Ⅰ	ナデ	ナデ・ハケ目	浅黄橙	灰白	＋	1.5mm以下の砂粒を含む	内外面油朱 黒斑
41	557	高杯 (脚部)	Ⅳ	ナデ	ミガキ・ハケ目	橙	橙	＋	2～3mmの白色の砂粒を多く含む	矢羽根 透かし

3　中世～近世の遺物（44、45図）

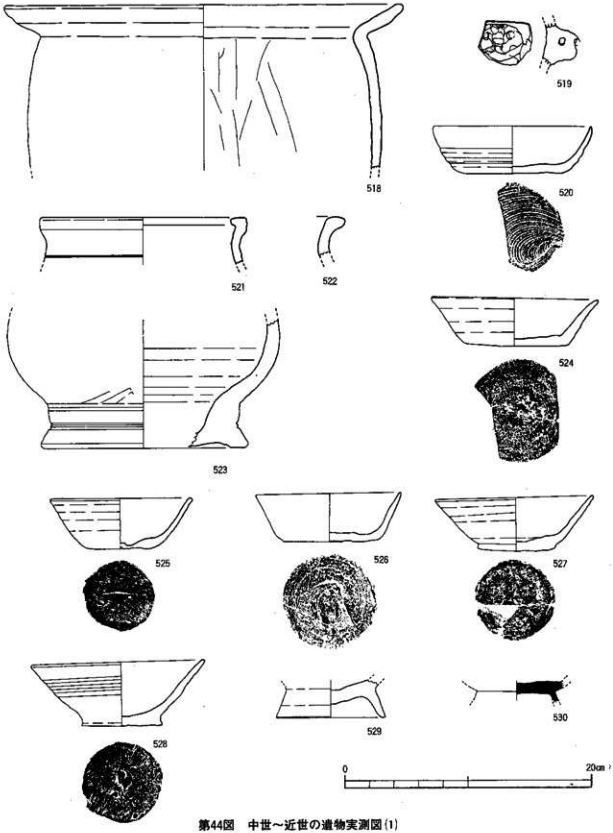
ここでとりあげる遺物は時期がほぼ特定できるものとできないものが混在するが、概ね中世～近世の範疇におさまるとおもわれるものをとりあげた。

518～529,531～534,536は土師質である。518は甕で頸部で外方に大きく屈曲し、口縁部は内湾しながらたちあがる。519,521～523は壺で、519は胴部の装飾、521,522は口縁部、523は底部である。また519,521,523は同一個体とおもわれる。520,524～528は杯で、520が糸切り、その他はすべてヘラ切り痕を底部に残す。ただし、527,528は底部がやや高台状を呈する。529は高台杯の高台部分である。530は須恵器の高台杯の高台部分である。531～534は小皿で、534は糸切り、その他はヘラ切り底である。536は灯明皿である。535,537,538,539,540は瓦質土器で、535,540は杯、538,539は小皿である。537は器種不明の胴部片で内、外面にハケメ状の条痕を残す。541,542は火鉢もしくは香炉とおもわれる。541は胴部に獅子の顔のような突起がみられ、その突起の横に花の線刻を施す。542は脚部で、外面に菊花状のスタンプがみられる。このスタンプは上位が大きく、下位が小さくなる傾向がうかがわれる。543～547,549,550,554は青磁である。543～546は塊である。545は内、外面に雷文帯がみられ、546は見込みに花が描かれている。547は脚台付き皿もしくは塊で脚台が動物の顔状を呈する。549,550は稜花口縁の皿である。550は瓶で口縁部が上方に屈曲する。548は白磁の高台付き皿である。551はふいごの羽口である。552は取っ手状のもの、550は陶器壺の肩部とみられる。

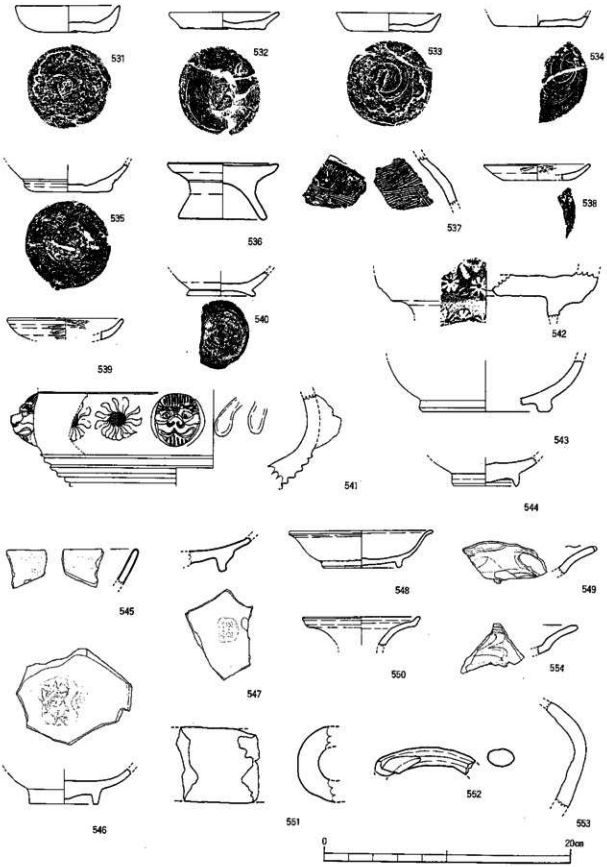
時期としては518,536が12世紀頃に溯る可能性があり、土師質の壺としてあげた4点と541は近世のものと考えられる。その他の遺物は中世の範疇でとらえておきたい。

第27表　中世～近世の遺物観察表(1)

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	形態・手法の特徴など	色調 内部/両外部器面	焼成	胎土	備考
44	518	甕 口縁～胴部	Ⅲ-68	内面工具によるナデ、外面ナデ	(内)淡橙 (外)明褐灰	良好	1～4mm の砂粒を多く含む	⊗スス付着
44	519	壺 胴部(装飾部分)	Ⅲ	内外共にナデ	に.ぶい橙	良好	精良	
44	520	皿 口縁～底部	Ⅴ-Ⅲ	内面ナデ、外折ナデ、底部糸切り	浅黄橙	良好	1mm以下の砂粒を少し含む	
44	521	壺 口縁	Ⅱ	内外面共にナデ	浅黄橙	良好	2mm以下の砂粒を少し含む	
44	522	壺 口縁	Ⅱ	内面ナデ、沈線、外面ナデ	浅黄橙	良好	0.5mm以下の砂粒を少し含む	
44	523	壺 胴部～底部	Ⅲ	内面ナデ、外面ナデ、工具による削り	に.ぶい橙	良好	2mm以下の砂粒を少し含む	
44	524	皿 口縁～底部	Ⅲ-SK	内面ナデ、外面ナデ、底部ヘラ切り	浅黄橙	良好	2mm以下の砂粒を多く含む	
44	525	皿 口縁～底部	Ⅲ-733	内外面ナデ、底部ヘラ切り	橙	良好	精良	
44	526	皿 ほぼ完形	Ⅴ-Ⅲ	内外面ナデ、底部ヘラ切り	浅黄橙	良好	1mm以下の砂粒を少し含む	
44	527	高台付皿 口縁底部	Ⅲ-290	内外面ナデ、底部ヘラ切り	(内)淡赤橙 (外)淡橙	良好	精良、高郎小礫を含む	
44	528	高台付皿 ほぼ完形	Ⅲ-66	内外面ナデ、底部ヘラ切り	浅黄橙	良好	精良、高郎小礫を含む	
44	529	高台付皿 底部	Ⅴ-Ⅲ	内外面ナデ	(内)橙 (外)浅黄橙	良好	1mm以下の砂粒を少し含む	
44	530	高台付皿 底部	ⅢE西側	内外面ナデ	灰白	良好	0.5mm以下の砂粒を多く含む	
45	531	皿 ほぼ完形	Ⅴ-Ⅲ層	内外面とも横ナデ、底部ヘラ切り	浅黄橙	良好	1mm以下の砂粒を少し含む	
45	532	皿 口縁～底部	Ⅳ	内外面とも横ナデ、底部ヘラ切り	橙	良好	1mm以下の砂粒を含む	
45	533	皿 ほぼ完形	Ⅴ-Ⅲ	内外面とも横ナデ、底部ヘラ切り	浅黄橙	良好	1mm以下の砂粒を少し含む	
45	534	皿 底部	Ⅳ	内外面とも横ナデ、底部糸切り	浅黄橙	良好	1mm以下の砂粒を少し含む	
45	535	皿 底部	ⅢE東ミゾ	内外面とも横ナデ	灰白-褐灰	良好	精良	
45	536	高台付灯明皿 口縁～脚	Ⅳ	内外面とも横ナデ	浅黄橙	良好	きめ細か	
45	537	土　鍋	ⅡAトレーB4	内面ハケ目、外面横ナデ・ハケ目	灰黄	良好	1mm以下の砂粒を少し含む	スス付着



第44図　中世～近世の遺物実測図(1)



第45図　中世～近世の遺物実測図(2)

第28表　中世～近世の遺物観察表(2)

図面番号	遺物番号	器種	出土地区	形態・手法の特徴など	色調 内器面外器面	焼成	胎土	備考
45	538	皿 口縁	Ⅲ-798	内面磨き、外面ナデ・磨き	黒褐	良好	1mm以下の砂粒を含む	
45	539	皿 口縁	Ⅲ-795	内外面ともに横ナデ、磨き	(内)褐灰 (外)黒褐	良好	1mm以下の砂粒を含む	
45	540	皿 底部	Ⅲ-745	内面ナデ、外面横ナデ	褐灰	良好	ガラス状の微細粒を含む	
45	541	火舎	Ⅰ	内外面ともに横ナデ、草花文、獅子の顔の貼付文	灰	良好	1mm以下の砂粒を含む	
45	542	火舎	Ⅰ	内面横ナデ・指ナデ、外周横ナデ・ナデ・雷花文	(内)灰白 (外)黄灰・灰白	堅緻	2mm以下の砂粒を含む	
45	543	青磁瓶	Ⅳ・Ⅰ	内面横ナデ、外面施釉、重ね跡釉	(内)淡茶 釉調,オリーブ灰、胎土調,淡白	堅緻	精良	
45	544	青磁 底部	Ⅵ・Ⅱ	内面施釉、蛇ノ目釉ハギ 外面施釉、底部露胎	釉調,灰白 胎土調,灰白	堅緻	精良	
45	545	陶器 口縁	ⅡAトレー199	内外面に釉貫入、雲文帯	釉調,灰オリーブ 胎土調、灰白	堅緻	精良	
45	546	青磁 底部	Ⅲ	内面施釉 外面施釉、底部露胎	釉調,明緑灰 胎土調,灰白 黄釉,暗灰黄	堅緻	精良	
45	547	青磁	Ⅴ・Ⅱ-476	内外面に施釉貫入	明緑灰	堅緻	精良	
45	548	はば完形	Ⅵ・Ⅰ	内外面ともに施釉	灰白	堅緻	精良	
45	549	青磁 口縁	Ⅳ・Ⅰ	内外面に施釉貫入	釉調,明緑灰 胎土調,灰白	堅緻	精良	
45	550	青磁	Ⅵ・Ⅰ	内、外面に施釉貫入	明オリーブ灰、灰白	堅緻	精良	複色付着
45	551	鐔の羽口	Ⅴ・Ⅰ		(内)淡黄橙 (外)灰白	良好		
45	552	把手	Ⅲ		黄橙	良好	2mm以下の砂粒を含む	
45	553	須恵器	Ⅰ-25	内外面とも横ナデ	内面に赤い黄橙、外面灰褐	軟質	2mm以下の砂粒を含む	
45	554	青磁	Ⅵ・1	施釉貫入	明緑灰	堅緻	精良	

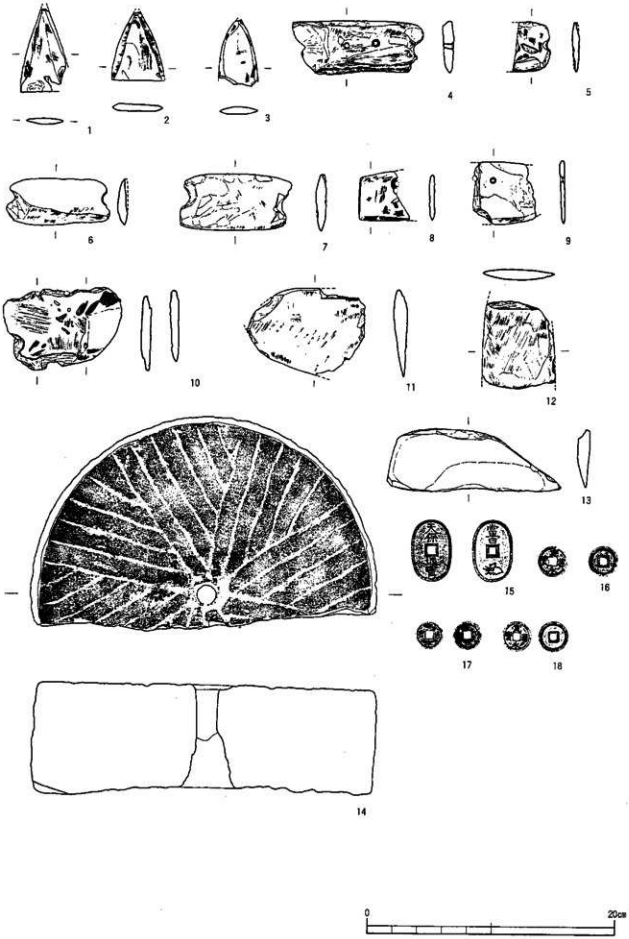
4　弥生～近世の石器および古銭

学頭遺跡では多くの土器が出土したが、それに比して石器等の出土は少なかった。しかし、時期的にはかなりの幅がみられる。

1～3は磨製石鏃、4～9は石包丁である。石包丁では両端にえぐりをもつもの、穿孔をもつもの、その組み合わせのものがみられる。10、11も石包丁状であるがかなり大きく、鋭いケズリ痕跡がみられる。12は石剣とみられる。13は一見砥石状だが刃部状に薄くなった部分に使用痕がみられる。14は石臼の下臼で、円形を呈する平面を沈線で8分割し、その区画内をさらに数状の沈線で区画している。15～18は古銭で、15が天保通宝、16～18が寛永通宝であり、いずれも江戸時代のものである。

第29表　石器および古銭計測表

図面番号	遺物番号	種別	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
46	1	磨製石鏃	Ⅳ	3.3	1.85	0.25	1.6		
46	2	磨製石鏃	Ⅲ-989	2.76	2.05	0.25	1.6		
46	3	磨製石鏃	Ⅴ表採	2.6	1.65	0.3	1.3		
46	4	石包丁	Ⅲ-571	4.15	10.75	0.8	53.4		
46	5	石包丁	Ⅴ一括	3.95	3	5.5	10		
46	6	石包丁	東横下	3.7	8.3	7.5	33.1		
46	7	石包丁	一括	4.5	8.9	8.5	54.6		
46	8	石包丁	Ⅴ一括	3.9	4.15	4	11.8		
46	9	石包丁	Ⅴ・Ⅱ区・Ⅱ層	5	5	0.4	15.6		
46	10	石包丁	ⅣSE	9.68	6.6	0.8	63.5		
46	11	石刀	ⅢSC24	6.9	9.6	1.1	74.3		
46	12	石剣	ⅣⅠ区	6.9	5.8	0.95	56.5		
46	13		Ⅰ	14.1	5	1.05	102		
46	14	石臼	Ⅲ-1245	16.8	28	9	6670		
46	15	銭	Ⅲ	4.93	3.25	0.3	22.3		
46	16	銭	Ⅵ・Ⅰ区・溝	2.48	2.5	0.12	3.2		
46	17	銭	2号溝・表土中	2.35	2.35	0.1	1.6		
46	18	銭	Ⅵ・Ⅲ区・溝一括	2.5	2.5	0.1	2.5		



第46図　石器及び古銭実測図

第Ⅲ章　八児遺跡の調査

第１節　第Ⅰ区の調査

(1)　調査区の概要

道路拡幅部分の内遺構が良好に遺存していると推定された範囲に、幅５ｍ、長さ35ｍにわたって発掘区を設定した。当初大字から宮水流遺跡と呼称したが、その後小字に従い八児遺跡とした。さらに１次調査地に隣接した地点を２次調査するに及び前者を八児遺跡Ⅰ区、後者をⅡ区とした。Ⅰ区では古代初頭から中世にかけての遺構が調査区の北半に集中して検出された。調査区の層位は表土下に汚れた黒褐色土があり、その下部の黄褐色土で遺構輪郭が明瞭に検出できたが、本来の遺構面は黒褐色土にあると推定される。

(2)　古代・中世の遺構と遺物

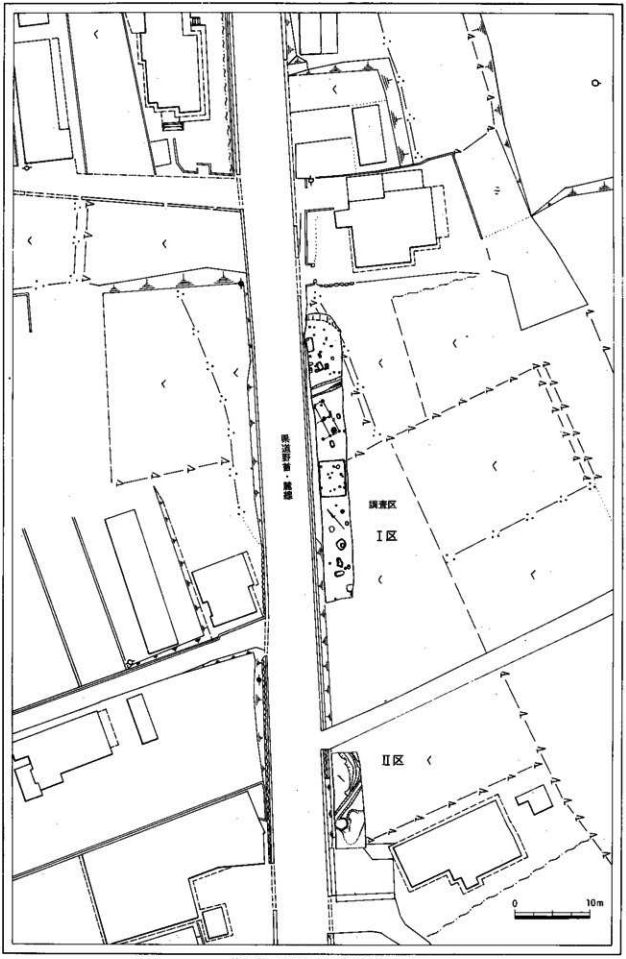
時期の明確な遺構は竪穴住居趾、土壙墓などすべて古代から中世に位置付けられる。

竪穴住居趾（第48図、53図　図版18）

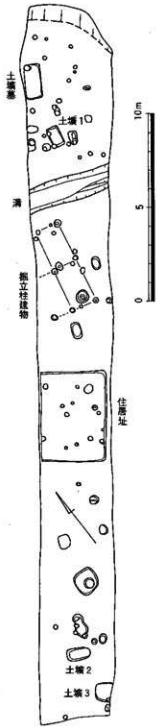
竪穴住居址は調査区の中央からやや南西よりで検出された。一部が発掘区外にあり、全体形はわからないが、検出面からの深さは約30㎝、完掘できた南東壁の長さは4.84ｍで他辺の長さも５ｍ前後のほぼ正方形の平面形を呈していると推定される。南東側壁面の方向はＮ－32°－Ｅである。住居趾内で13個の柱穴が検出されたが、ほとんどの柱穴は深さ20㎝前後と浅く、この住居に伴う可能性のある柱穴はＰ45とＰ55の二つだけである。この二つの柱穴はほぼ対角線上にあるので４本主柱の可能性があるが、他の二つは確認できなかった。住居内施設としては他に埋甕が床面中央に据えられていた。甕の外面に接する部分はオレンジ色に変色していて熱を受けていたことは確かだが、埋甕内にもその周辺でも灰や炭化物は検出できなかった。

住居趾出土遺物（第55図、56図　図版20）

住居趾出土遺物には須恵器と土師器がある。ほとんどが埋土中の出土で床面直上の検出は埋甕を含めて８点ほどであり、その大部分が小破片であった。１は唯一の弥生土器片で中期の甕口縁部である。２、３は須恵器坏蓋口縁部片である。７も須恵器坏蓋であるが、天井部外面が荒れていて坏身として使用された可能性がある（実測図では坏として扱った）。４～６はつまみを持つ須恵器坏蓋である。これらの須恵器蓋坏はおよそＴＫ217に比定できる特徴をもっている。８、９は須恵器甕の胴部片で、内面は同心円叩き、外面は平行叩きが見られる。10～21、24は土師器甕の口縁部片である。22、23は土師器高坏もしくは台付き碗の脚部で38、39は高坏もしくは鉢の口縁部と考えられる。25～36、40は土師器鉢、碗、皿の口縁部～胴部片である。41～50は土師器甕の底部である。46の底面は木の葉底になっている。45は住居趾内で検出されたＰ45埋土からの出土である。51は甑の胴部から底部にかけての破片で、実測図にはかなり推定復元がなされている。胴上半部はほとんど取っ手の部分が遺存していただけであった。取っ手は胴部に差込まれている。52は住居趾床面中央部で検出された埋甕で、本来は口縁部を欠いただけであったが、十分に復元することができなかった。53は土師器坏蓋で、つまみ部分がわずかに遺存している。56は小型の土師器手捏ね鉢で器壁の接合部が明瞭に残っている。54、55、57～59は土師器坏身で54はほぼ完形である。60はヘラ切り底を呈する土師器皿の底部である。



第47図　遺跡周辺図(1/500)



第48図　遺構配置図(1/200)

土壙墓（第49図、54図　図版18）

土壙墓は発掘区の北東端で検出された。長さ1.88m、幅0.93mで、掘方確認面からの深さ約6cmの規模を持つほぼ長方形の墓である。長軸の方位はN－32°－Eである。人骨は消滅していたので頭位方位は判らない。土壙墓の実際の深さは不明であるが、高さ約7cmの大形石鏃が検出面のさらに上で正立して検出されたらしいので、少なくとも13cm以上は現存していたことがわかる。土壙墓の埋土は湿って汚れた黒褐色土で、分層することはできなかった。

土壙墓出土遺物（第58図、59図　図版20、21）

土壙墓としては豊富な副葬品が見られる。副葬品には土師器皿、白磁小壺、湖州鏡、鎌、刀子、石鍋、鈴銅、鉄鈴がある。副葬品は墓底長軸を中心に左右に配置されている。

①土器　土器は土師器皿と白磁合子の2点が出土した。

73はヘラ切り底の土師器皿で、墓壙底面南西寄りのほぼ短辺中央部に正立して置かれていた。口径9.2cm、高さ1.4cmと器高の低い小皿である。内外ともナデ調整され、底部内面は指頭押圧されている。

74は白磁小壺と蓋で、壺は一部を欠失しているが、短く直立した口縁部から肩が大きく張り出し最大径5.7cmを測る。器高は4.4cmである。蓋は天井部がへこんだ栓形の蓋である。壺、蓋とも灰白色の胎土に幾分飴色の釉がかかり細かな貫入が見られるが、底部に釉はかかっておらず削りがそのまま認められる。白磁の正確な出土位置は遺憾ながら不明である。

②鉄製品　鉄製品は刀子と鎌、鈴及び不明鉄器がある。

片関の刀子76は床面東隅で検出した。切先が欠損していて刃部の現存長は9.3cm、幅は約2cm、柄部長7.6cmである。

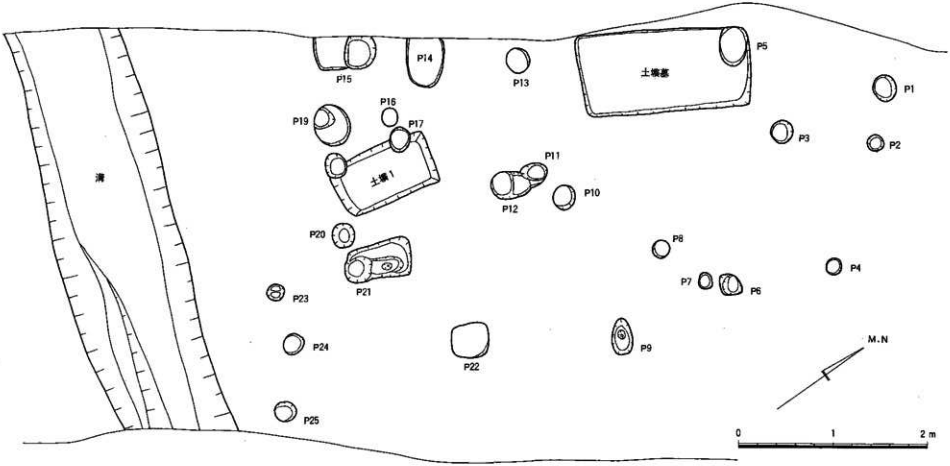
77は曲刃鎌で床面中央部やや西寄りの部分で出土した。柄に近い部分が欠失し、刃部先端部が摩滅している。現存刃部長は約16cm、幅は中央部で約3.7cmを測る。刃部先端に木質と繊維質が付着していた。

75は不明鉄器である。直径約6cmで自転車のベル状を呈する円形本体に幅約2cm、長さ7cm、厚さ約1mmの細長い長方形鉄板が錆着している。両者が一体のものか否かは不明である。

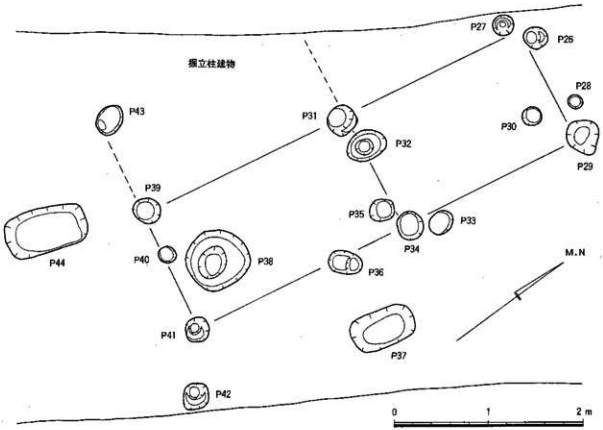
81-b～86は鉄鈴[1]である。鉄鈴は東側壁の北東木口寄りの一群と西側壁寄りの一群がある。前者は銅鈴と混在して出土した。

81-bは鉄鈴No.1で錆のため正確な器形は判らないが、X線観察によれば体部はほぼ球形である。口部が一部欠損している。鈕の形状は五角形を呈している。高さ約3.6cm、鈴体高2.6cm、正面幅は約3cm、鈕の高さ1.2cm、幅は基部で約9.5cm、厚さ約3.4mm、鈕孔径3cmを測る。口は体部中央までは届いていない。口の幅はおよそ2.7mmである。鈕の穴方向と口とは平行ではなく角度をもつ。

81-cは鉄鈴No.5で鉄鈴No.1、銅鈴No.5と錆着している。錆のため正確



第49図　土壙墓・溝及び周辺遺構図(1/40)



第50図　掘立柱建物及び周辺遺構(1/40)

な器形は判らないが、X線観察によれば体部はほぼ球形である。鈕は欠損していて形状わからない。鈴体高およそ2.9㎝、正面幅は約3㎝、口は体部中央までは届いていない。口の幅はおよそ2.2㎜である。丸の材質は不明である。

82は鉄鈴No.2で銹のため正確な器形は判らないが、体部はほぼ球形である。腹部に帯が巡る可能性がある。鈕の形状は円形で鈕穴は水滴状を呈している。高さ約4.3㎝、鈴体高はおよそ3.1㎝、正面幅は約3.2㎝、鈕の高さ1.2㎝、径は約1㎝、厚さ約4㎜、鈕孔径約4㎜を測る。口形状等ははっきりしない。

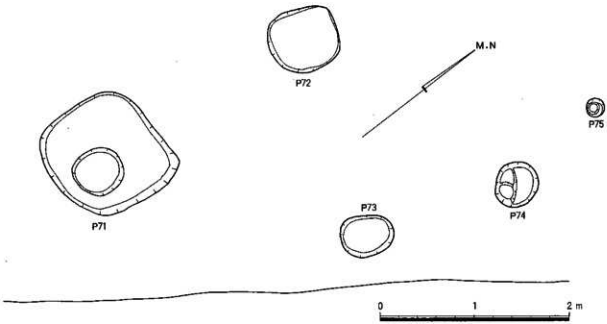
83は鉄鈴No.3で銹のため正確な器形は判らないが、体部はほぼ球形である。鈕の形状は円形で鈕穴は水滴状を呈している。高さ約4㎝、鈴体高はおよそ3㎝、正面幅は約3㎝、鈕の高さ1.2㎝、径は約1㎝、厚さ約3.5㎜、鈕孔径約4㎜を測る。口形状等ははっきりしない。

84は鉄鈴No.4で銹のため正確な器形は判らないが、X線観察によれば体部はほぼ球形である。鈕は欠損している。鈴体高約2.8㎝、正面幅は約3㎝、鈕の幅は基部で5㎜、厚さ2㎜を測る。

85は鉄鈴No.6である。刀子と接して置かれていた。銹のため正確な器形は判らないが、X線観察によれば体部は球形に近いが上下に幾分扁平である。鈕の形状は円形を呈している。高さ約4.9㎝、鈴体高3.3㎝、正面幅は約3.7㎝、鈕の高さ1.6㎝、径は約1.2㎝、厚さ約5㎜、鈕孔径約3㎜を測り、最大の鈴である。口は体部中央までは届いていない。口の幅は最大約5㎜で端に行くほど狭くなる。鈕の穴方向と口とは平行ではなく角度をもつ。丸の材質は不明である。

86は5個の鈴が銹著したものである。小型石鏃の横で出土した。aは鉄鈴No.7でb、c、d、eは各々No.8、9、10、11である。銹のため正確な形状等ははっきりしないが、概ね85を除いた鉄鈴と同様な形状を呈している。

③銅製品　鈴と湖州鏡がある。



第51図　柱穴71～75(1/40)

87は隅入方形の湖州鏡で、幾分歪んでいるが鏡面は平坦である。大きさは幅8.01㎝、厚さ約1㎜、鈕部分の厚さは3㎜である。蒲鉾縁の上面は平坦でその部分の幅は約2.2㎜、厚さは1.65㎜から2.2㎜を測る。重さは45.6g である。銘文の方形区画は長さ4.1㎝、幅2.13㎝、外匡線は1重で鈕の左側にある。銘文は2行で肉眼では明確ではないが、拓本から「□州真石家／念二□□子」と読める。□部分は先頭から湖、叔、照と推定される。鏡の表裏は木質が付着していて、木箱に収められていた可能性を何わせる。

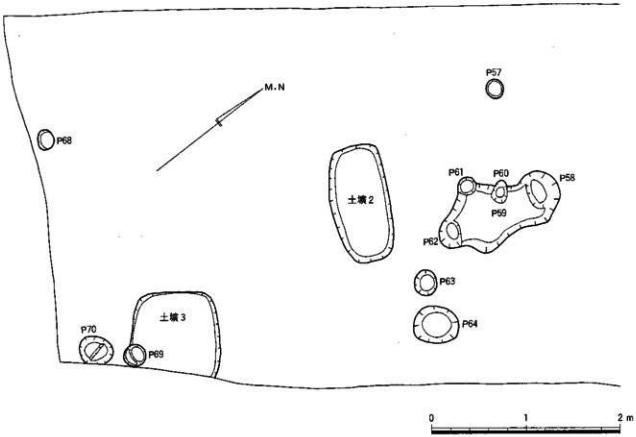
78～81-aは銅鈴である。銅鈴は東側壁の北東木口寄りに纏まって配置され、鉄鈴と混在して出土した。

78は銅鈴No.2である。下膨れで下半部がやや扁平な器形をなし、上半部が下半部より若干高いがかなり欠損している。鈕の形状は方形で角が丸い。高さ3.28㎝、鈴体高2.83㎝、側面幅約2.5㎝、鈕の高さ5.2㎜、幅は基部で8.1㎜、厚さ3.1㎜、鈕孔径2.9㎜を測る。口は腹部まで開いている。鋳型の合せ目は鈕の中央と口の一辺を通る。

79は銅鈴No.3で下膨れで下半部がやや扁平な器形をなし、上半部が下半部より高い。鈕の形状は五角形を呈している。高さ2.8㎝、鈴体高2.2㎝、正面、側面幅共に2.15㎝、鈕の高さ5.5㎜、幅6.7㎜、厚さ2㎜、鈕孔径2.3㎜を測る。丸は鉄製で内部で錆着している。口幅は約4㎜で腹部まで開いていて端部は丸く収まる。鋳型の合せ目は鈕の端と口の一辺を通るが、反対側では口端の真ん中に見られる。

80は銅鈴No.4である。下膨れで下半部がやや扁平な器形をなし、上半部が下半部より径が小さく若干高い。鈕の形状は丸い。高さ2.73㎝、鈴体高2.13㎝、正面、側面幅は各々2.15㎝、2.4㎝、鈕の高さ6㎜、幅7.1㎜、厚さ1.7㎜、鈕孔径2.2㎜を測る。丸は鉄製で口中央部で錆着している。口幅は約3.8㎜で腹部まで開いていて端部は丸く収まる。鋳型の合せ目は鈕の端と口の一辺を通るが、反対側では口端の真ん中に見られる。

81-aは銅鈴No.5鉄鈴No.1、No.5と錆着している。下膨れで下半部がやや扁平な器形をなし、上半部が



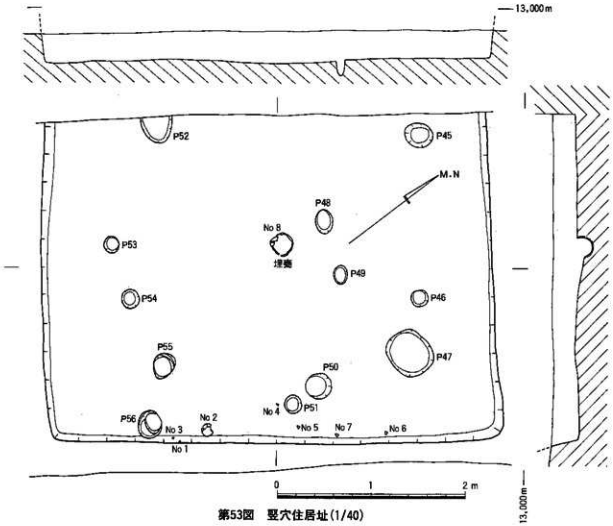
第52図　土壙2・3及び周辺遺構図(1/40)

下半部より高い。鈕の大部分は欠損している。鈴体高2.45㎝、正面、側面幅共に2.41㎝、鈕の幅は基部で6.5㎜、厚さ2.1㎜を測る。丸は鉄製で内部で銹着している。口幅は約3㎜で腹部まで開いていて端部は丸く収まる。銅鈴にはこの他に、刀子の横で検出した銅鈴No.1があるが、取りあげ後に細かく破損したため実測図として示しえなかった。

④石製品　大小の石鍋2点が出土した。

88は大形で体側上部に縦長の耳が3つ（1箇所欠失）削り出されている石鍋で、耳の上面は口縁上面と同一面をなしている。正確な出土位置はわからないが、東側面の木口寄りの部分で、鈴、刀子の上部に正立して出土したらしい。従って、これだけは墓壙底密着ではなく、棺上に置かれていた可能性がある。口縁から胴部にかけての部位が1/2弱欠失している。口径は18.2㎝、器高は7㎝、口唇部の厚さは1.2㎝を測る。外側面は細かな鑿で三段に削られている。小型品と異なり、削り痕はそのままでありほとんど研磨されていない。耳外面は横に削られているが、側面は縦削りである。内面は同じく鑿痕が見られるが、研磨されている。器表は煤けていて、底部外面は火を受けて剝離が見られ、厚さが1㎜程度しかない部分がある。また使用中に幅3㎝四方程度破損していて、その部分が補修されていた。補修には滑石と鉄のピンが使用されていた。長さ5.8㎝、幅4㎝の長方形の滑石板中央から幅1.5㎝、長さ2.5㎝、高さ1.5㎝の方形部分が削り出されて突き出ていて、滑石の断面はキノコ状を呈している。突起中央に8×6㎜の方形の穴が穿けられていて、そこにピンを通し固定するようになっている。補修部の横に楕円形の穴が穿けられているが、その部分には煤が認められず、副葬時に穿孔された可能性がある。

89は小型の石鍋で土壙墓底北部分で正立して出土した。口縁部径が6.5㎝から6.9㎝、高さが最大3.9㎝で口縁部は内傾していて、外面には煤が付着している。内部は細かい鑿状工具で削っていて、底面は磨かれている。上面が口縁上面と同一平面を形成する縦長の耳が4つ見られる外面は縦方向に細い工具で削ったあと



第53図　竪穴住居址(1/40)

横方向に3段丁寧に削って整形しているが、耳の下部だけは縦方向に大きく削られている。厚さ7㎜内外の口縁上面は敲打を受けたように荒れている。内部には鉄片が4個入っていた。

掘立柱建物（第50図）

溝と竪穴住居趾の中間で検出した。P41、P34、P29で二間分の個柱を形成し、それに対応する柱穴がP39、P31、P26である。一間×二間の建物と思われるが発掘区外に延びる可能性もある。長辺の一間幅は約2.2m、短辺の一間幅は約1.4mである。

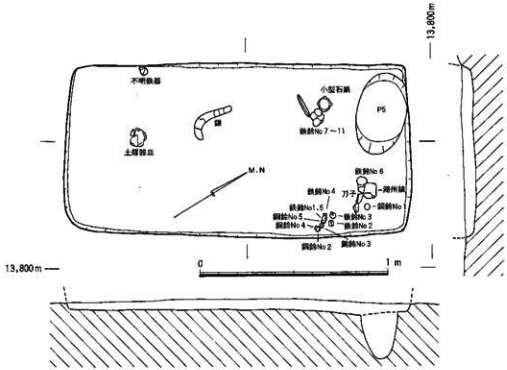
出土遺物（第57図）

P34から72の土師器亞頸部片が出土した。

その他の遺構と遺物（第49図－52図　図版20）

溝（第49図　図版17）

溝は調査区の北東部、掘立柱建物と土壙墓の間で検出した。溝の延びる方向は南東から北西でその方向にわずかに低くなっていく。検出面での最大幅約1.3m、最少幅1.1mを計り、深さは約20cmである。底面はおよそ80cmではほぼ平坦である。南東部分では二段になっていた。溝埋土は湿って汚れた黒褐色土のほぼ単一層であった。出土遺物には須恵器甕片、土師器甕片と青磁皿片、土師器皿片などがあり、すべて埋土中から出土している。



第54図　土壙墓(1/20)

土壙（第49図、52図　図版17）

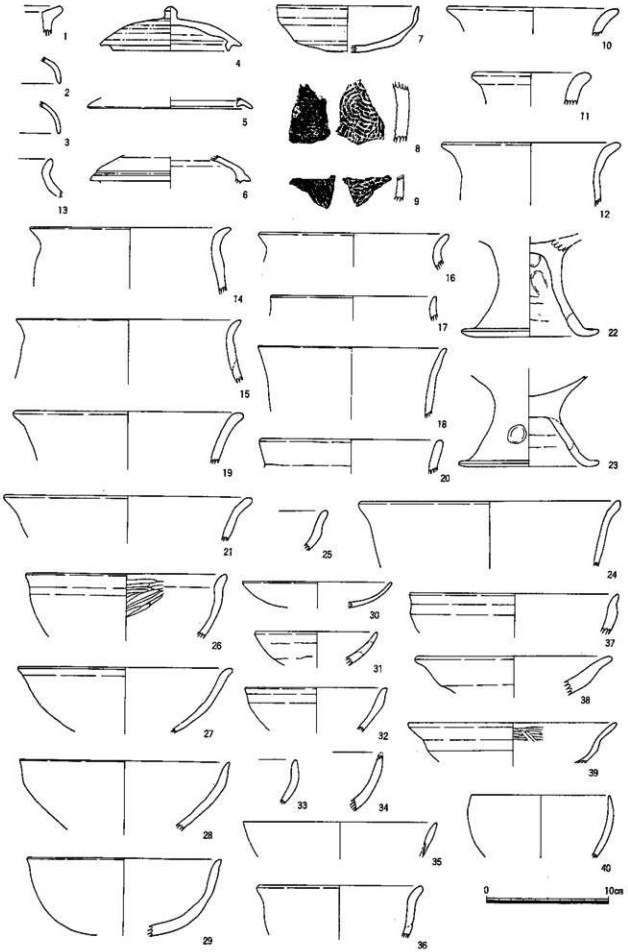
土壙墓よりも小規模な長方形掘り込みを土壙とした。土壙１は溝と土壙墓の中間に位置する。幅64cm、長さ1.1ｍ、深さ20cmほどの長方形を呈した土壙である。土壙２、土壙３は発掘区の南西端近くで検出した。土壙２は幅62cm、長さ1.24ｍ、深さ20cm程の略長方形を呈した土壙である。土壙３は一部が未発掘区に延びていて全体の規模はわからないが、幅約94cmで深さ10cm程度の正方形に近い土壙である。いずれの土壙の埋土とも湿って汚れた黒褐色土のほぼ単一層であった。遺物はほとんど無く、土壙２の埋土から土師器皿片、土壙３の埋土から須恵器甕片を検出したのみである。その他にＰ14、Ｐ22、Ｐ37、Ｐ44、Ｐ72なども土壙として取り扱える。

柱穴（第49～54図）

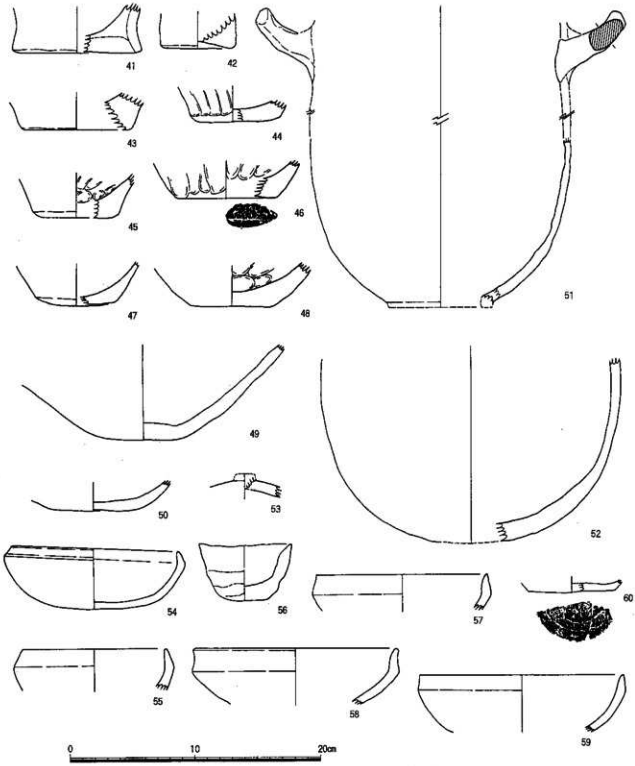
掘立柱建物として構成できなかった柱穴状ピットはおよそ65個検出された。発掘区のうち、住居跡より北東半分に密度高く分布している。ピットにはＰ１、Ｐ９など径が20cm前後で深さが10～30cm程度のものと、Ｐ14、Ｐ15など径が30cm以上で深さが10cm前後のものの２種類があり、前者は通常の柱穴と考えられる。

遺物（第57図　図版20）

溝埋土からは61、62、64～67が出土した。61は須恵器甕胴部片で器面調整は内面がナデ、外面は平行叩きである。62も須恵器甕胴部片で内面同心円叩き、外面格子叩きが施されている。64、65は土師器甕の口縁部片で、風化が強いものの、ナデ調整されていると思われる。この４点は古代初頭頃に位置づけられると考えられる。66は糸切り底の皿底部である。67は同安窯系Ｉ－２ｂの青磁皿底部片で見込に櫛描文がある。土壙２からは、68の糸切り底皿底部片が、土壙３からは、63の内面叩きナデ消し、外面格子叩きの施された須恵器甕片が出土した。72は土師器壺の頸部で柱穴Ｐ34から出土した。その他に図示しなかったが土壙２から古代末～中世初頭頃のヘラ切り底の土師器皿底部片、土壙３から中世の糸切り底土師器皿の底部片が出土し、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ59、Ｐ60から中世の糸切り底皿底部破片、Ｐ59からは近世の染付胴部片が出土した。



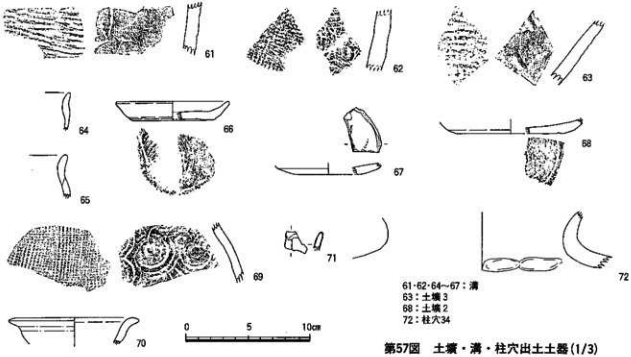
第55図　住居址出土土器(1/3)



第56図　住居址出土土器(1/3)

(3)　**小結**

Ⅰ区は狭い範囲の発掘であり、当然ながら集落等の構造等に言及できるだけの材料は無い。ここでは遺構の時期等２、３の点について纏めてみたい。竪穴住居址は須恵器坏蓋等の時期がＴＫ217あたりに位置付けられる特徴を持っている。土師器編年は未整備なので詳しい位置付けはできないが、坏等にみる特徴などから概ね須恵器と同様の時期が与えられよう。７世紀前半代に比定できる。他に明確な古代初頭の遺構は無い。土壙墓は、釘等木棺の痕跡を示すものが検出できなかったので土壙墓としたが、鈴や鏡などに木質の付着が



第57図　土壙・溝・柱穴出土土器(1/3)

見られ、あるいは棺底の一部が銹化して残った可能性もあり、ここでは木棺墓の可能性を残した土壙墓としておきたい。副葬品は豊富であり、その内容も一般的な土壙墓のそれとは少々趣が異なっている。土師皿、鎌、刀子等は一般的に見られる副葬品であり、湖州鏡の副葬は県内でもその例がある。しかし石鍋や鈴の副葬はあまり例がなく、石鍋、湖州鏡、白磁小壺を加えた内容は経塚のそれに近似している。土壙墓の年代は、副葬品のセット関係からおよそ平安時代末期附近と判断されるが、白磁小壺は鹿部山経塚において永久元年（1113）銘経筒と共伴した青磁小壺と、青磁と白磁の違いはあるものの、ほぼ同型である。また、太宰府SE1920で出土した同様の小壺は山本信夫氏によりC期として11世紀後半から12世紀前半に比定されている。[3] 石鍋は県内出土のものとしては最古例で、森田勉氏分類のA群に比定される。[4] 盛行期は10～11世紀と考えられている。従って、土壙墓の年代も11世紀後半から12世紀の前半代と大きく考えておきたい。湖州鏡は伝世例を含めて県内では8例目であるが、他の7例は円もしくは六花鏡で、方鏡の分布は近畿以北の日本海側に濃いとされ、[5] 方鏡の出土例は九州でも皆無に近い。中でも隅入方鏡は全国的にも稀だと思われる。[6] 被葬者が鏡を入手した背景の追及等今後の課題として残る。

(註)

(1) 鈴の部分名称については、次の文献を参考にした。なお、田中氏（筑波大学）からは参考文献等教示頂いた。
田中　裕　1992「第8章　考察Ⅱ　小型埋葬施設出土の日本初期の鈴」『史跡　森将軍塚』　長野県更埴市教育委員会

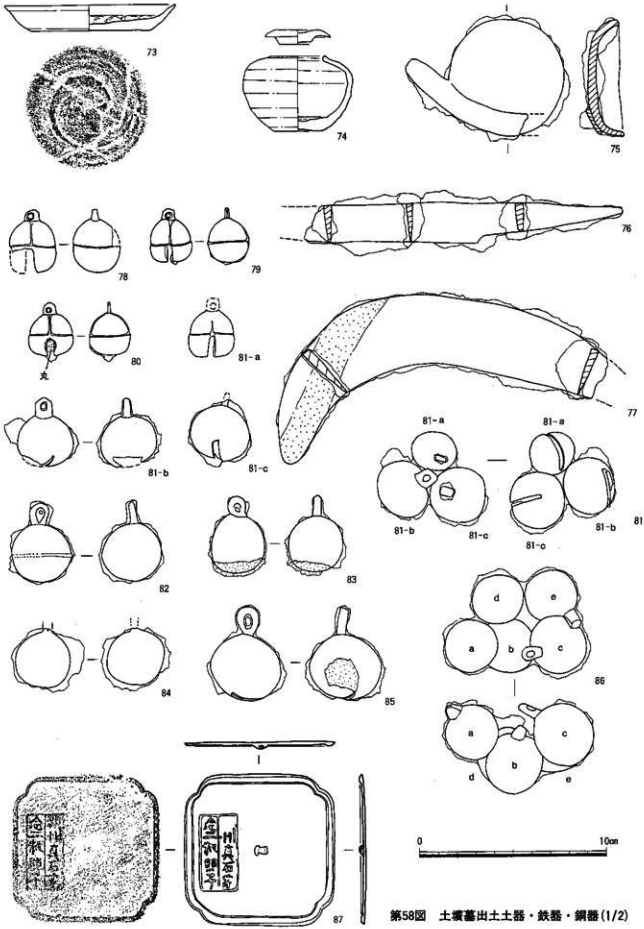
(2) 宮小路賀宏　1973「第6章　鹿部山経塚の調査」『鹿部山遺跡』　日本道路公団　139，141頁

(3) 山本　信夫　1992「第10章第2節　太宰府と貿易陶磁」『太宰府市史　考古資料編』　太宰府市

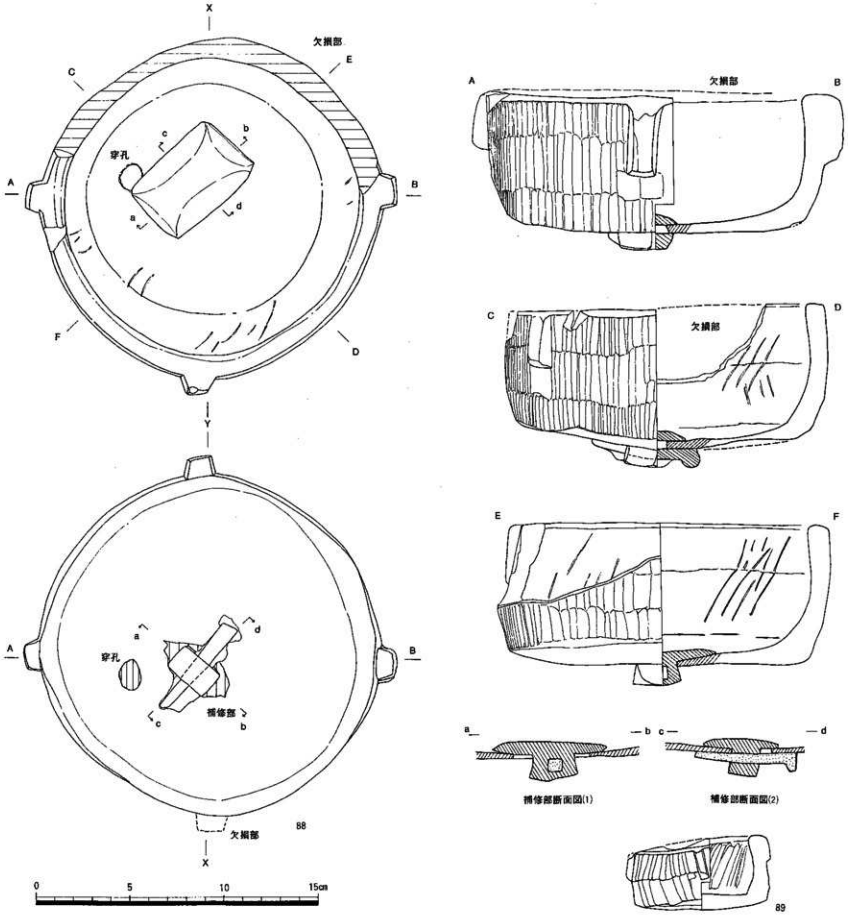
(4) 森田　勉　1983「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」『仏教藝術』148　毎日新聞社

(5) 久保　智康　1987「平安後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史　下　岡崎敬先生退官記念論集』岡崎敬先生退官記念事業会　505～507頁

(6) 西村　強三　1983「鹿児島県下の神社に傳わる中国宋元時代の鏡」『九州歴史資料館研究論集』9　九州歴史資料館



第58図　土壙墓出土土器・鉄器・銅器(1/2)



第59図　土壙墓出土石鍋(1/2)

第30表　八見遺跡遺物一覧表(1)

	器種等	部位	出土遺構	実測図番号	遺存度	時期	内面調整	外面調整	備考
1	弥生土器甕	口縁部	住居跡	01	破片	弥生中期？	ナデ	横ナデ	
2	須恵器壷	口縁部	住居跡	02	破片	古代初頭	ナデ	ナデ	TK-217？.67と同一か？
3	須恵器壷	口縁部	住居跡	03	破片	古代初頭	ナデ	ナデ	65と同一か
4	須恵器壷		住居跡	04	1/3	古代初頭	削り、ナデ	削り、ナデ	TK-217？
5	須恵器壷	かえり	住居跡	05	破片	古代初頭	ナデ	ナデ	TK-217？
6	須恵器壷	火井部	住居跡-No 5	06	1/11	古代初頭	ナデ	削り、ナデ	TK-217？
7	須恵器不		住居跡	07	破片	古代初頭	ナデ	ナデ	壷の可能性
8	須恵器甕	胴部	住居跡	08	破片	古代初頭	同心円叩き	平行叩き	69と同一か、酸化焼成？二次的
9	須恵器甕	胴部	住居跡	09	破片	古代初頭	同心円叩き	平行叩き	70と同一か、酸化焼成？二次的
10	土師器甕？	口縁部	住居跡	10	1/7	古代初頭	横ナデ	横ナデ	
11	土師器甕？	口縁部	住居跡	11	1/5	古代初頭	ナデ	ナデ	
12	土師器甕	口縁～胴部	住居跡	12	1/6	古代初頭	風化	風化	
13	土師器甕	口縁部	住居跡	13	破片	古代初頭	ナデ	ナデ	
14	土師器甕	口縁～胴部	住居跡	14	1/9	古代初頭	横ナデ？	横ナデ？	
15	土師器甕	口縁～胴部	住居跡	15	1/5	古代初頭	ナデ	風化	
16	土師器甕	口縁部	住居跡	16	1/7	古代初頭	ナデ	横ナデ	
17	土師器不？	口縁部		17	1/10	古代初頭	風化	風化	
18	土師器甕	口縁部	住居跡	18	1/8	古代初頭	風化	風化	
19	土師器甕	口縁部	住居跡？	19	1/8	古代初頭	風化	風化	
20	土師器鉢	口縁部	住居跡No 5	20	破片	古代初頭	ナデ	風化	
21	土師器鉢	口縁部	住居跡	21	1/8	古代初頭	風化	ナデ？	
22	土師器高不	脚部	住居跡	22	1/4	古代初頭	削り、指頭押圧	風化	
23	土師器台不碗？	脚部	住居跡	23	3/4	古代初頭	ナデ、指頭押圧	ナデ、磨き？	
24	土師器甕	口縁部	住居跡	24	1/7	古代初頭	風化	風化	
25	土師器碗？	口縁部	住居跡	25	破片	古代初頭	縦ナデ	横ナデ	
26	土師器碗	口縁～胴部	住居跡	26	1/9	古代初頭	磨き	磨き？	内面丹塗りか
27	土師器鉢	口縁～胴部	住居跡	27	1/4	古代初頭	風化	風化	
28	土師器碗	口縁～胴部	住居跡	28	1/9	古代初頭	風化	風化	
29	土師器碗	口縁～胴部	住居跡	29	1/4	古代初頭	風化	風化	16と同一か
30	土師器甕	口縁～胴部	住居跡	30	1/7	古代初頭	ナデ	横ナデ	
31	土師器碗	口縁～胴部	住居跡	31	1/6	古代初頭	横ナデ	横ナデ	
32	土師器碗	口縁～胴部	住居跡	32	1/9	古代初頭	縦ナデ	縦ナデ	
33	土師器碗	口縁部	住居跡	33	破片	古代初頭	ナデ	横ナデ	1と同一か
34	土師器碗	口縁部	住居跡	34	破片	古代初頭	ナデ	ナデ	
35	土師器碗？	口縁部	住居跡	35	1/9	古代初頭	風化	風化	
36	土師器鉢	口縁部	住居跡	36	1/7	古代初頭	横ナデ	横ナデ	
37	土師器碗	口縁～胴部	住居跡	37	1/12	古代初頭	磨き？	ナデ	
38	土師器高坏？	口縁部	住居跡	38	1/10	古代初頭	横ナデ	横ナデ	
39	土師器鉢？	口縁～胴部	住居跡	39	1/10	古代初頭	横磨き	磨き？	高坏か
40	土師器碗	口縁～胴部	住居跡	40	1/10	古代初頭	ナデ？	ナデ？	
41	土師器甕	底部	住居跡	41	1/5	古代初頭	ナデ	風化（ナデ？）	
42	土師器甕？	底部	住居跡	42	1/4	古代初頭		ナデ？	
43	土師器甕	底部	住居跡	43	1/4	古代初頭		風化	
44	土師器甕	底部	住居跡	44	1/4	古代初頭	風化（ナデ？）	指ナデ	
45	土師器甕	底部	住居跡-P45	45	1/6	古代初頭	指頭ナデ	ナデ、刷目	
46	土師器甕	底部	住居跡	46	1/6	古代初頭	指頭ナデ	指頭ナデ	木の葉底
47	土師器甕	底部	住居跡	47	1/2	古代初頭	風化	風化	
48	土師器甕	底部	住居跡	48	1/2	古代初頭	指頭押圧	風化（ナデ？）	
49	土師器甕	底部	住居跡	49	3/4	古代初頭	風化	風化	
50	土師器碗	底部	住居跡	50	1/1	古代初頭	風化	風化	
51	土師器鉢	取っ手、底部	住居跡	51	1/3～3/3	古代初頭	風化	風化	器形不明瞭
52	土師器甕	胴部～底部	住居跡No 8	52	1/4	古代初頭	ナデ	風化	墨書

第31表　八児遺跡遺物一覧表(2)

	器種等	部位	出土遺構	実測図番号	遺存度	時期	内面調整	外面調整	備考
53	土師器蓋	天井部（つまみ）	住居跡	53	1/4	古代初頭	ナデ	ナデ	
54	土師器坏		住居跡No 5	54	口縁部1/5欠	古代初頭	風化	風化	黒斑
55	土師器坏	口縁～胴部	住居跡	55	1/7	古代初頭	横ナデ	横ナデ	
56	土師器手づくね鉢		住居跡	56	完形	古代初頭	風化	風化	
57	土師器坏	口縁部	住居跡	57	1/8	古代初頭	風化	風化	
58	土師器坏	口縁部	住居跡	58	1/5	古代初頭	横ナデ	横ナデ	黒斑
59	土師器碗	口縁～胴部	住居跡	59	1/8	古代初頭	ナデ	ナデ？	9と同一か
60	土師器皿？	底部	住居跡	60	1/3	平安～中世	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り底
61	須恵器甕	胴部	溝	61	破片	古代初頭？	ナデ	平行叩き	
62	須恵器甕	胴部	溝	62	破片	古代初頭？	同心円叩き	格子叩き	
63	須恵器甕	同部	土壙3	63	破片	古代初頭？	叩きナデ消し	格子叩き	
64	土師器甕	口縁部	溝	64	破片	古代初頭？	ナデ？	ナデ？	
65	土師器甕	口縁部	溝	65	破片	古代初頭？	ナデ	風化	
66	土師器皿		溝	66	1/2	中世	ナデ	ナデ	糸切り底
67	青磁	底部	溝	67	1/6	中世			輸入
68	土師器皿	底部	土壙2	68	1/6	中世	ナデ	ナデ	糸切り底
69	須恵器	胴部		69	破片	古代初頭？	同心円叩き後ナデ	格子叩き	
70	土師器碗	口縁部		70	1/7	古代初頭？	風化	風化	
71	青磁碗	口縁部		71	破片	中世			内面連弁
72	土師器壺	頸部	柱穴P-34	72	1/6		横ナデ	風化	
73	土師器皿		土壙墓	73	ほぼ完形	古代末	横ナデ、指頭押さえ	横ナデ	ヘラ切り底
74	白磁合子		土壙墓	74	ほぼ完形	古代末	ナデ	削り	かんにゅう有り
75	不明鉄器		土壙墓	75		古代末			鉄No 1
76	刀子		土壙墓	76	切先欠損	古代末			鉄No 5
77	鉄鏃	刃部	土壙墓	77	刃部ほぼ完形	古代末			鉄No 2、木質、繊維質付着
78	銅鈴		土壙墓	78	一部欠損	古代末			銅鈴No 2
79	銅鈴		土壙墓	79	完形	古代末			銅鈴No 3、丸1個
80	銅鈴		土壙墓	80	完形	古代末			銅鈴No 4、丸1個
81	鉄鈴		土壙墓	81-a	一部欠損	古代末			鉄鈴No 1、丸1個、81-a,b,cは錆着
82	銅鈴		土壙墓	81-b	縁欠損	古代末			銅鈴No 5
83	鉄鈴		土壙墓	81-c	縁欠損	古代末			鉄鈴No 5、丸1個
84	鉄鈴		土壙墓	82	完形	古代末			鉄鈴No 2、丸2個？
85	鉄鈴		土壙墓	83	完形	古代末			鉄鈴No 3、木質付着、丸1個
86	鉄鈴		土壙墓	84	縁欠損	古代末			鉄鈴No 4、丸1個
87	鉄鈴		土壙墓	85	完形	古代末			鉄鈴No 6（鉄No 5）、丸1個
88	鉄鈴		土壙墓	86-a		古代末			鉄鈴No 7、丸1個　86-a～eは錆着
89	鉄鈴		土壙墓	86-b		古代末			鉄鈴No 8、丸1個
90	鉄鈴		土壙墓	86-c		古代末			鉄鈴No 9、丸1個
91	鉄鈴		土壙墓	86-d		古代末			鉄鈴No10、丸1個
92	鉄鈴		土壙墓	86-e		古代末			鉄鈴No11、丸1個
93	遊州鏡		土壙墓	87	完形	古代末			鏡面木質付着
94	石鍋		土壙墓	88	一部欠損	古代末			補修有り、4耳、副葬時底部穿孔？
95	小型石鍋		土壙墓	89	完形	古代末	削り	削り	4耳、すす付着、内部に鉄片
96	土師器皿	底部	土壙2	◎	破片	中世	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り底？
97	土師器皿	底部	土壙2	◎	破片	中世	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り底
98	土師器皿	底部	土壙3	◎	破片	中世	横ナデ	横ナデ	糸切り底
99	土師器皿	底部	土壙3	◎	破片	中世	横ナデ	横ナデ	糸切り底
100	土師器皿	底部	土壙3	◎	破片	中世	横ナデ	横ナデ	糸切り底
101	土師器皿	底部	柱穴P-5	◎	破片	中世	風化	風化	
102	土師器皿	底部	柱穴P-6	◎	破片	中世	ナデ	ナデ	糸切り底
103	土師器皿	底部	柱穴P-60	◎	破片	中世	ナデ	ナデ	糸切り底
104	土師器皿		柱穴P-59	◎	破片	中世	ナデ	ナデ	糸切り底

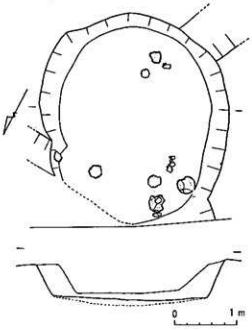
第2節　第Ⅱ区の調査

遺構

２次調査で検出されたのは、２条の溝状遺構と土師質の坏・皿類を多量に包含する土壙などである。溝状遺構は２条検出されたが、一条は幅約１ｍ、深さ30～40㎝で調査区を斜めにほぼ東西方向へ直線的に横断し、もう一条は最大幅約1.5ｍ、深さ40～45㎝で弧状を呈している。この弧状の溝状遺構は、直線的な溝状遺構に接する地点で先細りに浅くなり終局している。直線的な溝は、やや東向きの勾配をもち、弧状の溝も西から東へやや深くなる勾配を示す（第61図）。いずれも溝の延長は確認されていないが、地形的にも東向きに小河川へと緩やかに向かうことから、ことに直線的な溝は小河川へ向かって掘削されたものであろう。

土師質坏・皿を多量に包含した土壙は、長軸約1.7ｍ、短軸1.5ｍのやや楕円形を呈し、検出面での最も深い部分で約40㎝の規模を持つ（第60図）。

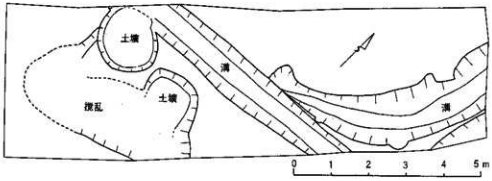
その他、攪乱坑と切り合い全体形は不明であるが、土坑が少なくともう１基存在した痕跡が確認されている。



第60図　八児遺跡土壙実測図(1/3)

遺物

出土した遺物は、土師質土器、陶磁器、土錘、軽石製品などである。



第61図　八児遺跡遺構実測図(1/50)

土師質土器

出土した素焼きの土器は、土師質の小皿、坏類（第62・63図１～31）が中心である。小皿、坏の底部切離しは、すべて糸切り底であり、ヘラ切り底は一点も見られない。小皿（第62図１～８）の底部は比較的厚く、口縁部は先細りにつまみ上げで整形される。小皿の法量の規格性（第　図）は、口径6.6㎝から7.7㎝との間にある。器高は1.2㎝から1.8㎝の間に収まり、すべて２㎝以下である。色調は、橙色が中心であるが、黄灰色の焼きも見られる。

一方、坏（第62・63図９～31）の法量は口径1.1㎝から13.9㎝と若干のばらつきが見られるが、おおむね口径13㎝前後に集中する。器高は3.3㎝から4.1㎝の間に収まり、統一的である。色調は、橙色が中心であるが、黄灰色の焼きも見られる。整形技法の上からは、口縁部が直線的に立ち上がるものと、若干の内湾を示すものに分類できるが、全体的には先細りに整形される。

その他素焼きの土器としては、甕形土器（第63図32）が見られる。また、瓦質の土器として４か所に低足の付いた鉢形土器（第64図59）が見られる。

陶磁器

陶磁器類では、青磁（第63図37～42）、白磁（第63図43～44）、染付（第64図47～53）等が出土している。第　図37と38は同一個体とみられるが、やや大振りの碗で線描きの蓮弁文が見られる。第63図39から41は、見込みに印花文が施されている底部片である。白磁は口縁部が肥厚し、小さな玉縁状を呈する。

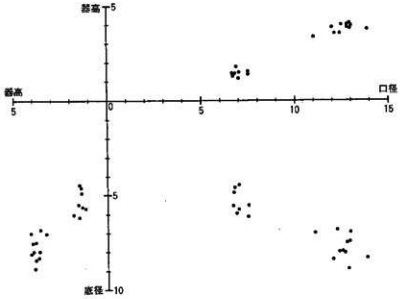
染付には47・49の皿、50から53の碗類がある。

軽石製品

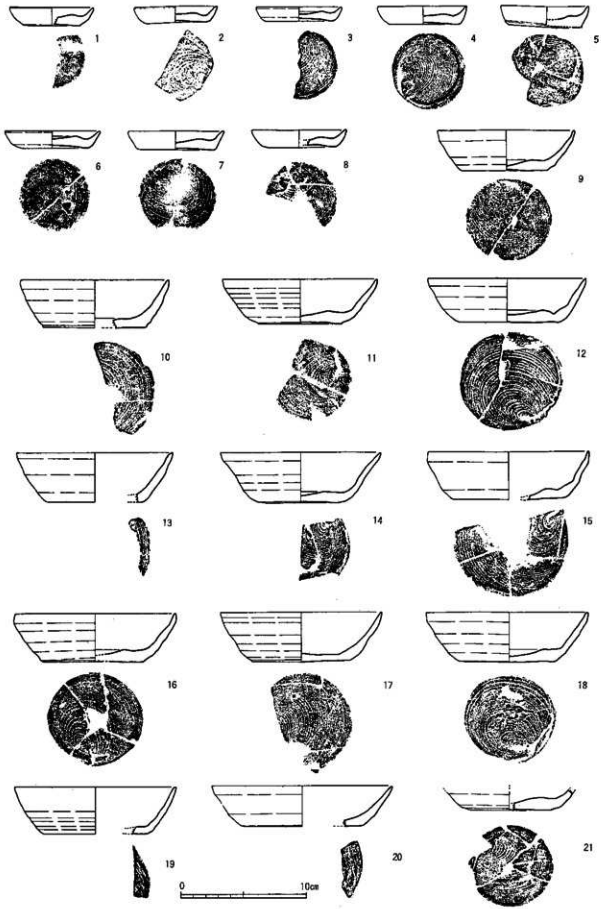
長さ11.4㎝、最大幅９㎝、最大厚6.5㎝の軽石の製品で、各面の内小口面は細かく面取りされ、上下面は平滑に広く面取りされている。（第64図63）。

土錘

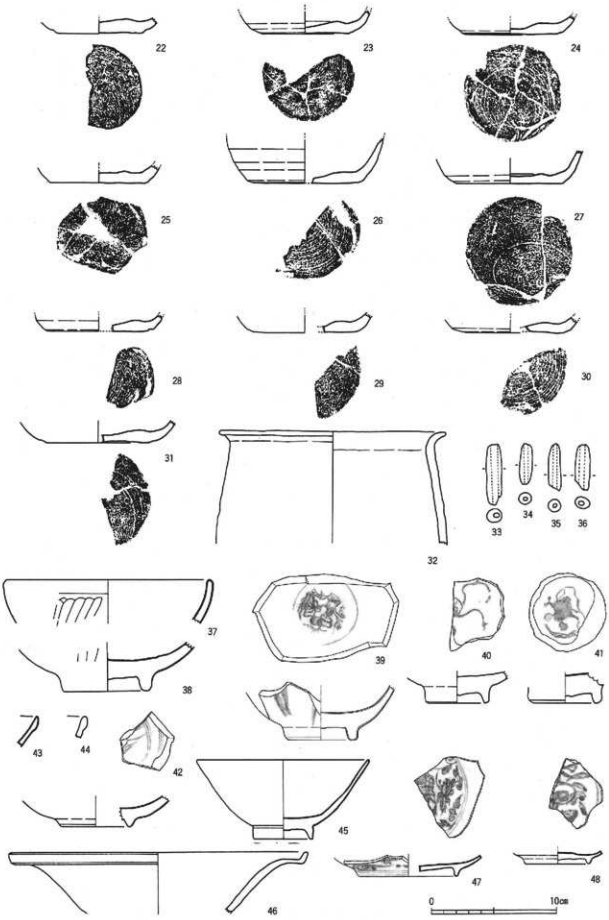
土錘は、４点出土している（第63図33～36）。



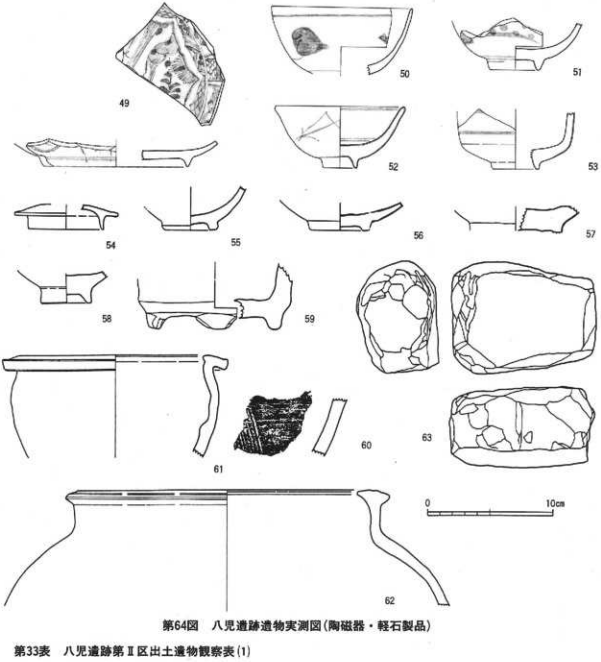
第32表　八児遺跡糸切り底土師質土器法量表(1/2)



第62図　八児遺跡遺物実測図(土師質土器)



第63図　八児遺跡遺物実測図(土師質土器・土錘・陶磁器)



第64図　八児遺跡遺物実測図(陶磁器・軽石製品)

第33表　八児遺跡第Ⅱ区出土遺物観察表(1)

No	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調		胎土	備考
1	小皿	(6.6cm)	1.45cm	(4.6cm)	(外)浅黄橙	(内)橙	1mm以下の赤褐色、黒色の砂粒を含む	糸切り
2	〃	(6.8cm)	1.3cm	(5.6cm)	(外)浅黄橙・浅黄	(内)浅黄橙	0.5mm以下の褐色、黒色透明で光る砂粒を含む	糸切り
3	〃	(6.9cm)	1.15cm	(5.7cm)	(外)橙	(内)橙	1mm以下の褐色の砂粒 0.5mm以下の黒くて光る、無色透明で光る砂粒を含む	糸切り
4	〃	(6.9cm)	1.5cm	(5.75cm)	(外)淡橙	(内)淡橙	0.5mm以下の無色透明で光る砂粒、褐色の砂粒を含む	糸切り
5	〃	(6.6cm)	1.8cm	6.2cm	(外)黄灰	(内)黄灰	褐色、無色透明で光る、黒くて光る微粒子を含む	糸切り
6	〃	(7.7cm)	1.4cm	5.9cm	(外)淡橙・浅黄橙	(内)淡橙	0.5mm以下の褐色、無色透明で光る砂粒を含む	糸切り
7	〃	(7.65cm)	1.5cm	(6.2cm)	(外)浅黄橙	(内)浅黄橙	2mm以下の褐色、灰色の砂粒含む。光る砂粒を含む	糸切り
8	〃	7.4cm	(1.5cm)	(5.7cm)	(外)橙	(内)橙	1mm以下の明赤褐色砂粒、0.5mm以下の黒褐色砂粒を含む	糸切り
9	杯	(11.0cm)	3.3cm	7.0cm	(外)浅黄橙	(内)浅黄橙	光る微粒子、 0.5mmの赤褐色、黒色・白色の細砂粒を含む(きめ細やか)	糸切り
10	〃	(11.9cm)	3.85cm	(8.4cm)	(外)にぶい橙	(内)淡橙	0.5mm以下の無色透明で光る砂粒、褐色の微粒子を含む	糸切り
11	〃	(12.2cm)	3.8cm	(6.75cm)	(外)橙	(内)橙	2mm以下の赤褐色、褐色、黒色の砂粒と1mm以下の透明で光る砂粒を含む	糸切り
12	〃	(12.4cm)	3.6cm	(8.2cm)	(外)浅黄橙	(内)黄橙	光る微粒子、0.5mmの灰色・赤褐色の細砂粒を含む(きめ細やか)	糸切り
13	〃	(12.5cm)	(4cm)	(7.4cm)	(外)浅黄橙	(内)浅黄橙	1mm以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り
14	〃	(12.9cm)	(4.1cm)	(7.9cm)	(外)橙	(内)にぶい橙	1mm以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り
15	〃	(12.65cm)	3.9cm	(8.9cm)	(外)浅黄橙	(内)浅黄橙	1mm以下の赤褐色、褐色の砂粒を含む	糸切り
16	〃	12.8cm	3.9cm	7.5cm	(外)浅黄橙・淡橙	(内)淡橙	光る微粒子、茶色などの細砂粒を含む(きめ細やか)	糸切り

第34表　八児遺跡第Ⅱ区出土遺物観察表(2)

No.	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	備考
17	〃	(12.6cm)	4.0cm	(8.0cm)	(外)浅黄橙　(内)浅黄橙	光る微粒子、0.5mm の赤褐色の雲母粒を含む(きめ細やか)	糸切り
18	〃	(12.6cm)	4.0cm	7.1cm	(外)橙　(内)橙	光る微粒子 0.5mm大の赤褐色、灰色の雲母粒を含む(きめ細やか)	糸切り
19	杯	13.9cm	(3.3cm)	8.3cm	(外)浅黄橙　(内)浅黄橙	1mm以下の赤茶色の砂粒を少し含む	糸切り(?)
20	〃	(14.4cm)	(3.25cm)	(9.8cm)	(外)灰白・灰黄褐　(内)褐灰	0.5mm以下の黒灰色の砂粒(きめ細い)を多く含む	糸切り(?)
21	〃			6.8cm	(外)橙　(内)橙・浅黄橙	0.5以下の赤茶色の砂粒を含む(きめ細やか)	糸切り
22	〃			(7cm)	(外)浅黄橙　(内)浅黄橙	1mm以下の赤褐色砂粒、2mm以下の褐色砂粒 1mm以下の黒く光る柱状砂粒を含む	糸切り
23	〃			(7.2cm)	(外)にぶい橙　(内)にぶい橙	0.5mm以下の褐色、無色透明で光る砂粒を含む	糸切り
24	〃			(7.45cm)	(外)橙　(内)橙	1.5mm以下の赤褐色、乳白色、褐色、黒色の砂粒と0.5mm以下の金色に光る砂粒を含む	糸切り
25	〃			(7.7cm)	(外)浅黄橙　(内)浅黄橙	1mm以下の赤褐色、黒褐色、褐色の砂粒を含む	糸切り
26	〃			8.4cm	(外)橙　(内)橙	0.5以下の赤茶色、黒灰色の砂粒を含む(きめ細やか)	糸切り
27	〃			8.5cm	(外)浅黄橙　(内)浅黄橙	光る微粒子、0.5～1mm大の赤褐色の砂粒含む(きめ細やか)	糸切り
28	〃			8.8cm	(外)橙　(内)橙	0.5以下の黒灰色、赤茶色の砂粒を含む(きめ細やか)	糸切り
29	〃			(8.5cm)	(外)浅黄橙　(内)浅黄橙	0.5mm以下の赤褐色砂粒、0.5mm以下の黒く光る砂粒 0.5mm以下の乳白色砂粒を含む	糸切り
30	〃			(7.6cm)	(外)橙　(内)橙	2mm以下の明赤褐色砂粒を含む	糸切り
31	〃			(8.4cm)	(外)浅黄橙　(内)浅黄橙	1mm以下の赤褐色、褐色の砂粒を含む	糸切り
32	甕	(17.8cm)			(外)浅黄橙・灰黄褐　(内)浅黄橙	1～4mmの褐色、灰褐、乳白色の砂粒・粒、黒く光る細片少量含む	
33	土師				(外)灰白・橙	通例、黒く光るガラス質の細片少量 0.1～0.5mmの乳白色、茶色の雲母粒少量含む(きめ細やか)	
34	〃				(外)淡赤橙	雲母粒含む	
35	〃				(外)淡赤橙・淡橙	(きめ細やか)、0.1mmぐらいの雲母粒少量含む	
36	〃				(外)淡橙・浅黄橙	0.1～1mmの灰白、褐色の砂粒少量、光る微粒子少量含む(きめ細やか)	
37	鉢	(16.1cm)			輪　明オリーブ灰　　胎土　灰白	精　良	弥　生 (37-38同一個体)
38	〃			6.6cm	輪　(外)明オリーブ灰・黄褐 (内)明オリーブ灰　　胎土　灰白・にぶい黄橙	精　良	〃
39	〃			5.8cm	輪　(外)明緑灰 (内)明緑灰　　胎土　灰白	精　良	〃
40	〃			(4.4cm)	輪　オリーブ灰　　胎土　灰白	精　良	〃
41	〃			5.3cm	胎土　灰白	精　良	〃
42	〃			(5.6cm)	胎土　灰白	精　良	〃
43	〃				輪　(外)灰白　(内)灰白	精　良　0.5mm以下の明赤褐色粒を含む	白　磁
44	〃				(外)灰白　(内)灰白	精　良	〃
45	〃	(13.0cm)	6.4cm	(4.7cm)	輪　(外)浅黄・明褐灰 (内)浅黄　　胎土　(外)灰白 (内)灰白	精　良	〃
46	〃	(23.8cm)			輪　(外)浅黄 (内)浅黄　　胎土　灰白	精　良	〃
47	皿			(7.8cm)	胎土　灰白	精　良	染　付
48	〃			(5.3cm)	胎土　にぶい橙・黄	精　良	〃
49	〃			(11.6cm)		精　良	〃
50	鍋	(11.35cm)			胎土　灰白	精　良	〃
51	〃			(3.6cm)	胎土　灰白	精　良	〃
52	〃	(10.3cm)		(2.75cm)	胎土　灰白	精　良　1mm以下の褐色、黒色の砂粒を含む	〃
53	〃			(3.6cm)	胎土　灰白・灰褐	精　良　1mm以下の赤褐色、黒色の砂粒を含む	〃
54	壺	(6cm)			(外)灰赤　　(内)明褐灰	2mm以下の褐色、赤褐色、黒色の砂粒を含む	
55	鍋			4.1cm	輪　(外)オリーブ黒 (内)オリーブ黒　　胎土　にぶい橙	精　良	
56	〃			(4.8cm)	輪　(外)灰白 (内)緑灰　　胎土　灰白	精　良	
57	〃				輪　(外)明オリーブ灰・灰白 (内)浅黄　　胎土　灰白・にぶい橙	精　良	
58	〃			4.1cm	輪　(外)灰褐 (内)灰褐　　胎土　浅黄	精　良	
59	鉢			(10.3cm)	(外)浅黄橙　　(内)浅黄橙	1mm以下の黒色、白色の砂粒を少し含む	瓦　質
60	すり鉢				(外)灰　　(内)灰	7mm位の褐色の粒と3.5mm以下の黒色、灰色の砂粒を含む	
61	甕	(15.0cm)			輪　(外)黄褐 (内)暗赤黄　　胎土　(外)褐灰 (内)褐灰	精　良	
62	〃	(26.2cm)			輪　灰赤　　胎土　灰赤	精　良	

第Ⅳ章　結　　語

Ⅰ～Ⅲ章において学頭遺跡、八児遺跡の内容を報告してきたが、両遺跡ともに道路幅に限った狭い範囲の調査であったために遺跡の全体像を把握することは困難であった。しかし両調査によって得られた資料には宮崎平野周辺の各時代の文化を考えるうえで貴重な資料が含まれていた。以下両遺跡にみられる遺構、遺物から気付かれた点を若干述べて結びとしたい。

学頭遺跡では明確な縄文時代の遺構は確認はされなかったものの、後期～晩期にかけての土器が多く出土している点と県内でも類をみない勾玉などの玉類が出土している点からみて、周辺にかなり有力な集団等の存在がうかがわれる。ただし、この玉類は時期を判断することが困難な出土状況であり、玉の形態、出土位置から今回は縄文時代の遺物として扱っている。またこの玉のなかでも勾玉と垂飾玉はその石材が糸魚川流域の原産である可能性が高い。

県内における縄文後期～晩期の遺跡はこれまでそのほとんどが河岸段丘上において確認されてきた。しかし、学頭遺跡は標高15m前後の微高地上に立地しておりこの点で注目される。県内では近年この様な微高地上の調査例が増加傾向にあり、今後の類例増加を待って再び検討したい。

弥生～古墳時代では弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が多くみられ、そのなかには瀬戸内地域との関係が何われる凹線文土器や矢羽透かしをもつ高杯なども少量含まれる。このような状況は周辺の同時期の遺跡でも確認されており、新田原遺跡ではいわゆる花弁状住居との密接な関係が指摘されている。矢羽透かしと円形透かしを組み合わせたものは県内では初例で、瀬戸内では備後地方に類例がみられる。

遺構では周溝状遺構が注目される。学頭遺跡において検出されたものは調査区の制約により周溝状遺構、周溝墓のどちらの可能性も考えられる。県内において周溝状遺構が確認された遺跡は日向市百町原遺跡、都農町新別府下原遺跡、川南町野稲尾遺跡、同町松ケ迫B遺跡、同町丸山西原遺跡、同町大迫遺跡、新富町鬼付女西遺跡、宮崎市熊野原遺跡A、C地区、都城市年見川遺跡、同市向原第一遺跡の10例が知られる。周溝墓が確認された遺跡は川南町東平下遺跡、新富町川床遺跡の２例のみである。

八児遺跡において注目されるものは土壙墓である。検出状況があまり良好ではないものの、そこに副葬された遺物は豊富なものであった。なかでも湖州鏡が全国的にも稀な隅入方鏡である点や鈴の存在は被葬者の性格や地位がいかなるものであったのか今後の類例増加を待ち、検討してみたい。

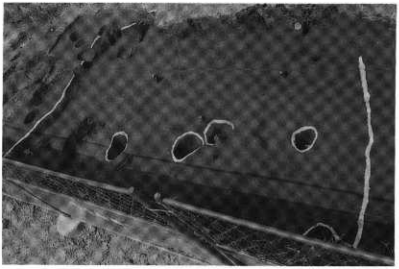
以上、学頭、八児遺跡においてみられる特徴的な事例をごく簡単にまとめたが、今回は諸般の事情により深く言及することはできなかった。しかしこの両遺跡において得られた資料は周辺地域における各時期の研究をすすめるうえで欠くことのできない資料であり、今後なんらかの形で取り上げていきたい。

最後に、現場で汗にまみれて作業してくださった方々や整理作業に関わってくださった方々、そのほかこの調査、報告に携わった皆様に心より感謝申し上げます。

図版1

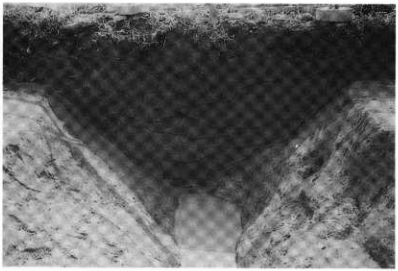
学頭遺跡遠景東から（中央はⅤ次調査）

学頭遺跡Ⅳ次調査遺構検出状況



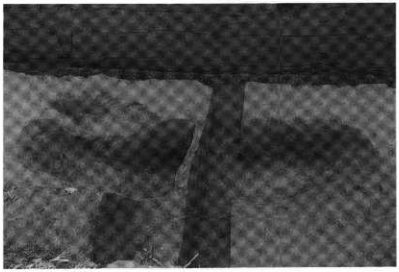
学頭遺跡 2 号住居跡
検出状況

学頭遺跡 1 号住居跡
検出状況

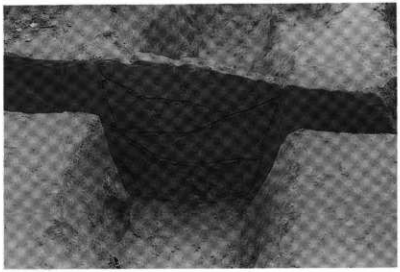


学頭遺跡 1 号溝状遺構
埋土堆積状況

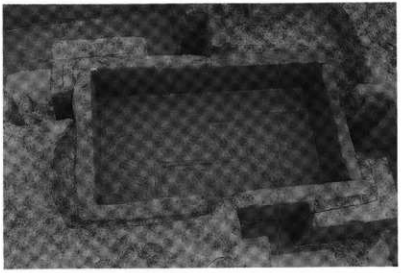
図版3



学頭遺跡１号土壙
検出状況



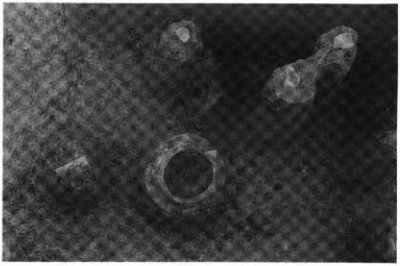
学頭遺跡１号土壙
埋土堆積状況



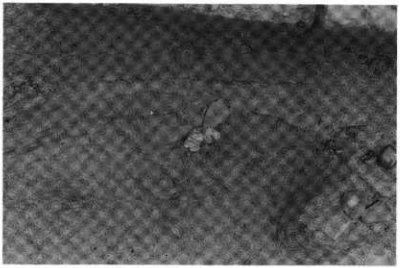
学頭遺跡切石組遺構
検出状況

図版4

学頭遺跡周溝状遺構
及び13号溝状遺構検出状況



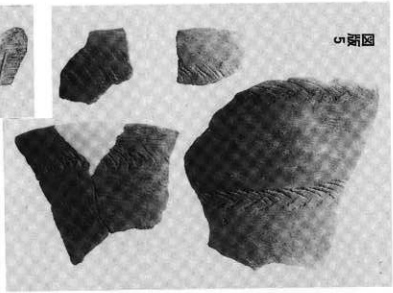
学頭遺跡周溝状遺構内
土器出土状況



学頭遺跡勾玉出土状況

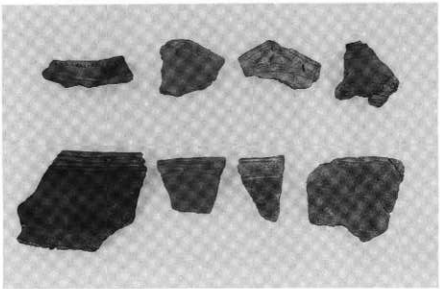
1～3、上表、下裏

4～6

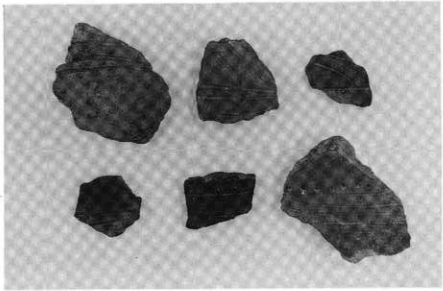


5 新図

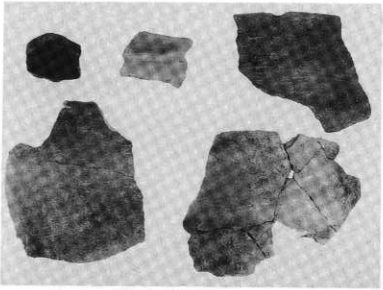
右上 7～8
右下 9～10



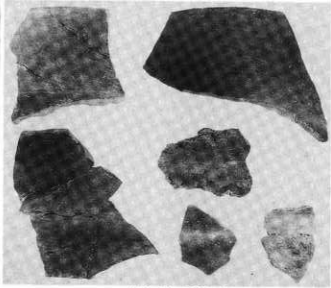
上11～14、下15～18



上19～21、下22～24



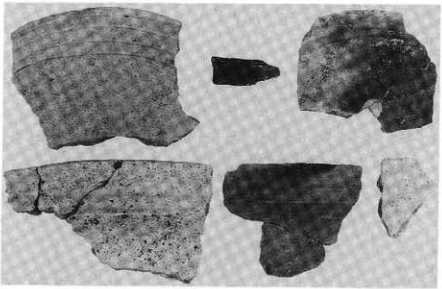
上25～27、下28～29



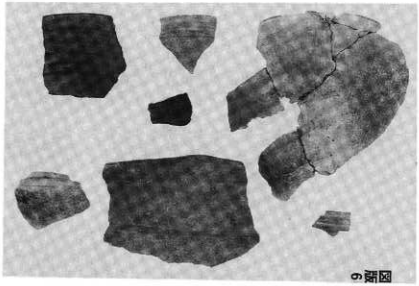
上30～31、下32～35

36

40～43

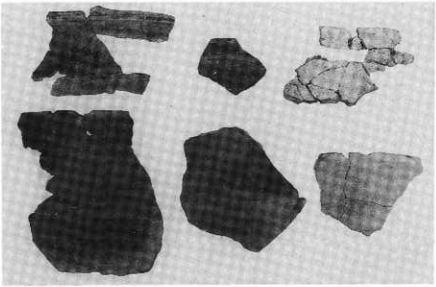


上38・37・39、下44～46

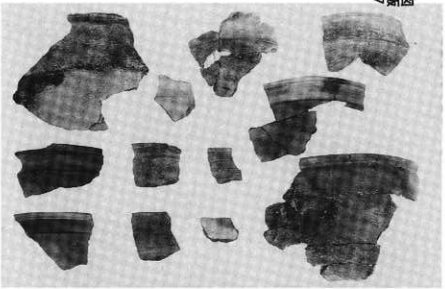


上47～48・50、中49、下51・53～54

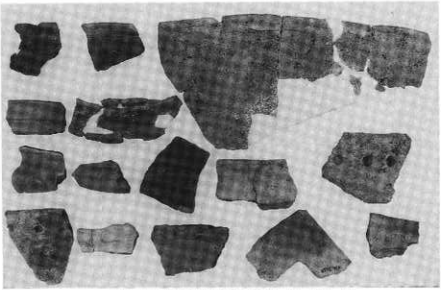
図版7



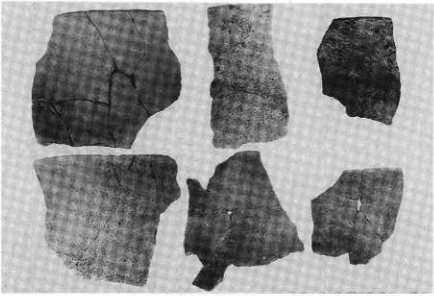
上56～58、下59～61



上62～65、中67・69～70・66、下68・71～73



上75・74・76その下78～79、中80～84、下85～89

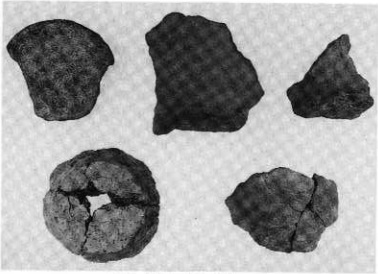


上90・92・94、下91・93・95

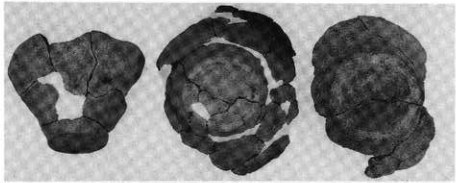
55・52

96～98

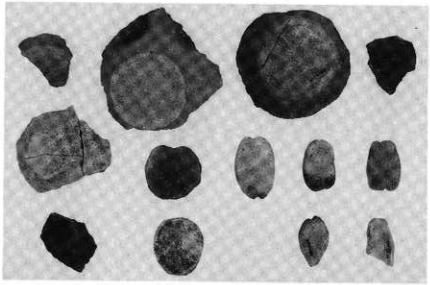
99



上100～102、下103～104

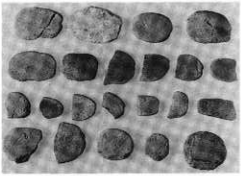


上下とも105～107

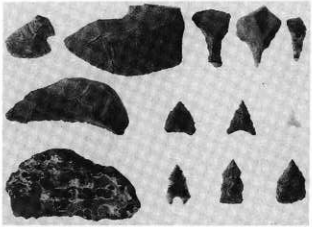


上108～111、中112・114・116～118、下113・115・119～120

図版9



上 121～124、中上125～130
中下131～137、 下 138～142

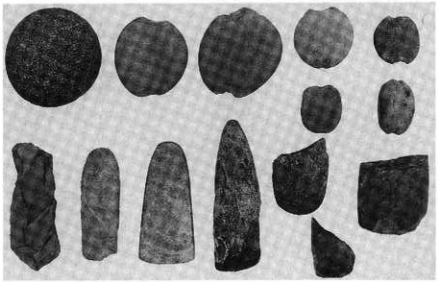


上15～16・19～21
中17・22～24
下18・25～27

28～33

34　35

36～37

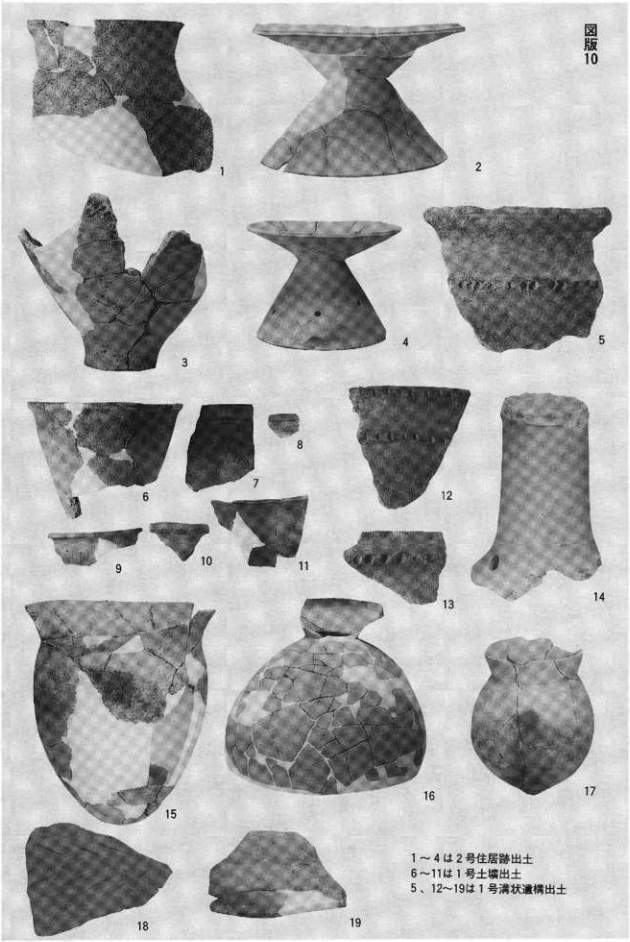


上1～7、下8～14

上38～41
下42～44

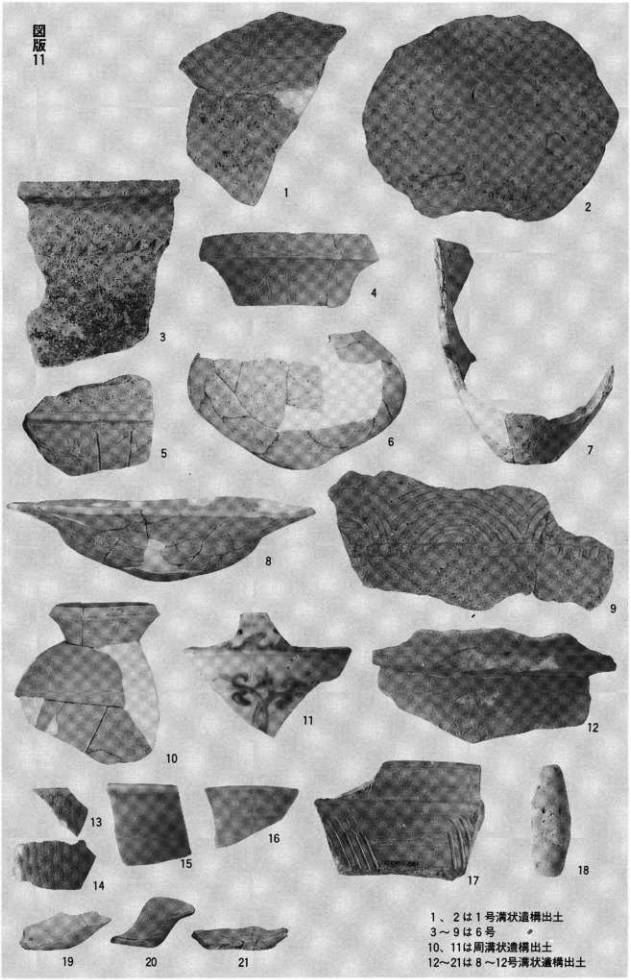
45・46・47・48

49

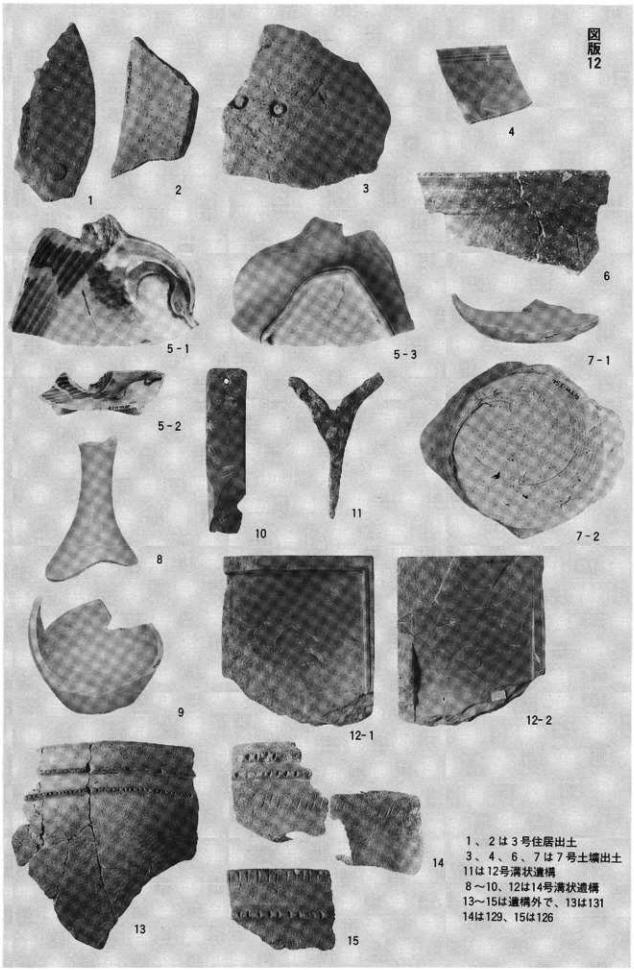


1～4は2号住居跡出土
6～11は1号土壙出土
5、12～19は1号溝状遺構出土

図版11

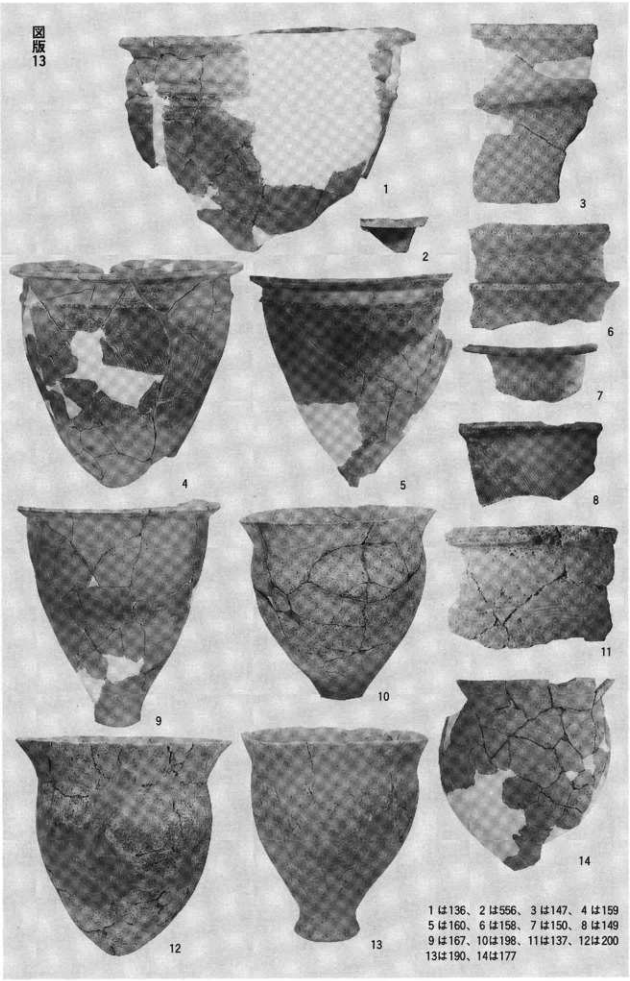


1、2は1号溝状遺構出土
3～9は6号　〃
10、11は周溝状遺構出土
12～21は8～12号溝状遺構出土



1、2は3号住居出土
3、4、6、7は7号土壙出土
11は12号溝状遺構
8～10、12は14号溝状遺構
13～15は遺構外で、13は131
14は129、15は126

図版13



1は136、2は556、3は147、4は159
5は160、6は158、7は150、8は149
9は167、10は198、11は137、12は200
13は190、14は177